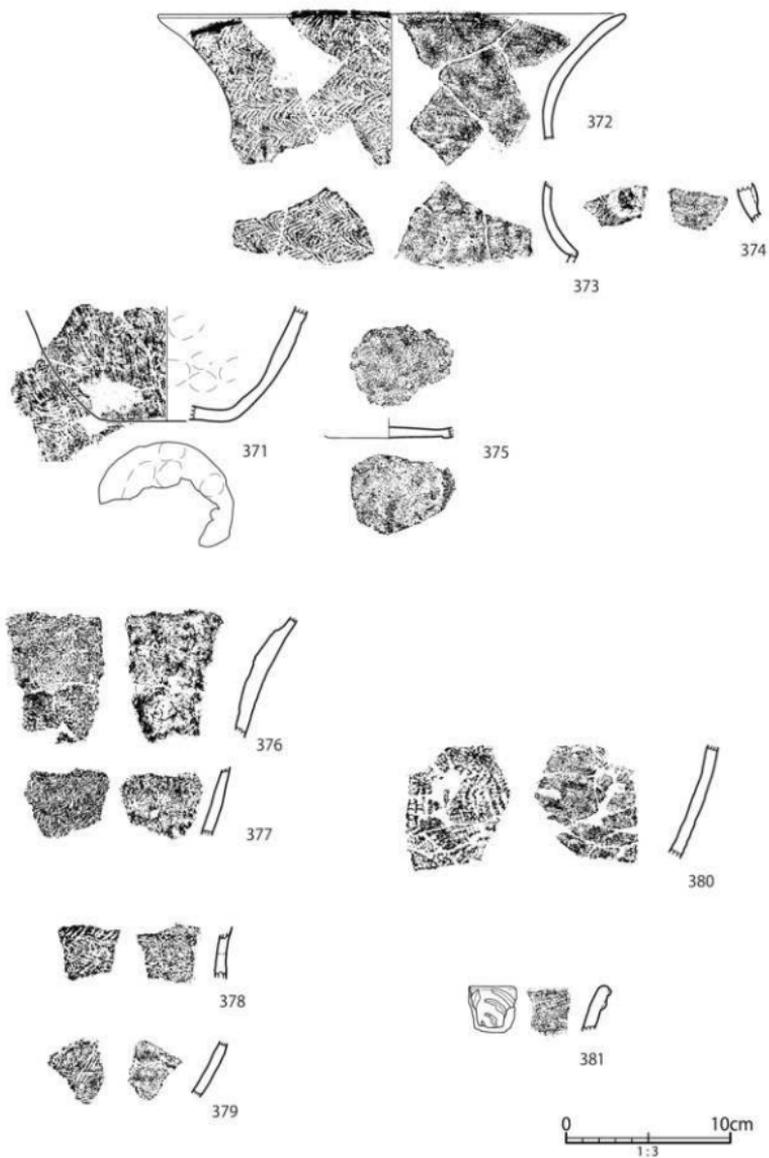
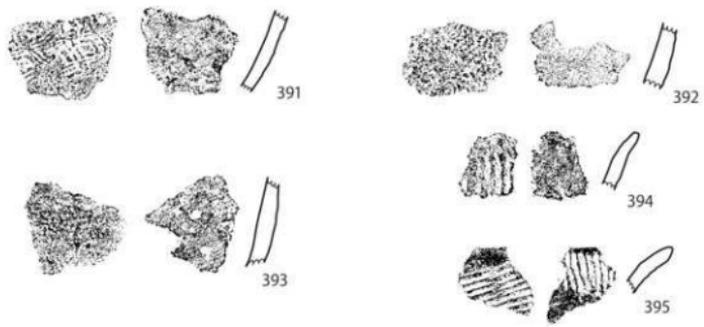
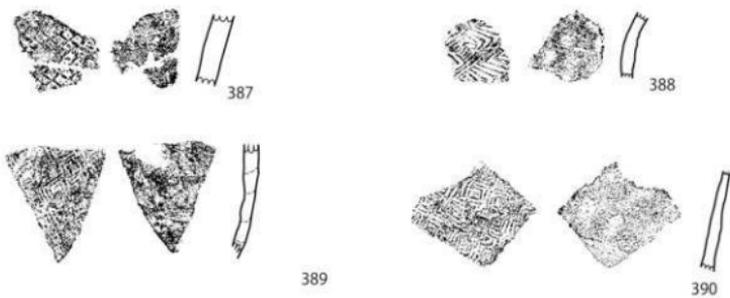
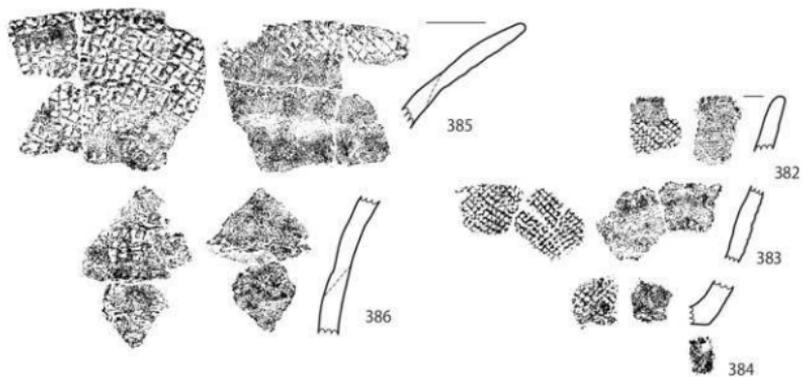


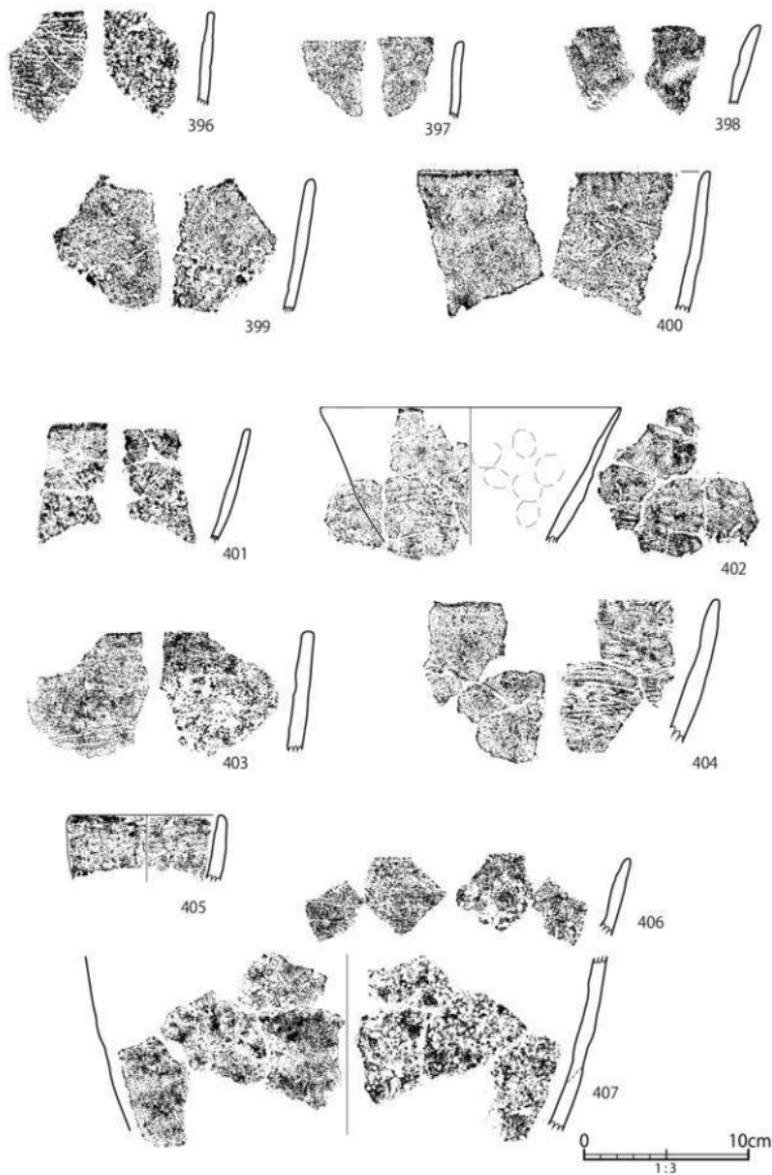
第72図 縄文時代早期土器実測図(8)



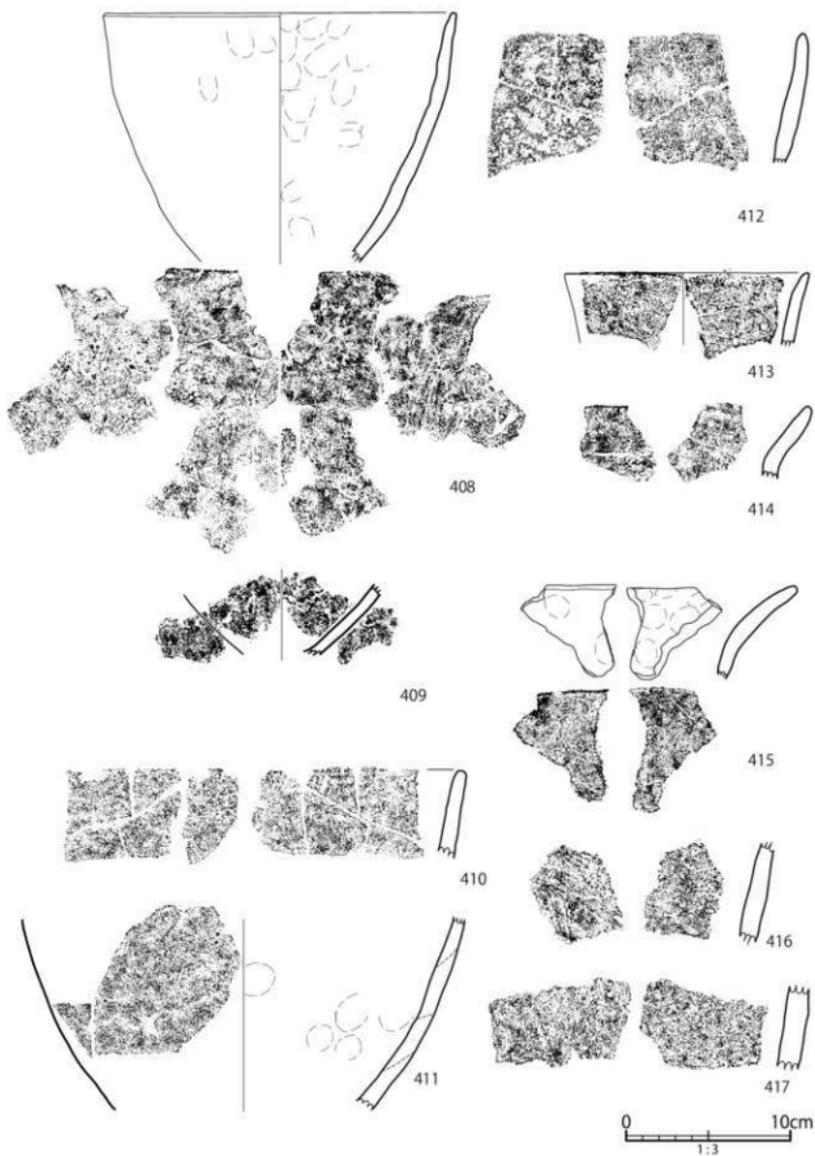
第73圖 縄文時代早期土器実測図(9)



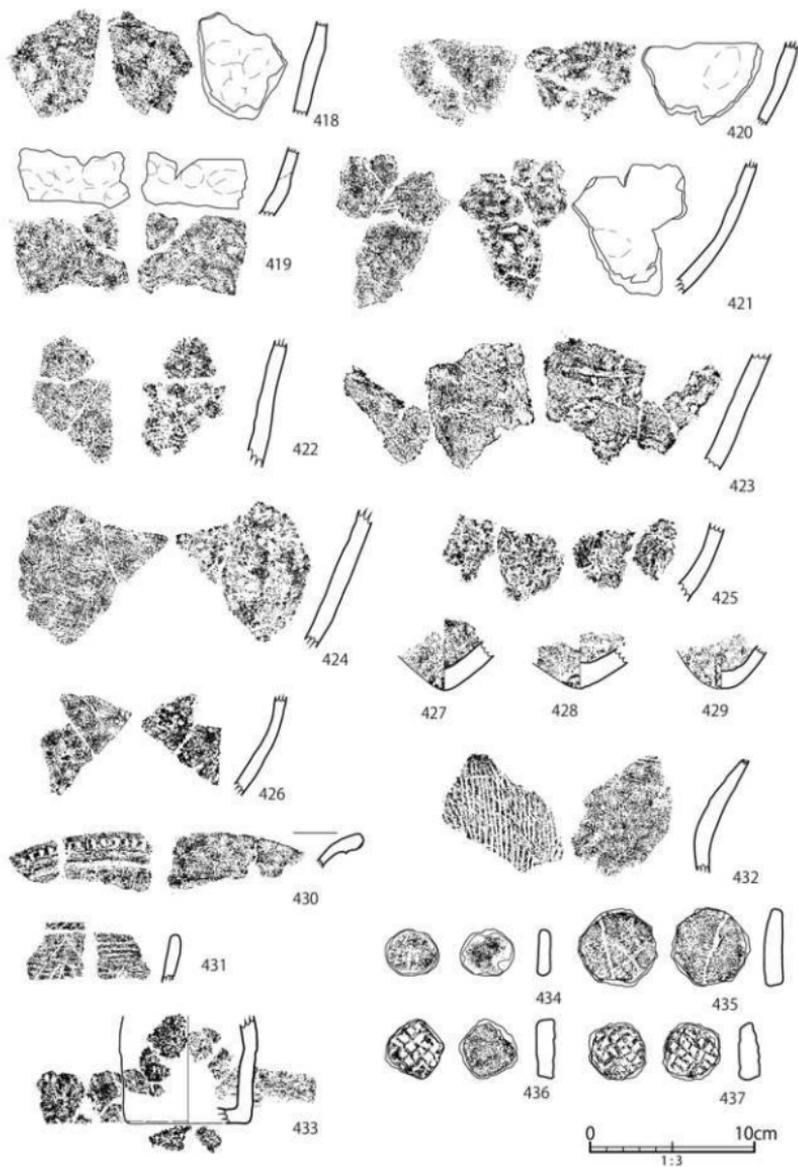
第74圖 縄文時代早期土器実測図(10)



第75図 縄文時代早期土器実測図(11)



第76図 縄文時代早期土器実測図(12)



第77圖 縄文時代早期土器実測図 (13)

## (2) 石器 (第78回～第90回438～871)

石器は早期遺構ならびにⅢb層(KAH)下位から石鏃、石斧、礫器、敲石、台石等が299点出土している(第7表)。本書には製品を中心に161点を掲載した。

以下、器種別に報告する。

### 石鏃 (第78回438～472)

石鏃は無製品・欠損品を含めて35点が出土しておりすべて図化した。石材別に見るとチャート製16点、黒曜石製11点、その他の石材が8点となっている(第79図)。黒曜石を産地別に見ると、11点中7点が桑ノ木津留産黒曜石、2点が姫島産黒曜石となり、後述する縄文時代晩期の石鏃と比較するとその割合に明確な違いが見られる(第132図参照)。また、462、467～469、471の5点は集石遺構埋土中からの出土である。

438～441は、平面形が概ね正三角形及び二等辺三角形で、基部にアーチ状の浅い切り込みを有するものである。438と439は2点とも桑ノ木津留産黒曜石製で他の石鏃と比較しても非常に小形である。438は表裏両面からの細かい調整が確認できるが、439は表裏両面に素材剥片の剥離面を大きく残し、周縁部のみに調整を施している。440はチャート製で、表面の中央部分に厚みがあるが、裏面は剥離により平たく加工されている。441はチャート製で、表裏両面とも中央部分に厚みがある。

442～460は、平面形が概ね正三角形及び二等辺三角形で、U字形の深い切り込みを有し、脚部を作り出すものである。443は先端を鋭く尖らせ、側縁部に鋸歯状の加工が施されている。左側縁から脚部にかけて欠損している。444、448は安山岩製で大きさ・形状とも似通っている。445はチャート製で、両側縁がやや外側に膨らみ丸みを帯びている。断面形は薄く、裏面は素材剥片の剥離面を大きく残している。446はホルンフェルス製で、風化が激しい。451はチャート製で先端部が先細りし尖っている。453は両側縁部の脚部に近い位置に切り込みが施されている。先端部は欠損しているが、残存部から比較的大形の石鏃と推察される。460は桑ノ木津留産黒曜石製の欠損品で、長い脚部を有する石鏃である。

461～467は平面形が概ね正三角形や二等辺三角形のもので、基部に切り込みのない形状のものである。462は桑ノ木津留産黒曜石製で、全体的に厚みがなく扁平で、両面からの調整が施されている。463は玉髓製で、研磨痕は確認できないが、裏面の中央部分が研磨を受けたかのように滑らかな面となっており、稜が磨滅している。466は水晶製で微量の不純物が含まれる。左側縁部が欠損している。表裏両面からの剥離が施されているが全体的に調整は粗い。467はチャート製で、全体の調整が粗く未製品の可能性もある。

468～472はその他の形態を示すものである。468は安山岩製で、側縁に屈曲点を持ち全体の形状が概ね五角形を呈するものである。また基部にはU字形の切り込みを有する。469は姫島産黒曜石製で、脚部がやや外側に反っている。470はチャート製で、下半部に最大幅を有する縦長の二等辺三角形を呈し、断面が扁平で薄く、基部に浅い切り込みが入っている。471はホルンフェルス製の横長剥片を素材とし、裏面に主要剥離面が残る。470に似た形状ではあるが、右側面が素材剥片の打面となっており、基部は幅がやや広く厚みがある。472は珪質頁岩製で、先端部から側縁にかけて表裏両面からのやや粗い剥離による調整が見られる。下端部が欠損し、両面とも基部に近い位置に素材剥片の剥離面が残され石鏃未製品と推察される。

なお、これらの石鏃製作に伴うと考えられる剥片類についてはチャートと黒曜石がその殆どを占め、いずれも調査区の南端と北端で多く出土する傾向が見られる。チャートの剥片は総重量3742gでホルンフェルス製の剥片を除き、剥片全体の中で61%、黒曜石は総重量が2291gで剥片全体の38%である。黒曜石の剥片を産地別に見ると、桑ノ木津留産黒曜石が66%を占め、打製石鏃への利用は確認されていないが日東産黒曜石が13%と続く。その他の黒曜石は微量にしか確認されない。また、18Grより1.4gの水晶の剥片が1点、L4Grより2.4gの玉髓の剥片1点が出土している。チャート、黒曜石、その他の石材の剥片類の出土範囲は、同一石材の石鏃が出土している範囲とほぼ重なっている。

#### 研磨のある石器 (第80図473)

473は不定形の剥片を素材とし、細かな調整は見られない。正面上部に微細な研磨痕が観察され、研磨により滑らかな面が作出されている。

#### 二次加工剥片 (第80図474、480)

474は腹岳産黒曜石を素材とした二次加工剥片で、右側縁部に微細な剥離による調整が見られる。480はホルンフェルス製の大形の剥片を利用している。正面に大きく自然面、裏面は主要剥離面を残しながら正面右側に二次加工を施している。石器の風化は激しい。

#### 異形石器 (第80図475)

475は黒曜石の剥片を素材とし、一見すると石鏃の脚部のような形状である。周縁を巡るように細かな調整が施されており、中央部分は浅く内湾する。先端部は緩く尖り、末端部は円く加工している。正面の平坦面の縁が弱減し滑らかな面となっているが、線状痕は確認できない。

#### 石錘 (第80図476～479)

石錘は5点出土し、4点を図化した。476～478は砂岩製で476は集石遺構埋土中からの出土である。477と478はいずれも扁平な円礫を素材としており、短軸の両端を打ち欠いている。

479は尾鈴山酸性岩類製であり、扁平な円礫を素材とし長軸の両端を打ち欠いている。

#### 打製石斧 (第80図481～485)

打製石斧は10点出土し、そのうち5点を図化した。打製石斧は、すべてホルンフェルス製である。

481は、素材となる剥片の周縁に二次加工を施して円形に調整し、中心に貫通孔を有する環状石斧である。およそ半分が欠損しているものと推察される。表面の風化が激しく、剥離の際に生じた稜は磨滅している。扁平で最大厚は1.0cm、断面形は周縁部を先細りに加工している。なお、内孔断面は正面の平坦面に対して垂直である。

482～485は自然礫や剥片を素材とする打製石斧である。482は正面に自然面を大きく残り、裏面を剥離により扁平に整形している。先端部は表面からの調整により刃部が形成されている。483は剥離による整形が施され、断面形は肉厚で楕円形を呈する。

484は打ち割られた礫の形状を利用し、上下両端部のみ加工が施されている。485は上半が欠損している。表裏両面より、周縁を巡るように二次加工が施されている。

#### 礫器 (第80～84図486～526)

486～526は、素材となる自然礫や剥片の一部に打撃を加え、簡単な加工を施したものである。73点出土し39点を図化した。石材は71点がホルンフェルス製、524、525の2点が砂岩製である。

486～502、503、505は平面形や円盤状を呈する礫器である。片方の面に自然面を大きく残した分割礫を素材とし、周縁に二次加工が施されている。

504、506～513、515、519も平面形や円盤状を呈する礫器であるが、表裏両面を剥離によって整形し、自然面を殆ど残さず周縁部に二次加工を施している。また、513、515、519は最大長が10cmを超え、円盤状の礫器の中では大形のものである。

518は不定形の剥片をそのまま利用し、礫の上端に二次加工が施されている。また、右側面に帯状に自然面が残される。

516、517、520は縦長の剥片を利用し、片方の面に自然面を大きく残りながら、側縁に二次加工を施している。

521～526は自然礫を素材とし、先端や側縁を粗く剥離した後、二次加工を施している。

#### 敲石・磨石類 (第85～88図527～585)

礫の周縁や平坦面に敲打による凹凸痕や磨痕が認められるもので、108点出土し59点を図化した。石材は71点が砂岩製で敲石・磨石全体の66%を占めている。残りは尾鈴山酸性岩類製が32%、ホルンフェルス製が2%となっている。

527～541は平面形が棒状もしくは縦長の円礫で、断面がおおむね円形や楕円形を呈するものである。これらの敲石は主に礫の長軸両端部に敲打痕が認められるものである。529は正面上に線状痕が確認できる。533は上下両端部に強い凹打痕が認められ、断面形は扁平で上端と右側縁には剥離による調整が見られる。536は平面形がおおよそ長方形である礫の4つの角に敲打痕が確認できる。正面下の2つの角は、強い凹打により凹みが深くなっている。539は欠損

品であるが、礫の両側のほぼ同じ位置に強い敲打により、凹みが深くなった敲打痕があり、正面の平坦面と先端部にも敲打痕が認められる。

542～559は礫の平面形が円形や楕円形のもので、礫の平坦面の一部に敲打の集中による凹みが認められるものである。これらは「凹石」と呼称される場合もある。548、551～553、555、557～559については礫の周縁部にも敲打が見られる。542は礫の表裏両面にそれぞれ凹みが並列して集中する箇所が認められ、凹み同士の切り合いも確認できる。同じく551、554、558、559にも敲打痕の切り合いが確認できる。543は平面形が楕円形に近い半楕形で、断面形が三角形を呈し、それぞれの平坦面に2か所ずつ凹みが観察され、礫の稜や先端部分には敲打痕が認められる。

544～547は丁度掌に収まる程の大きさで、544は礫の両面、545は正面のみに2か所の凹みが並列して認められる。546は砂岩製の扁平な礫を素材とし、表裏両面の中央に深さの弱い凹みが確認できる。551と552は礫の三方と両平坦面にそれぞれ敲打の集中する箇所が見られる。557は集石遺構埋土中から出土している。凹みがある平坦面に対して礫の断面は逆三角形となる。

562と563は礫の周縁に凹みが見られるとともに、正面の平坦面には磨痕が認められ磨石としての併用も推察される。577は平面形が縦長楕円形で、平坦面の両端部に敲打の集中する箇所が見られる。578は裏面の一部に自然面を残しているが礫面の広い範囲に敲打による凹みが見られる。

579～582の4点は尾鈴山酸性岩類製で、いずれも明瞭な敲打痕や磨痕は見られない。礫面の平坦面は手触りが非常に滑らかである。579は正面の凹みに朱色の付着物が確認できる。

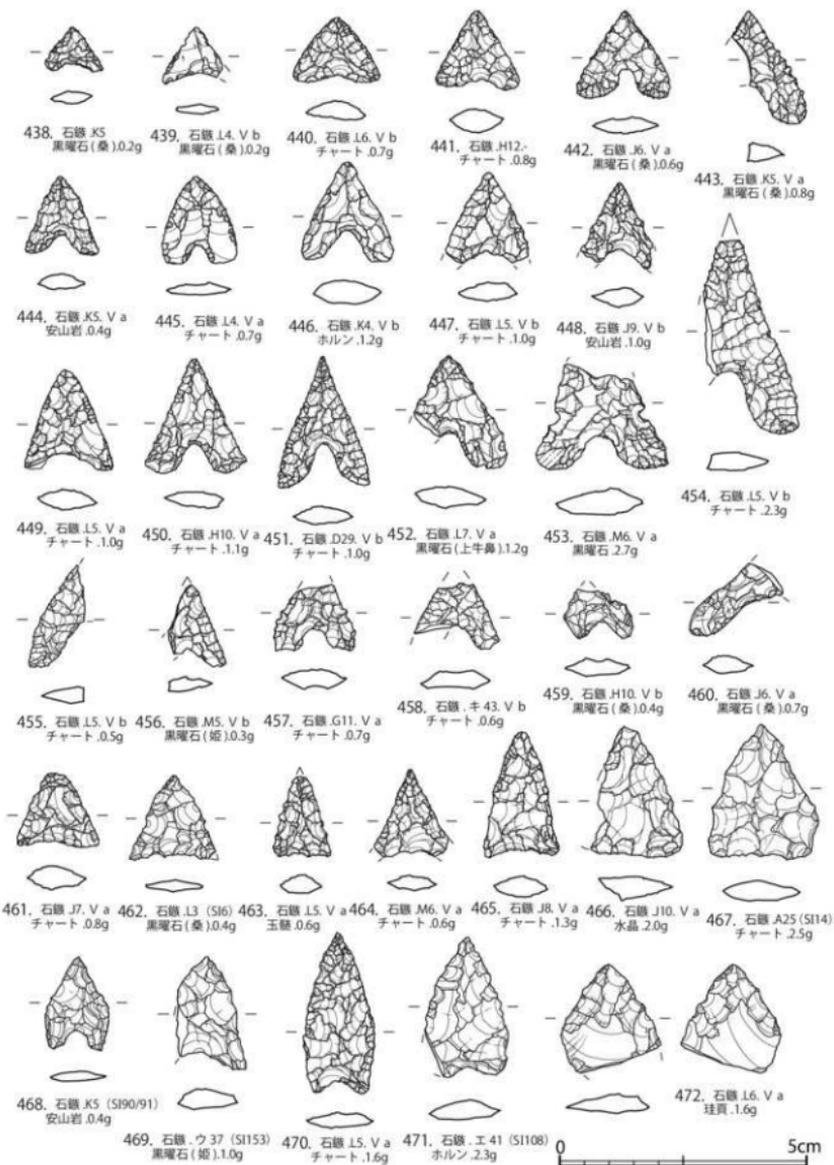
583と584は砂岩製で2点ともざらつとした手触りの柔らかい石材を素材としている。側縁にすり潰したような使用痕が面的に広がり、自然面との境目に稜が立つ。585は上記の砂岩に比べ硬く、緻密な砂岩製の敲石である。583、584と同じく、正面下に押し潰したような使用痕が面的に広がり、左側縁と上端部には敲打による凹みも確認される。

#### 台石 (第89図 586～596)

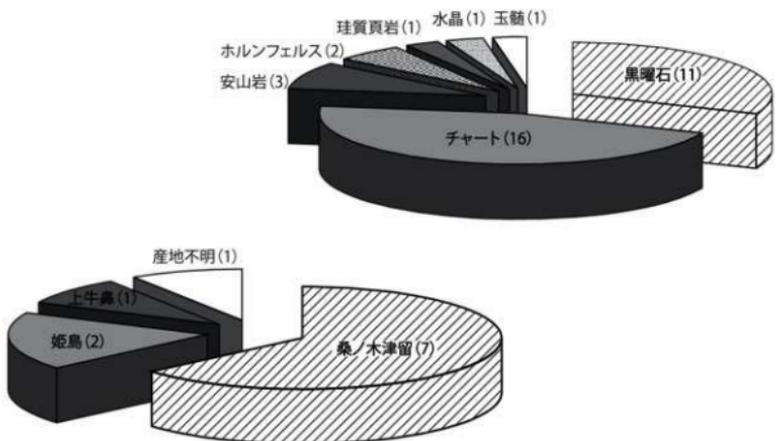
台石は56点出土し、15点を図化した。台石全体を見ると、使用されている石材は砂岩製が40点、尾鈴山酸性岩類製が13点、ホルンフェルス製が3点である。

586～592は砂岩製の台石である。586は集石遺構埋土中から出土した欠損品である。正面の平坦面が中心に向かって窪む形状をしていてと推察される。

587～591は広い平坦面を有し、表面の中央部分に敲打の集中する箇所が確認できる。また、周縁にも敲打痕が確認できる。589、590は集石遺構埋土中からの出土である。592は正面の広い範囲と左側面に研磨したような滑らかな面が確認できる。平坦面に対する断面形が逆三角形となる。また、左側面には断面形が「V」字となる二条の浅い線状の磨痕が確認でき、上下端部には敲打痕も確認できる。ただし、同様の石材で形状の似通ったものが弥生時代以降の遺構や包含層から多く出土しており、それらの遺構の掘り込みによって遺物が混在した可能性もある。593～596はいずれも10kgを超える尾鈴山酸性岩類の巨礫であるが、広い平坦面を持ち、台石としての使用が想定される。 (文責:日高)



第78図 縄文時代早期石器実測図(1)



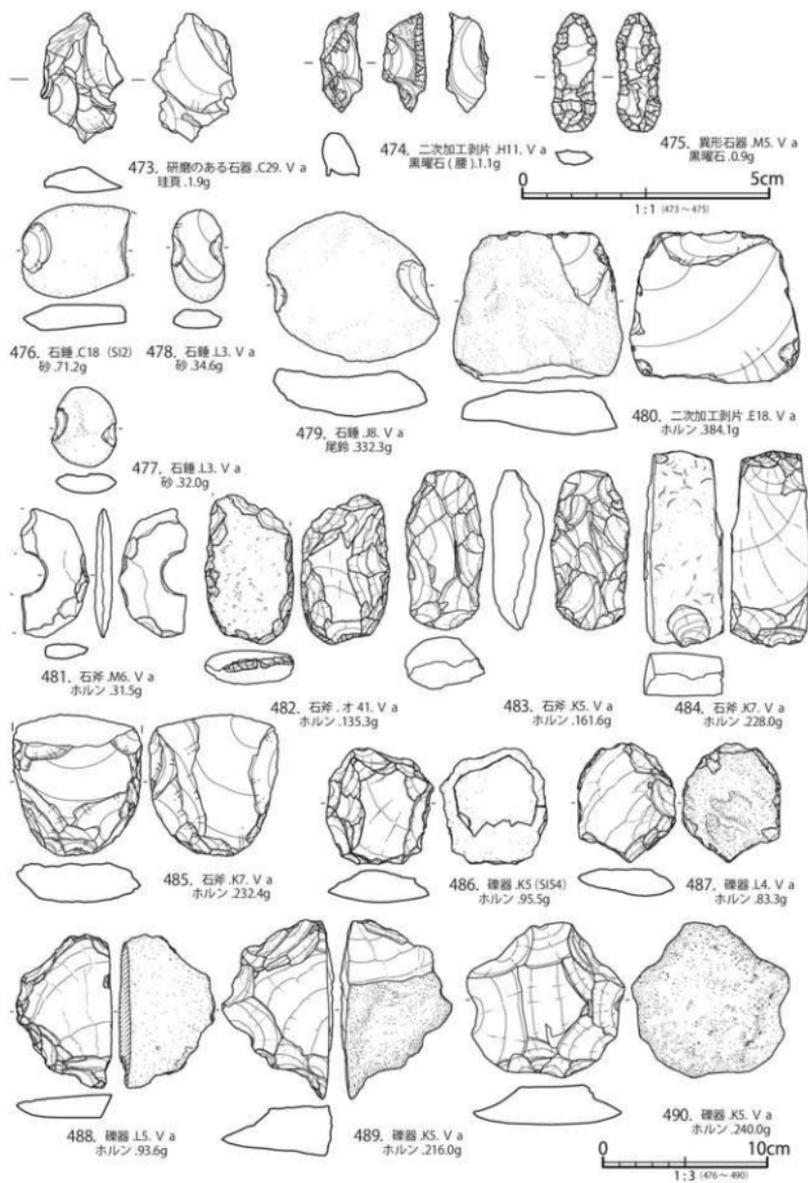
( ) 内は出土した遺物の点数を表している。

第 79 図 早期石器石材割合図及び黒曜石製石器産地別割合図

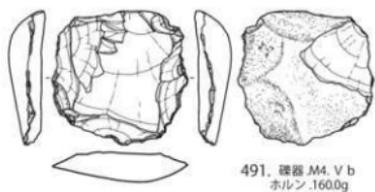
第 7 表 縄文時代早期石器器種組成表

	黒曜石			チャート	玉髓	水晶	安山岩	珪質頁岩	ホルン	砂岩	尾鈴	計
	桑/木津留	姫島	その他									
打製石器	7	2	2	16	1	1	3	1	2			35
研磨のある石器								1				1
二次加工 - 刮片			1						9			10
異形石器			1									1
環状石器									1			1
打製石斧									9			9
礫器									71	2		73
石錘									1	3	1	5
板石・ 磨石類									3	71	34	108
台石									3	40	13	56
計	7	2	4	16	1	1	3	2	99	116	48	299

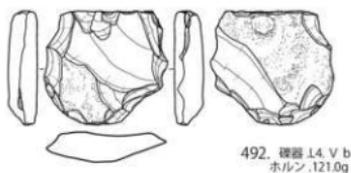
※：第 7 表内の器種点数は包含層出土のもの、遺構内出土のものを加算したものである。



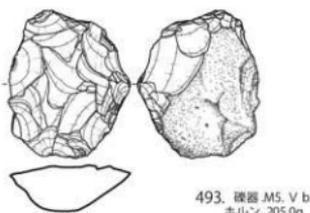
第80図 縄文時代早期石器実測図(2)



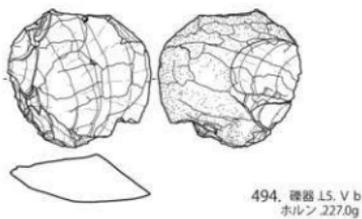
491. 礮器 M4, V b  
ホルン .160.0g



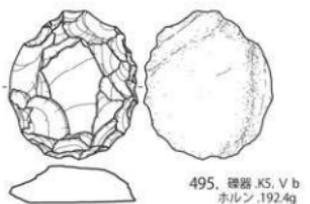
492. 礮器 L4, V b  
ホルン .121.0g



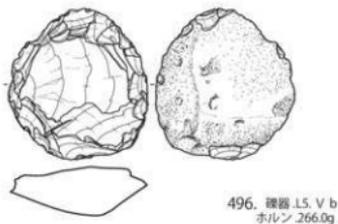
493. 礮器 M5, V b  
ホルン .205.0g



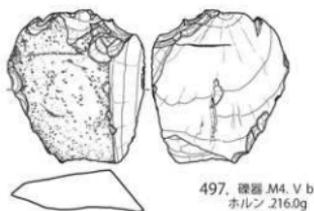
494. 礮器 L5, V b  
ホルン .227.0g



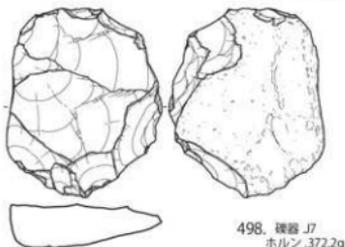
495. 礮器 K5, V b  
ホルン .192.4g



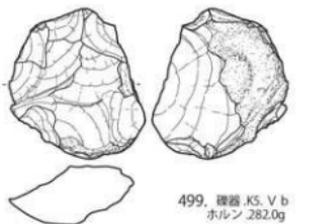
496. 礮器 L5, V b  
ホルン .266.0g



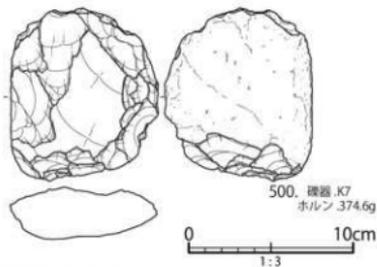
497. 礮器 M4, V b  
ホルン .216.0g



498. 礮器 J7  
ホルン .372.2g



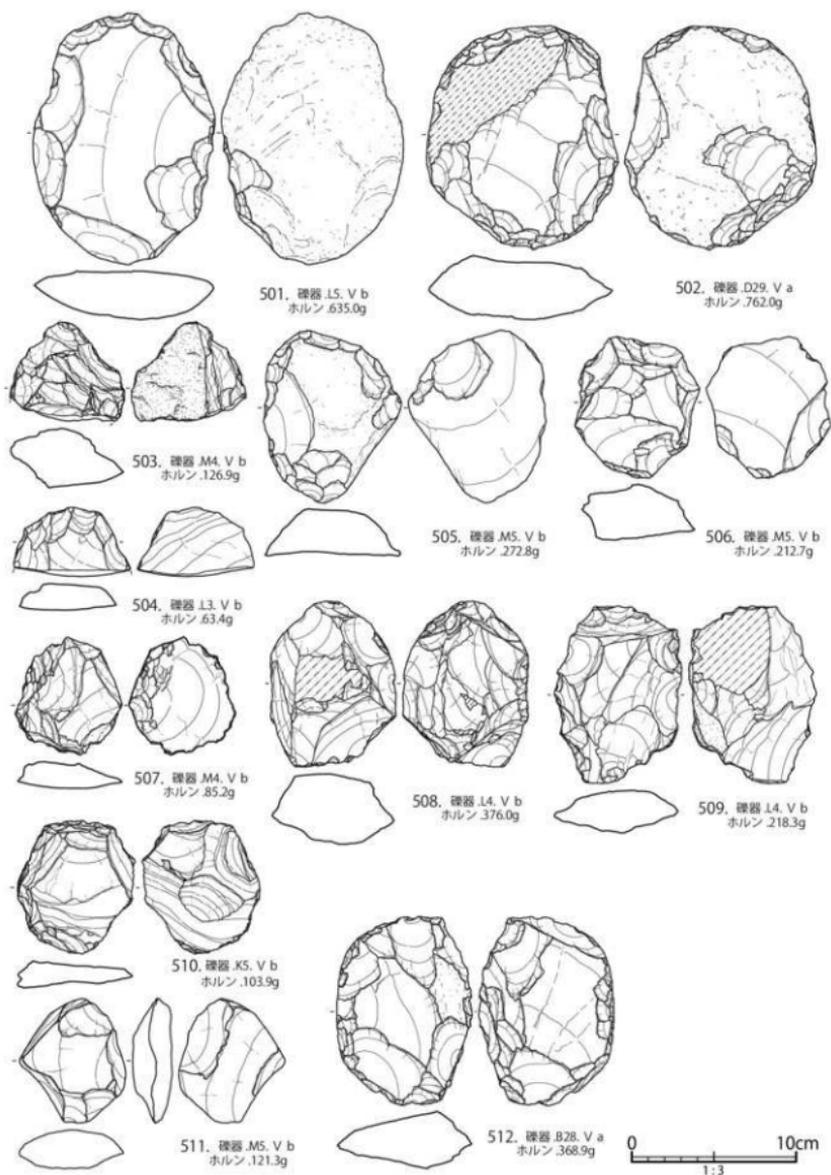
499. 礮器 K5, V b  
ホルン .282.0g



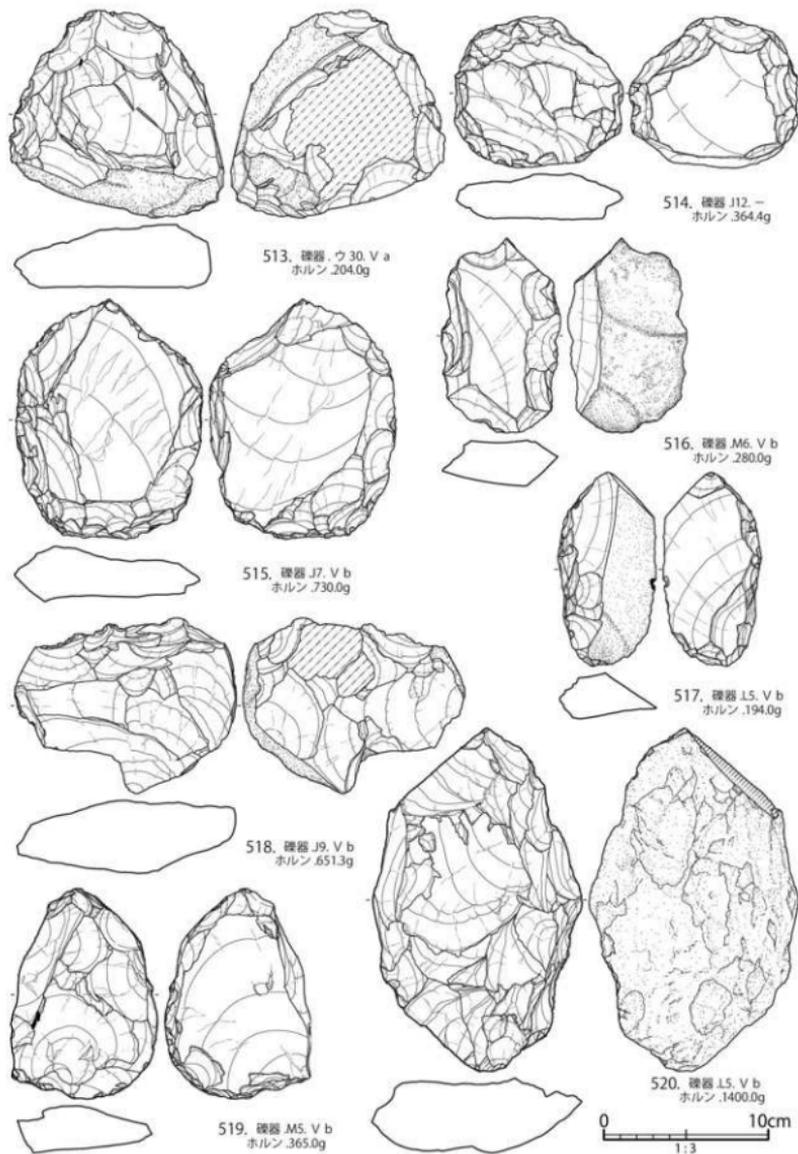
500. 礮器 K7  
ホルン .374.6g



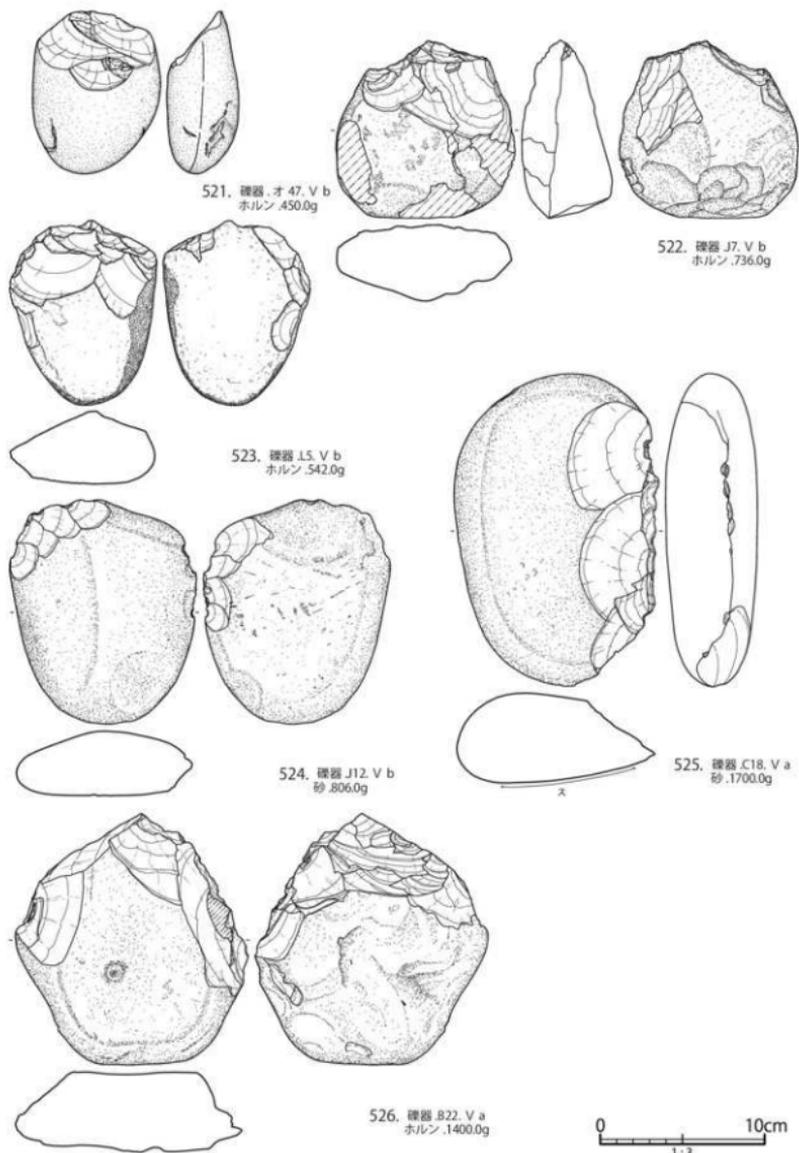
第 81 図 縄文時代早期石器実測図 (3)



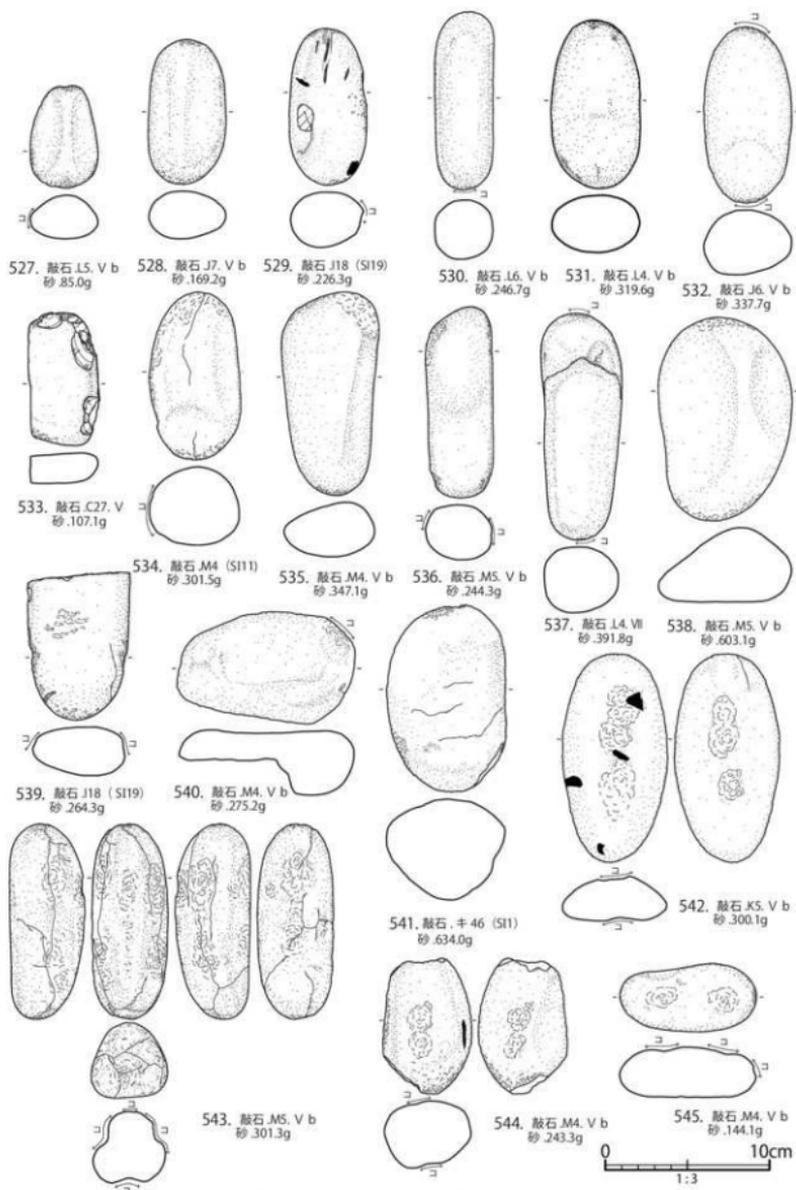
第 82 図 縄文時代早期石器実測図 (4)



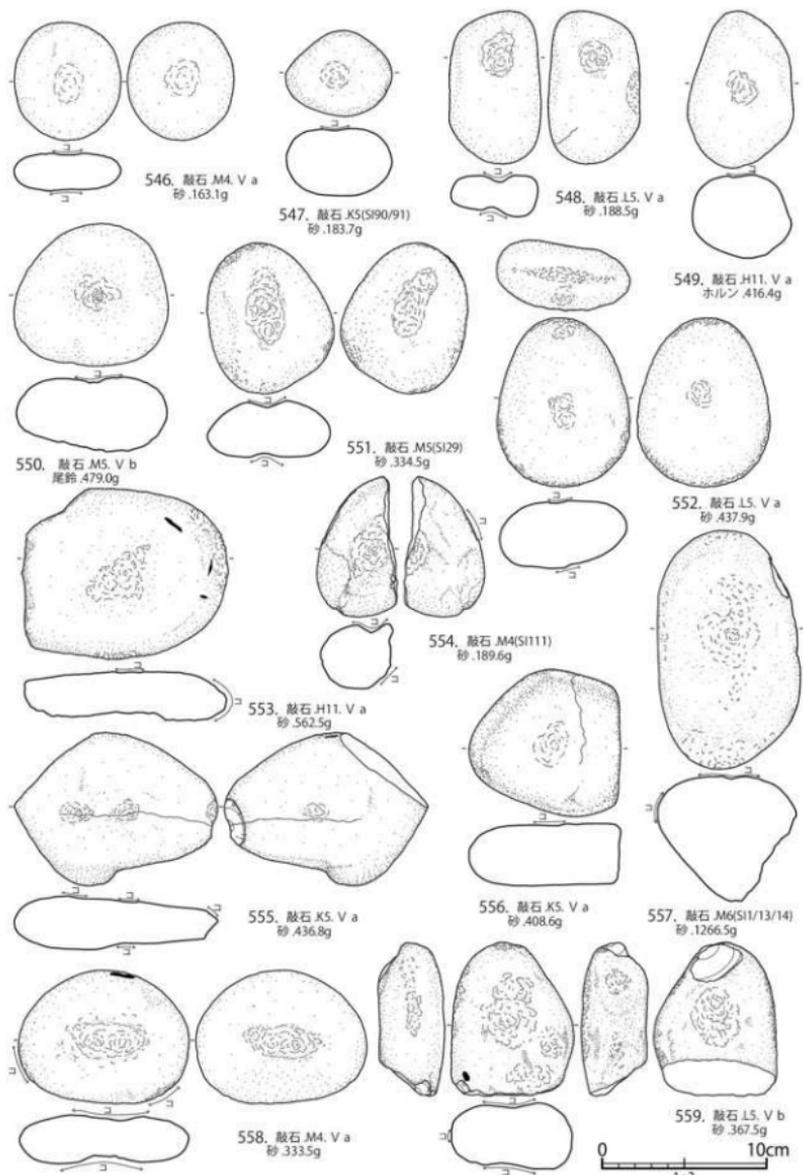
第 83 図 縄文時代早期石器実測図 (5)



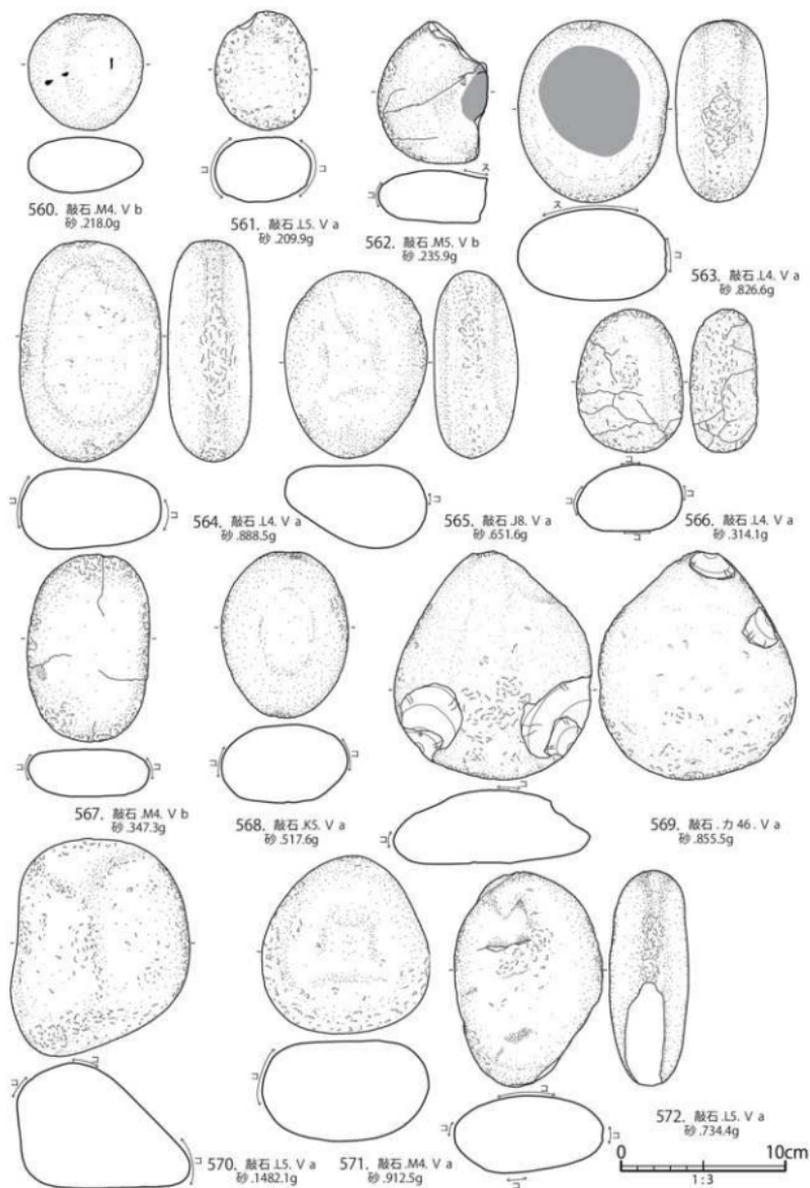
第84図 縄文時代早期石器実測図(6)



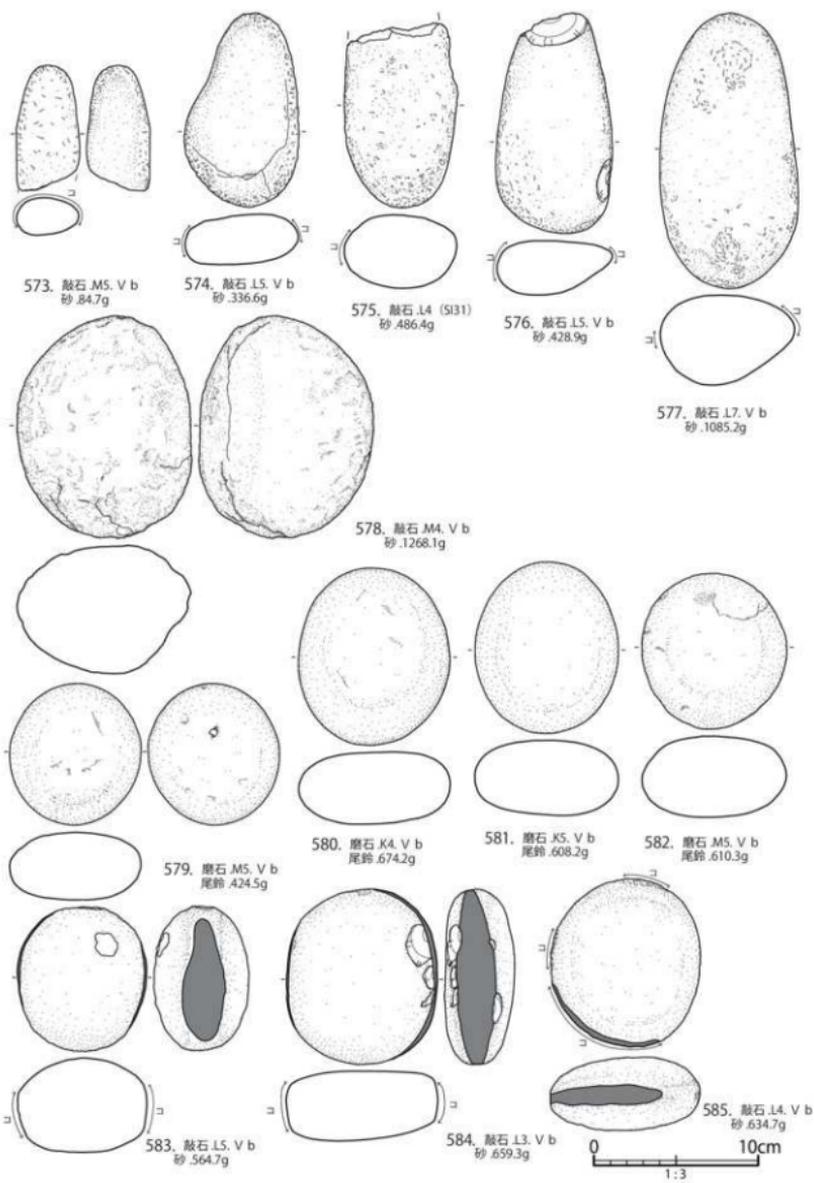
第 85 図 縄文時代早期石器実測図 (7)



第 86 図 縄文時代早期石器実測図 (8)



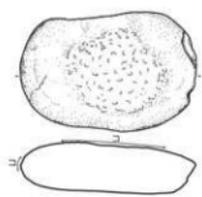
第 87 図 縄文時代早期石器実測図 (9)



第 88 圖 繩文時代早期石器実測図 (10)



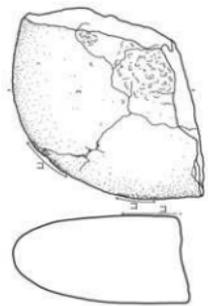
586. 台石 K7 (S159)  
砂 231.8g



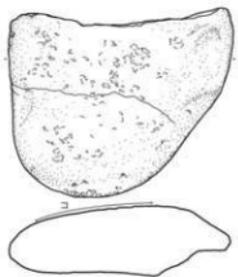
587. 台石 M4. V b  
砂 841.5g



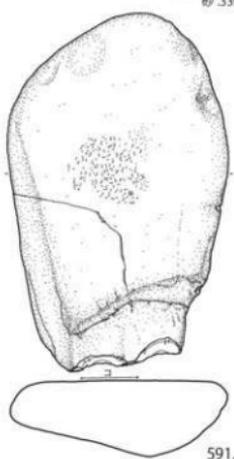
588. 台石 H9. V b  
砂 3397.0g



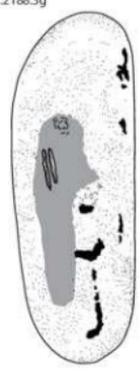
589. 台石 M5 (S129)  
砂 2188.3g



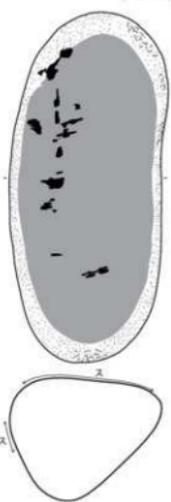
590. 台石 L5 (S120)  
砂 2175.8g



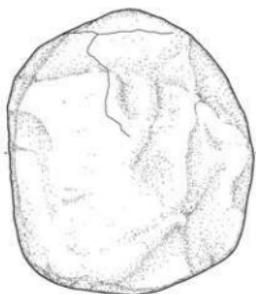
591. 台石 H11. V b  
砂 4417.7g



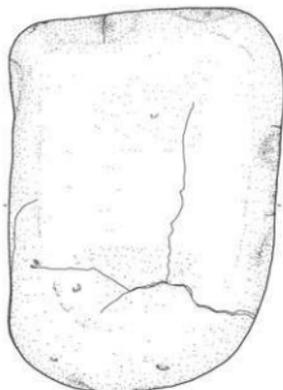
592. 台石 J10. VI  
砂 5276.9g



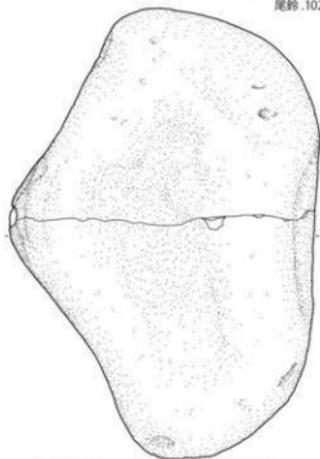
第 89 図 縄文時代早期石器実測図 (11)



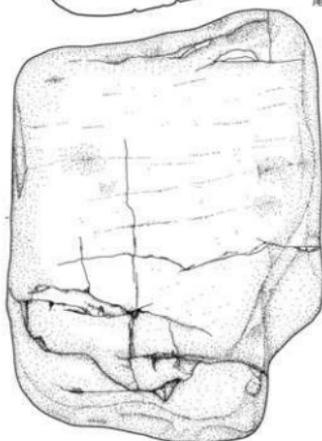
593. 台石.G11  
尾鈴.10200.0g



594. 台石.J8. V b  
尾鈴.11500.0g



595. 台石.K7. V b  
尾鈴.13200.0g



596. 台石.L5. V b  
尾鈴.27000.0g



第90圖 縄文時代早期石器実測図(12)

## 第5節 縄文時代前期～後期の遺構と遺物

### 1 概要

本遺跡では、縄文時代の草創期から晩期まで全時期を通して遺物が出土しているが、前期から後期については、非常に密度が薄くなる。遺構は遺物を伴い時期を確定できるものではなく、遺物は土器小片が200点程出土している。遺物は、アカホヤ上のⅡ層クロボク及びⅢa層アカホヤ二次堆積層、弥生時代以降の遺構埋土や攪乱に混在して出土しており、それぞれにおいて一括取り上げを行っている。

(文責：高橋)

### 2 遺構 (第92図：写真図版37)

Ⅲb層 (KAh) 上面で検出した土坑の中に、縄文時代前期の可能性を持つものを2基、後期の可能性を持つものを2基確認している。前述したとおり、遺構からの出土遺物はないため、遺物からではなく、埋土中炭化物 (炭化材や炭化種実) の炭素14年代測定を行った結果から認定したものである。

土坑は調査区中央のD30d、D27d、E23d、D21aGrにある。

#### A4583 (第92図)

D30dGrに位置する。長径1.28m×短径0.94m、最大深0.57mを測る。平面形は、長径の一边が丸みをもつ盾形で、下端は長方形を呈する。断面形は中段が少しくびれた逆台形となる。埋土は弥生時代以降の遺構埋土と異なりかなり硬くする。遺構底部付近埋土中の炭化材による炭素14年代測定で5240±30BPの年代値が出ており、前期の遺構の可能性がある。

#### A4585 (第92図)

D27dGrに位置する。長径1.28m×短径0.93mの隅丸長方形を呈し、最大深0.2mを測る。遺構底部は比較的平坦で、南西角隅に小穴がみられる。小穴は土坑の輪郭を崩さずすっぽりと収まることから土坑の一部と考えたいが、弥生時代以降の遺構の可能性もある。埋土はしまりがあり、炭化物類が全体に混じる。底部付近の埋土についてフローテーションを実施し、2点の炭化種実が確認された。分析の

結果、ムギ類の炭化果実片とコキンバイザサの炭化種子であった。炭素14年代測定では5760±30BPの年代値が出ており、前期の遺構の可能性がある。

#### A45197 (第92図)

E23dGrに位置する。長径1.7m×短軸1.2mの隅丸長方形を呈し、最大深0.37mを測る。床面はほぼ平坦であるが、西側に僅かな窪みを持つ。窪み上部の埋土③と埋土⑥に砂層の堆積があり、埋土③出土の炭化材による炭素14年代測定で3080±25BPの年代値が出ており、後期の遺構の可能性がある。

#### A45145 (第92図)

D21aGrに位置する。径が約1mの卵形を呈し、最大深0.53mを測る。東側上端は弥生時代以降の住居跡であるA45141に切られる。遺構底部直上出土の炭化材の炭素14年代測定で3365±25BPの年代値が出ており、後期の遺構の可能性がある。

(文責：高橋)

### 3 遺物 (第93図～第94図：写真図版69)

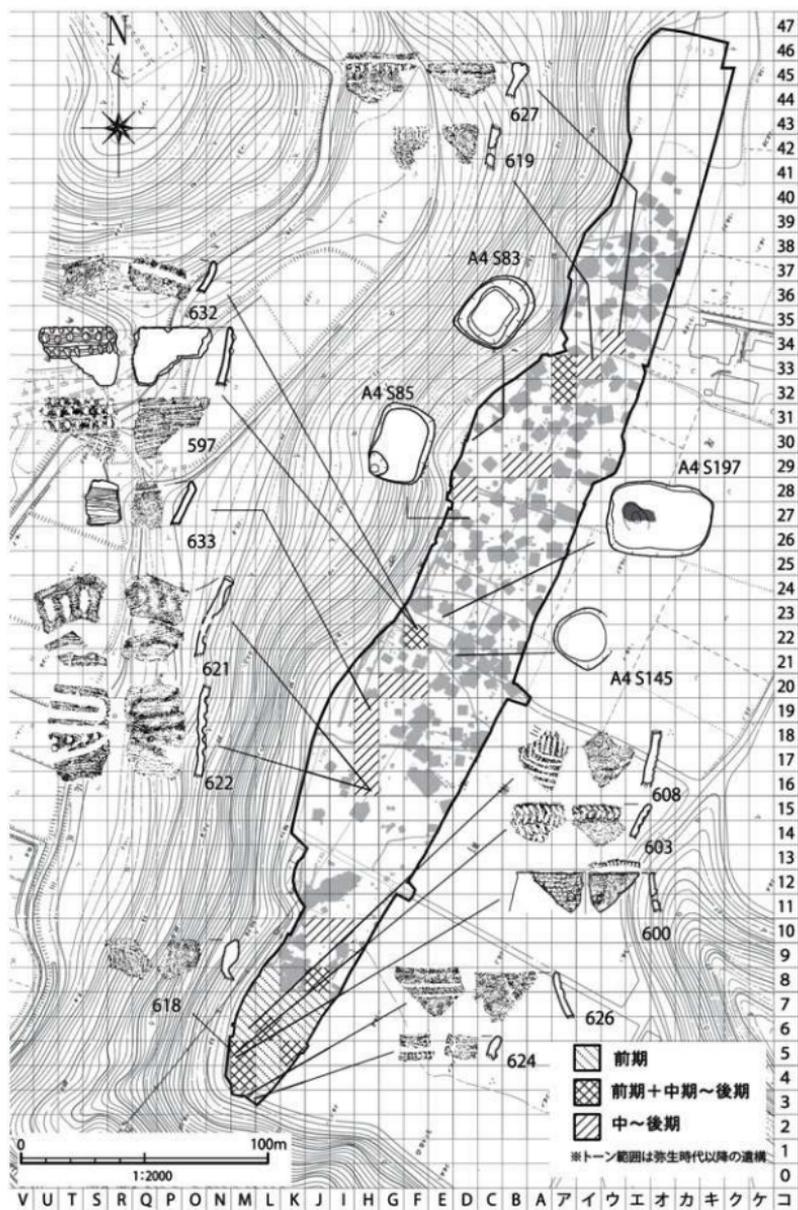
遺物は、包含層一括及び弥生時代以降の遺構内出土であるため、層位的に時期差を認めることはできない。出土した遺物の中から縄文時代前期、中期、後期と判別できるものを抽出し、それぞれの分布域の確認を行った。土器については、胎土、文様・調整、器形などの特徴によってある程度分類が可能であるが、石器については、当該期としての分類は不可能であるためここでは掲載しない。

#### (1) 縄文時代前期の土器 (第93図：写真図版69)

分布は調査区南端のJ6～8Gr・K4～9Gr・L4～8Gr・M4～7Grに比較的まとまっており、調査区北側A32、33Grと調査区中央F22Grにわずかに見られる。土器片は150点程で、小片が多い。

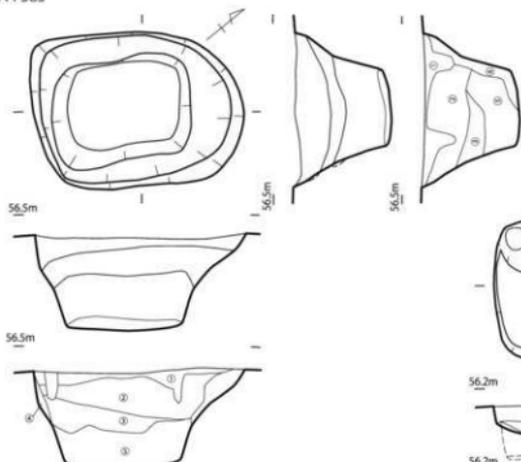
前期の土器は、口唇部刻みと刻目突帯を持つものと口縁部に連続刻突文・口唇部に刻目・器面に短沈線や沈線の幾何学的文様を持つもの2群に分かれる。このうち、主体を占めるのは後者である。

前者は597の1点のみで、調査区中央F22Gr、弥



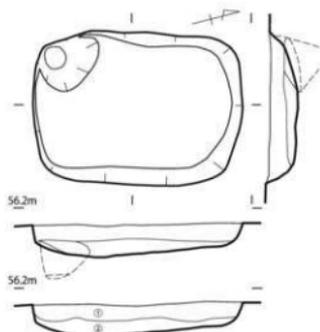
第91図 縄文時代前期～後期遺構・遺物分布図

A4 583



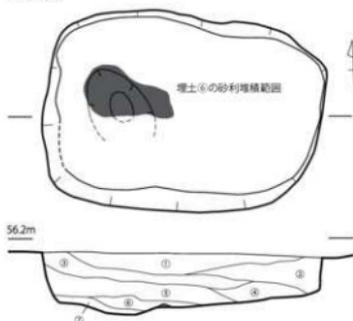
- ①暗褐色 (Hue10YR3/3) しまり密く、サラサラしている。にひい黄褐色土、褐色土、黒色土、KAhのブロックが層間に少量入る。  
 ②にひい黄褐色 (Hue10YR4/3) 硬くしまる。KAhブロック・粒子を多く含む。  
 ③褐色 (Hue10YR4/4) ②より軟。ほぼKAhブロックで構成される。  
 ④にひい黄褐色 (Hue10YR5/4) 粘性あり、しまらない。M1 程度層と同一の土がブロック状に入る。  
 ⑤褐色 (Hue10YR4/4) 硬く、粘性あり。KAhブロックを多く含む。層下部には M1 程度層と同一の土がブロック状で少量入る。  
 ※にひい黄褐色 (Hue10YR5/4) ④に似る。④・⑤は前後層の可能性がある。

A4 585



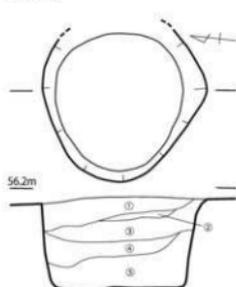
- ①黒褐色 (Hue10YR2/3) 硬くしまる。KAhブロック (2~5cm程) が混じる。土層小片、炭化物を少し含む。  
 ②黒褐色 (Hue10YR2/3) ややしまる。暗粘土で少し粘性あり。KAhブロック (1~3cm) がやや多く、炭化物が少し混じる。

A4 5197



- ①黒褐色 (Hue10YR3/2) ややしまる。褐色。KAh粒を多く含む。KAhブロック (1~3cm程) を少量含む。炭化物を含む。  
 ②黒褐色 (Hue10YR3/2) 暗粘土。全体に褐色粒が混じる。KAhブロックを少量含む。  
 ③黒褐色 (Hue10YR3/3) ややしまる。1cm程のKAhブロックや褐色土ブロックを全体に少量と炭化物を含む。一部砂利 (1~3cm程) が増積する。  
 ④暗褐色 (Hue10YR3/3) ややしまる。黒色土。暗褐色土。KAhのブロックが同割合で混じる。  
 ⑤黒褐色 (Hue10YR2/2) よくしまり、やや粘性あり。10cm以下のKAhブロックが全体 (特に層間に多く) 混じり、褐色土ブロックをやや多く含む。  
 ⑥黒褐色 (Hue10YR2/2) よくしまり、やや粘性あり。ごく少量の褐色粒を含む。層下部に砂利 (1~3cm程) が増積する。  
 ⑦暗褐色 (Hue10YR3/4) ややしまり、やや粘性あり。黒褐色ブロックが混じり、炭化物含む。

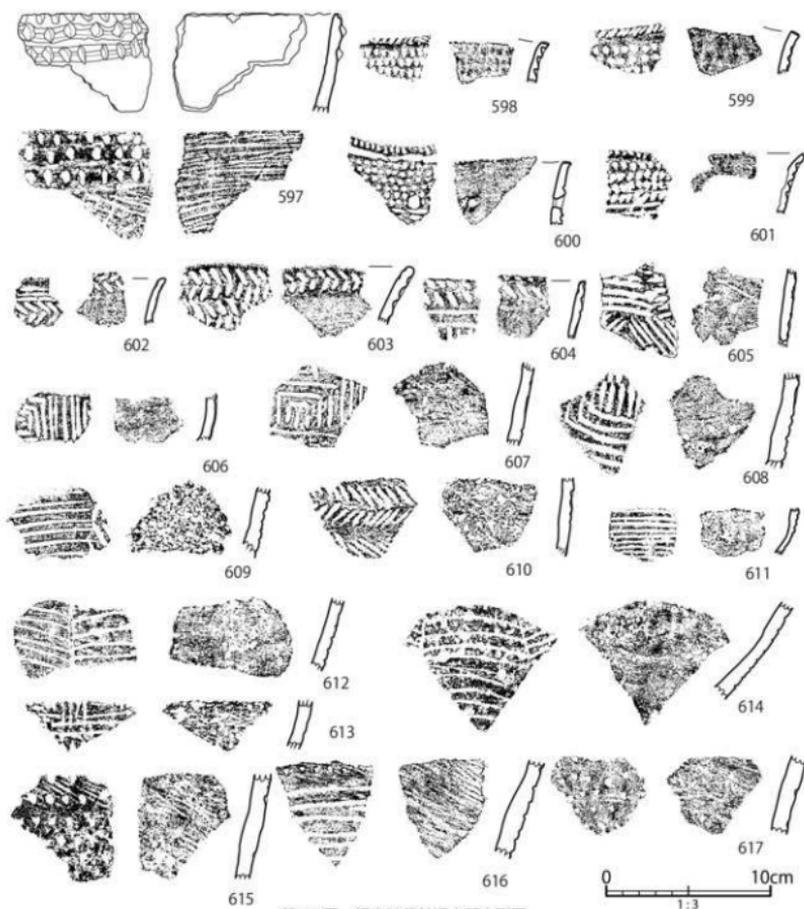
A4 5145



- ①黒褐色 (Hue10YR2/2) よくしまり、やや粘性あり。KAh粒。褐色粒がごく少量混じる。炭化物含む。  
 ②暗褐色 (Hue10YR3/4) よくしまる。①に似るが粘性がやや強い。  
 ③暗褐色 (Hue10YR3/4) ややしまり、粘性あり。5cm以下の褐色粒が多く混じる。炭化物含む。  
 ④暗褐色 (Hue10YR3/3) ややしまり、粘性あり。1cm以下の褐色ブロック、粒が多く混じる。炭化物含む。  
 ⑤暗褐色 (Hue10YR3/3) ややしまり、粘性あり。2cm以下の褐色ブロック、粒が多く混じる。KAhブロック少量。炭化物含む。



第 92 図 縄文時代前期～後期遺構実測図

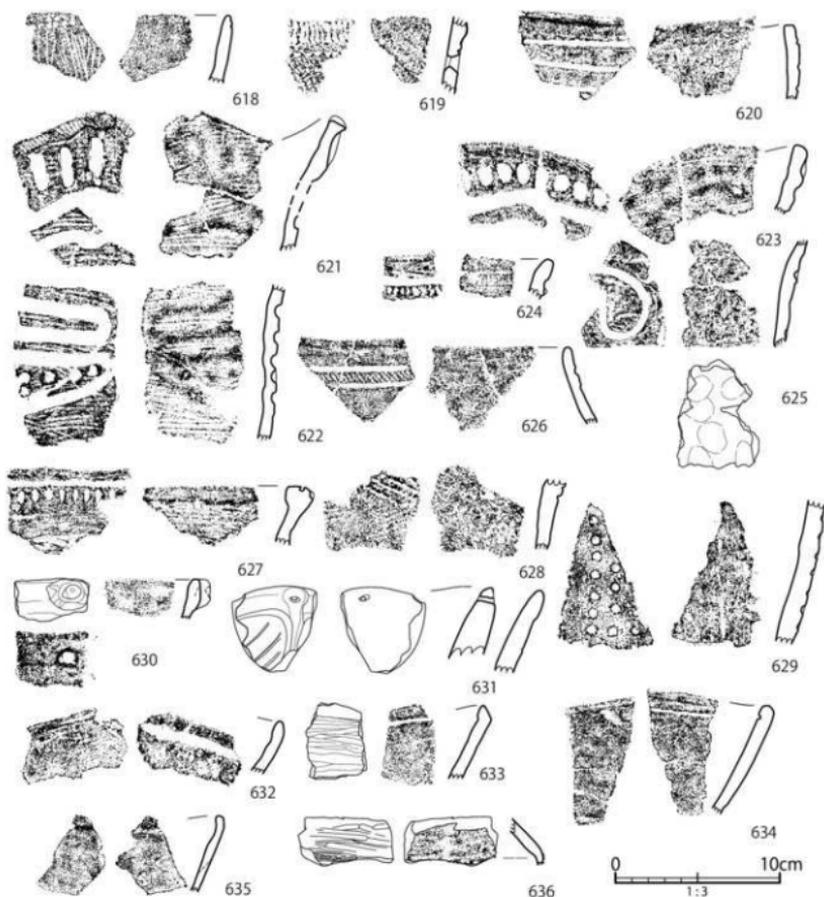


第93図 縄文時代前期土器実測図

生時代以降の遺構であるA4 S164 埋土内より出土している。工具による口唇部刻みと比較的しっかりとした断面三角形の刻目突帯が2条巡る。内外面とも貝殻条痕調整である。器面にはふい黄褐色を呈し、胎土に灰褐色や黄褐色の粒を多く含む。

後者の土器は598～614で、調査区南側に比較的まとまって出土した。胎土中に滑石粉末を多く含むもの(598～602、605、606、609、611)、滑石粉

末をわずかに含むもの(603、604、607)、滑石粉末を含まないもの(608、610、612～614)がある。598～600は口縁部がやや外反し、緩やかな波状口縁を呈すると思われる。口唇部に刻みと口縁部に連続刺突文を持つ。601～603は口縁部が外反する。601は口唇部刻みと口縁部に連続刺突文と沈線文を持ち、施文具に竹管を使用している。602と603は、口縁部の内外面に羽状短沈線を施し、602は口唇部



第94図 縄文時代中期～後期土器実測図

に縦方向の細かい刻みが付く。604は直口縁で、口唇部に刻みを持ち、口縁部外面に2条の斜方向短沈線と横方向沈線、その下に四角組合文に類似する沈線文が施されている。また、口縁部内面にも斜方向短沈線が施される。

605～614は胴部から底部付近で、文様に幾つかのバリエーションがある。605は横方向の平行沈線文と折帯文沈線施文と思われる。606～608は四角

組合文で、607と608は器壁がやや厚い。609もやや器壁が厚く、横方向の浅い沈線文と羽状の深い沈線文がみられる。610は羽状短沈線である。611～614は胴部下半から底部付近と思われる、籠を模したとされる縦方向区画沈線と横方向の平行沈線がみられる。615～617は貝殻条痕による器面調整の後、連続的突文や沈線文を施している。(文責：高橋)

(2) 縄文時代中期～後期の土器 (第94図:写真図版69)

出土数が50点程と少なく、分布もまばらに点在する。その中でも調査区中央寄り北側のイ33、A29、B29Gr.に縄文地の子群、調査区中央寄り南側のG20Gr.とH16～19Gr.に凹線文を施す一群のまとまりが見られる。出土器種は深鉢、鉢である。

618はやや斜の縦方向の貝殻条痕と口縁端部に貝殻刺突文を持つ。調査区南M5Gr.出土で、L6Gr.にも同類の土器が分布する。器面は暗灰黄色、胎土はきめ細かで淡黄色粒をやや多く含む。619は縄文地に隆帯を貼り付け、半截竹管による押引文や刺突文を施す。調査区中央寄り北側イ33Gr.出土で、同類の土器片が30m程南のA29、B29Gr.に出土する。器面はこぶい黄褐色で、胎土に砂粒が多く混じる。

620は横方向沈線が3条見られ、波状口縁を呈する。口縁部は若干内湾し、キャリパー状をなす。器面は赤褐色で焼きが硬く、胎土には小石粒をやや多く含む、滑石粒も含まれる。

621～623はやや太めの凹線文を施す土器である。621と622は同一個体と思われる、調査区中央寄り南側H16Gr.に位置するA5548内で出土している。波状口縁をなし、貝殻条痕による器面調整後、太めの棒状工具で列点文や凹線文を施している。内面には凹線施文による凸部が若干見られる。器面はこぶい黄褐色で、胎土に灰白色粒を多く含む。623は凹線施文土器が集中する範囲からの出土で、同類の土器片がG20、H16Gr.から出土している。緩やかな波状口縁をなし、太めの棒状工具で列点文や凹線文を施す。器面は黄褐色で、胎土は621・622と似る。

624～629は沈線文や貝殻文、縄文を持つ土器である。624は調査区南端のM3Gr.に位置するA1SC320より出土した。波状口縁で、横方向沈線間に貝殻線刺突を施す。器面はこぶい黄褐色で、胎土に浅黄色粒をやや多く含んでいる。

625はH16Gr.に位置するA5548埋土中より出土した。棒状工具による沈線文を施す。器面は赤褐色で焼きが硬く、胎土に浅黄褐色小石粒を多く含む、滑石粒も含まれる。

626は縄文を施した後、3本の沈線文を巡らせた磨消縄文土器である。上から1本目と2本目の沈線

間を残し、上下、内面とも丁寧にナデている。器面はこぶい黄褐色で、胎土はきめ細やかである。調査区南端、M3Gr.にあるA1SA118とM4Gr.に位置するA1SC321より出土している。

627はウ34Gr.に位置するA3S101内埋土中より出土した。口縁部内面に粘土紐を貼り付けて肥厚させ、平坦な口唇部に1条の沈線を巡らせている。口唇部外面に刻み、頸部屈曲部下に沈線文が施される。器面は赤褐色を呈し、焼きが硬い。

628は口縁部付近と思われる、肥厚する口縁部に貝殻線刺突文を連続刺突している。器面は橙色を呈し、胎土に浅黄褐色粒を多量に含む。

629は器口が厚く、胎土は627に似る。巻貝刺突による擬凹線文が施されている。

630は口縁部に瘤状の突起を付けたものと思われる。胎土はきめ細かで、灰白色粒を多く含む。631はD28Gr.で出土した。波状口縁をなし、口縁部端部に帯状の粘土を貼り付けて若干肥厚させ、波頂部から突帯を縦方向に貼り付けている。縦方向突帯を軸に細沈線を羽状に施している。胎土は630と似ている。

632～636は鉢と思われる。632～635は波状口縁をなし、口縁部内面に沈線が巡る。632はF22Gr.に位置するA4S161埋土内より出土した。口縁部内面沈線は太く、外面は横方向のミガキ、内面はナデ調整である。器面はこぶい黄褐色を呈し、胎土に灰白色粒を多く含む。633は口縁部内面沈線は細く、外面は横方向のミガキ、内面はナデ調整である。器面は明赤褐色を呈し、胎土は632と似ている。

634はア31Gr.より出土した。口縁部と胴部間がくびれて頸部をなし、丸味のある胴部が付くと思われる。頸部付近外面にも1条の沈線が巡り、内外面ともミガキを意図した丁寧なナデである。器面は橙色で、胎土は632、633と似ている。

635はJ8Gr.より出土した。内面沈線は不明瞭で窪み状になっている。内外面ともミガキで、器面は黒色で、胎土に灰白色粒を多く含んでいる。636はF20Gr.に位置するA5S24内埋土中より出土した。丸味を持つ胴部最大径上位に細くて薄く、斜目突帯が施される。内面はナデ、外面は横方向のミガキである。器面は褐色で、胎土は635と似ている。(文責:高橋)

## 第6節 縄文時代晩期の遺構と遺物

### 1 概要

本遺跡では、前節でも述べたように、Ⅲ b層 (KAh) 上部より縄文時代前期～晩期の遺物が出土しているが、前期～後期の遺物に対し、晩明土器の割合が極端に多くなる (第95図)。遺構は他時期の土器を含まず晩明に属する遺物のみが遺構下部付近で出土したものを晩明の遺構と判断して掲載している。

遺物は土器片が2286点出土しているが、小片が多い。また、石器については、晩明に属する土器の割合が前期～後期に比べ多くを占めることから、Ⅲ b層 (KAh) 上出土のものを、晩明として報告している。

なお、遺構外より出土した遺物に関してはⅢ b層 (KAh) 上のⅡ層、Ⅲ a層、弥生時代以降の遺構埋土や掘削からの出土であり、それぞれにおいて一括取り上げを行っている。(文責:津田)

### 2 遺構 (第96図～105図:写真図版38-41)

Ⅲ b層 (KAh) 上面で検出した遺構には、晩明土器が出土した土坑6基と、4本の打製石斧が重なりあった状態で検出された土坑が1基確認されている。

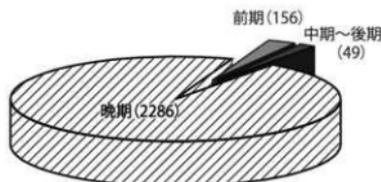
晩明の土坑は調査区中央 (調査時の三次調査B区、C区) に集中する傾向があり、これは、第107図等に示すように晩明土器の重量密度が高い範囲に存在している。

#### A15C318 (第97～99図)

M5aGrに位置する。長短径0.9m、検出面からの深さは0.32mである。検出状況には選別は確認されなかったものの、遺構を掘り進めることで晩明土器が出土し、さらに遺構下部付近まで土器・石器が出土した。

遺構内の土器 (638、640) について、炭素14年代測定を行ったところ、それぞれ2895±25BP、2840±20BPの年代値が得られている。出土した遺物には、精製殻鉢や、組織痕土器、無刻目突帯が付いた深鉢が存在する。

637は精製の殻鉢である。胴部両曲曲部に稜を持ち、頸部から比較的に長い口縁部が外反する。口縁部内外ともに沈線が施されず、口唇部が先細りになる (後述するI①類に属する)。



第95図 縄文時代前期～晩明土器片割合図

※割合の対象は土器片の個数による

638～640は粗製深鉢である。胴部から口縁部が直口して立ち上がる。口縁部外面には弧線文が施されている (IV⑤類)。

641、642は同一個体である。胴部に丸みを持ち、口縁部が緩やかにくびれて直口する。口縁部外面から0.5cm下に幅広の粘土帯を貼り付け、その上下をナデで断面三角形を呈する突帯状に形成している (IV 2 A③類)。

643、644は調整や胎土から、同一個体と判断した。口縁部は外反し、口縁部外面から1cm下に薄い粘土帯が付き、その上下を撫でて断面三角形の突帯状に形成している (IV 2 B④類)。645は、胴部から口縁部が直線的に外に開く。口縁部外面から1.5cm程下に断面三角形の小さい突帯が付く (IV 2 A④類)。646は口縁部が直口する。口唇部の上から幅広の粘土帯を貼り付け、その上下をナデで、断面三角形の突帯状に形成している (IV 2 B①類)。

647と648は胎土から同一個体と判断した。647は口縁部が直口し、口縁部外面に幅広の粘土帯を貼り付け、その上下を撫でて断面三角形の突帯状に形成している (IV 2 B①類)。648は平底で幅広がりとなっている。

649、650は同一個体である。胴部に丸味を持ち、口縁部が直口する。口縁部外面から1cm程下に断面三角形の突帯が付く (IV 2 B①類)。

651は組織痕土器である(Ⅲ③類)。652、653は651と同一個体の可能性を残す。胴部外面中位から底部にかけて網代瓦痕が観察される。内面と外面口縁部は横方向のナデにより調整が施される。土器に付着していた炭化物に対し炭素14年代測定を行ったところ、2855±20BPの年代値が得られている。

石器は敲石(654)、磨石(655)、30cm大の尾鈴山酸性岩類の礫(656)と同石材製の剥片(1253～1256)、打ち欠き石錘が出土している。尾鈴山酸性岩類の礫は明確に打ち欠かれた痕跡はみられないものの剥片(1253～1256)と同じ石材の特徴がみられ、同一母岩の可能性もある。剥片は、打面が残り、バルブが明確に確認される。

なお、打ち欠き石錘は3点出土しているが、今回図化できなかった。実測図に関しては『尾花A遺跡Ⅱ 弥生時代(弥生編)』に掲載する予定である。

#### A4 S104 (第100図)

B24dCrに位置する。Ⅱ層より打製石斧が2本重なるように出土していたことから、周辺の精査を行い、Ⅲb層(KAh)上面まで掘削を行った結果、小穴状の遺構プランが検出された。そのため、埋土の掘削を続けたところ、4本の打製石斧が重なりあう形で検出された。S104内より土器の出土はなく時期は不明であるが、本遺跡では前期から後期の土器が僅かしか出土していないことや、晩明の遺構内より確認される打製石斧と同じ特徴をもつものも確認されることから晩明の遺構と判断して報告している。

657は研磨により形状を作り出した後、敲打により成形がなされている。平面形態が短冊形を呈し、刃部は研磨が施されている。658、659は片面に礫面を残す打製石斧である。両石斧ともにホルンフェルス製であり、扁平な楕円礫を素材としている。礫面を大きく残すことから石斧未製品の可能性もある。

660は658、659と同様に、扁平な楕円礫を素材とする打製石斧である。剥離により粗い成形がなされた後、石器中央付近に礫面を除去するかのよう敲打による成形が施されている。断面形は「D」字状を呈し、657～659に比べ肉厚となっている。

#### A4 S203 (第100図)

E24dCrに位置する。長径09m×短径085m、検

出面からの深さは018mを測る。遺構からは、晩明土器の小片が多量に出土しており、このうち深鉢の口縁部4点を図化した。

661は口縁部の竪口する。口縁部外面に厚みのある幅広の粘土帯が付き、口縁帯を形成し、口縁帯の頂部を凹線状(味)にナデ、頂部の窪んだ断面台形状に形成している(IV2B①類)。662も口縁部の竪口する土器である。口縁部外面から05cm程下につきりとした断面三角形の突帯が付き(IV2B①類)。663は口縁部の外反する。口縁部外面に厚みのある幅広の粘土帯を貼り付け、口縁帯を形成している(IV2B④類)。664はボウル状を呈し、口縁部の直口する。また口唇部は丸く仕上げられている(Ⅲ②類)。A2 S226 (第101～103図)

C19dCrに位置する。長径15m×短径105mを呈すが、掘削時に遺構プランの認識があり、実際は一回り小さな土坑と考えられる。検出面からの深さは035mを測る。掘削を進めていくと、土坑内の北東側に石器が集中して出土し、その下部より以下の土器が出土している。

665は外反する口縁部外面から1cm程下に断面三角形の小さい突帯を形成する(IV2B④類)。666は直口する口縁部外面に幅広の非常に薄い粘土帯が形成され、その上下を撫でて断面二等辺三角形の突帯状に形成している(IV2B①類)。667は、胴部から口縁部の竪線的外に大きく開く。口縁部外面に幅広の薄い粘土帯を貼り付け、口縁帯を形成している。粘土帯は非常に薄い(IV2A⑩類)。

668は組織痕土器である。外面底部付近に網代瓦痕が観察される。胴部外面は粗い横方向のナデ、内面は丁寧な横方向のミガキである(Ⅲ③類)。669は、口縁部が大きく外に開く鉢と思われ、口縁部はヒタ状に波打ち整っていない。外面は横方向の粗いミガキ、内面は丁寧な横方向のミガキである。

石器は、打製石斧、磨製石斧、石錘、敲石等が出土した。また、図化はしていないが同遺構から、加工の痕跡がみられない形岩、尾鈴山酸性岩類の礫、礫片が80点以上(重量計182kg)が出土している。

670～673は打製石斧である。670、671では礫面がみられないが、672、673は片面に大きく礫面を

残し、石斧未製品である可能性もある。674は、ホルンフェルス製の磨製石斧で、刃部磨面には使用の痕跡とも思われる微細な剥離跡が確認される。

675～678は打ち欠き石錘である。石材は、砂岩やホルンフェルス、尾輪山酸性岩類が利用されるが、4点ともに同様の形状を示し、そのサイズ、重量もよく似通ったものである。

679、680は明確な使用痕が確認されないため礫とした。681は平面形が唾門礫を呈する敲石で、石器下部、右側面中央部に明確な敲打痕が観察される。

682はホルンフェルス製で、石器上下両端と両側面に敲打痕が確認される。685、686は一見すると磨面と判断されるかのような平坦面をもつものである。685はしモンのような形状を呈し、上下両端に、正面、裏面からの敲打で形成された平坦面により稜が形成される。686の上端も同様に、両面からの敲打により形成された平坦面により稜が形成されている。

687は、正面下部付近と裏面に敲打痕が観察される。688は砂岩製の磨石である。断面が凸状となっている正面中央に磨面が観察されるとともに、破砕面である裏面にも顕著な磨面が観察される。

#### A4 S222 (第103図)

E22Gr.に位置する。長径1.0m×短径0.91m、検出面からの深さは0.19mである。土坑底面付近に炭化材が多くみられ、炭素14年代測定では2950±25BPの年代値が得られている。

689は、打製石斧の未製品と考えられる石器である。ホルンフェルス製で、両面ともに自然面を残し、周辺からの剥離により成形が完了している。

690は、粗製深鉢で、胴部に丸みを持ち、口縁部が緩やかにくびれて外反する。口縁部外面から0.5～1cm程下に断面三角形の突帯が付く。突帯部分には明瞭な粘土紐の貼り付け痕が見られないため、突帯を一連の流れの中で作り出しているようにも思われる(IV 2 A②類)。

#### A5 S18 (第104図)

H21dGr.に位置する。遺構は、弥生時代以降の遺構に上部を削平された状態で検出されたが、ボウル状となる土坑内からは、20cm大の石が散在しており、一見すると集石遺構のような様相を呈していた。土

坑は長径0.87m×短径0.85mを測る。また、後述するIV 2 A④類にあたる693は遺構の下端と上部礫とに挟まった状態で出土している。

691は口縁部の直線的に大きく外に開く。器壁が厚く、口唇部を先細りに仕上げている(IV 1 B③類)。692は口縁部の直線的に立ち上がり、口唇部が丸く仕上げられている(IV 1 A⑨類)。693は胴部から口縁部の直線的に大きく外に開く。口縁部外面から0.5cm程下に細くて小さい断面形カマボコ状の突帯が付いている(IV 2 A⑩類)。694は口縁部の外反する。口縁部外面から0.5～1cm程下に断面三角形となる突帯が付いている(IV 2 B④類)。また、第113図791と第125図915もS18より出土した遺物である。A2 S2501 (第104～105図)

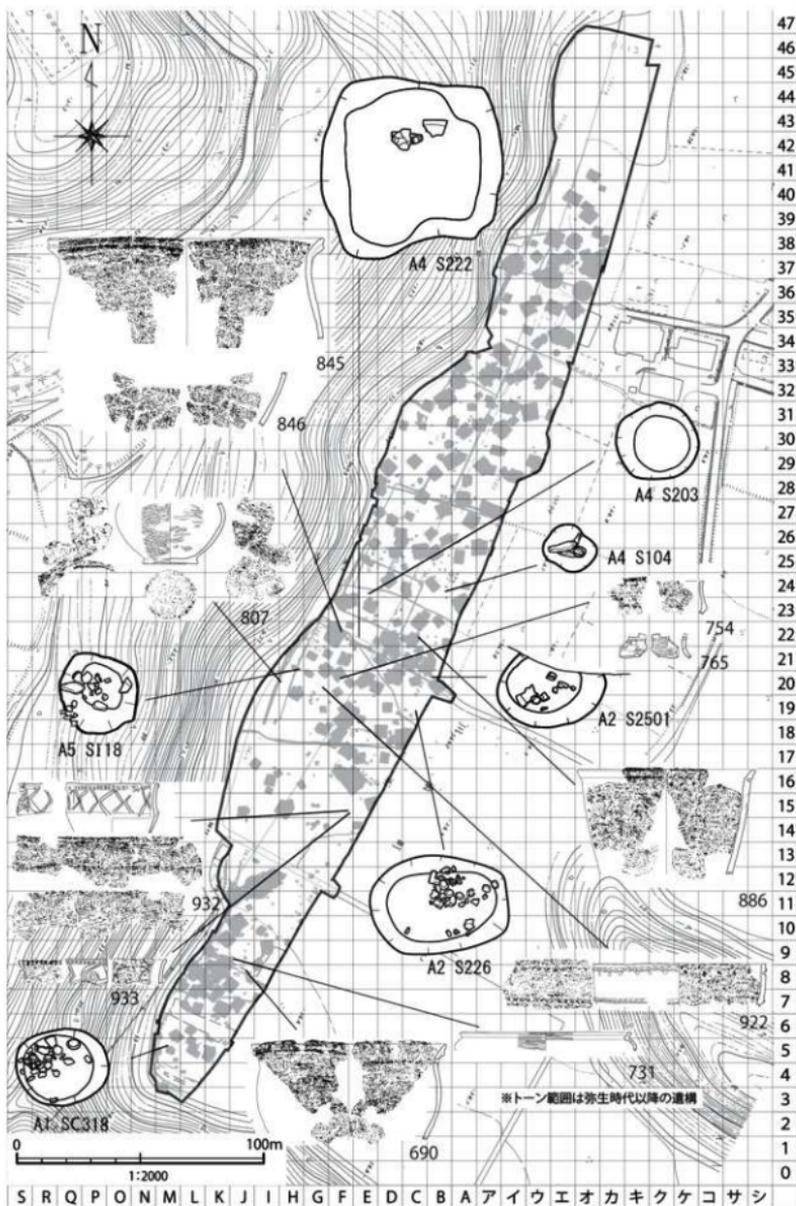
B20Gr.に位置する。長径0.88m×短径0.52m、検出面からの深さは0.32mを測る。S2501は、弥生時代の竪穴住居跡に切られている(写真図版4)。土器は全て床面付近から出土している。

精製の浅鉢は、口縁部の形態が異なるものが3点出土した。695は、胴部に稜を有せずに緩やかに屈曲し、口縁部が大きく開く。口縁部部に沈線を持たず、口唇部を丸く仕上げている(I⑤類)。

696は長い口縁部の直線的に開き、口唇部は内外沈線によってくびれ、玉縁を呈する。内外面ともに丁寧なミガキが施されている。697は、頸部が「く」の字に屈曲し、胴部に丸みを持ち、胴径は口径を上回る。口縁部部に沈線を持たず、口唇部を丸く仕上げている。内外面ともに丁寧なミガキで、外面は朱色を呈している(I①類)。

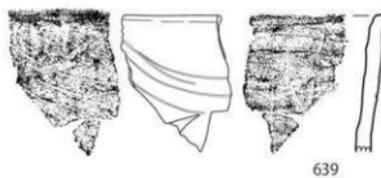
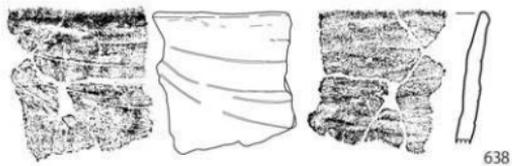
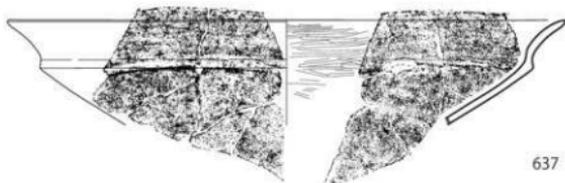
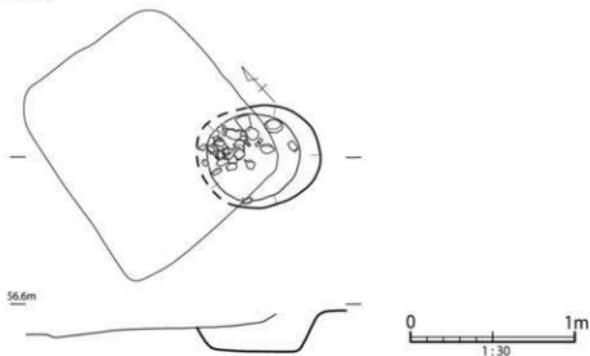
698はS2501と同グリッドより検出された弥生時代以降の遺構出土の精製浅鉢であるが、S2501より出土した699と器面調整や胎土から同一個体と判断されるため、ここに掲載している。699は698と同一個体と思われる浅鉢である。胴部はそろばん玉状に屈曲し、屈曲部には稜を持つ。内外面ともに丁寧なミガキで、外面は黒色を呈する。

700、701は同一個体である。胴部に丸みを持ち、口縁部は直口する。口縁部外面の端部から0.5cm程下に丸みのある突帯が付く。底部は上げ底の高状裾部を呈している(IV 2 A④類)。(文責：高橋・岸田)

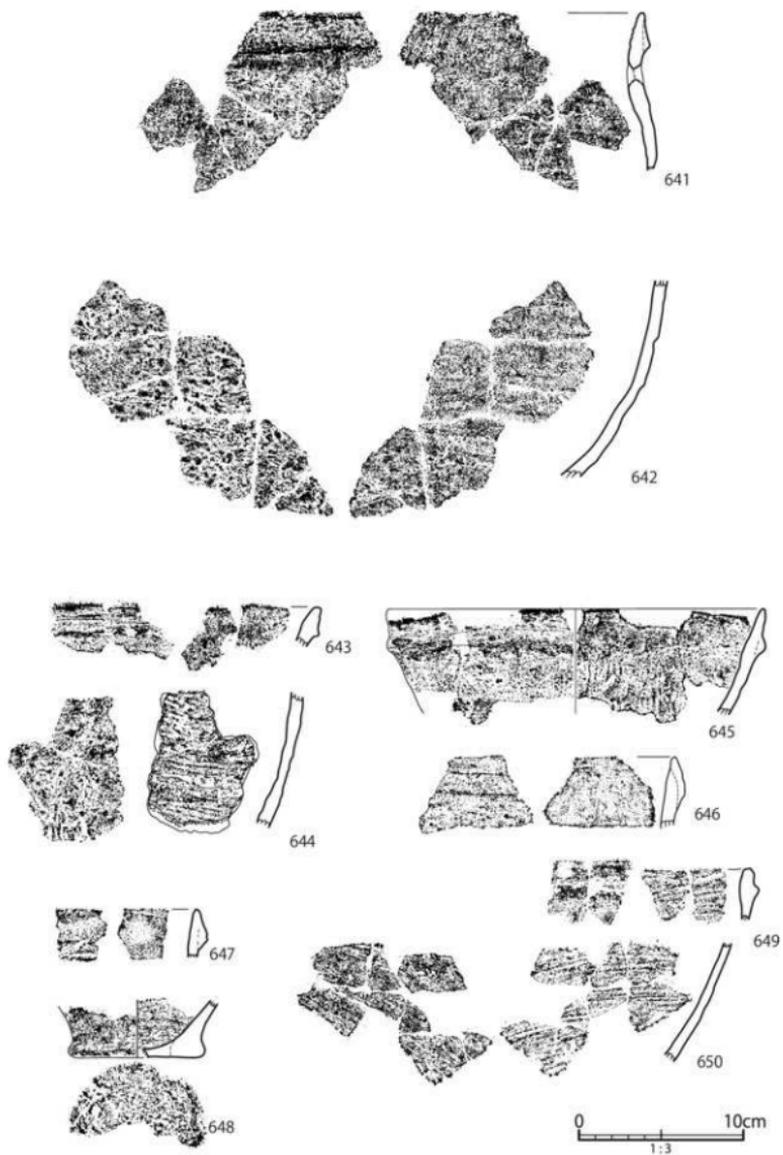


第96図 縄文時代晩期遺構・遺物分布図

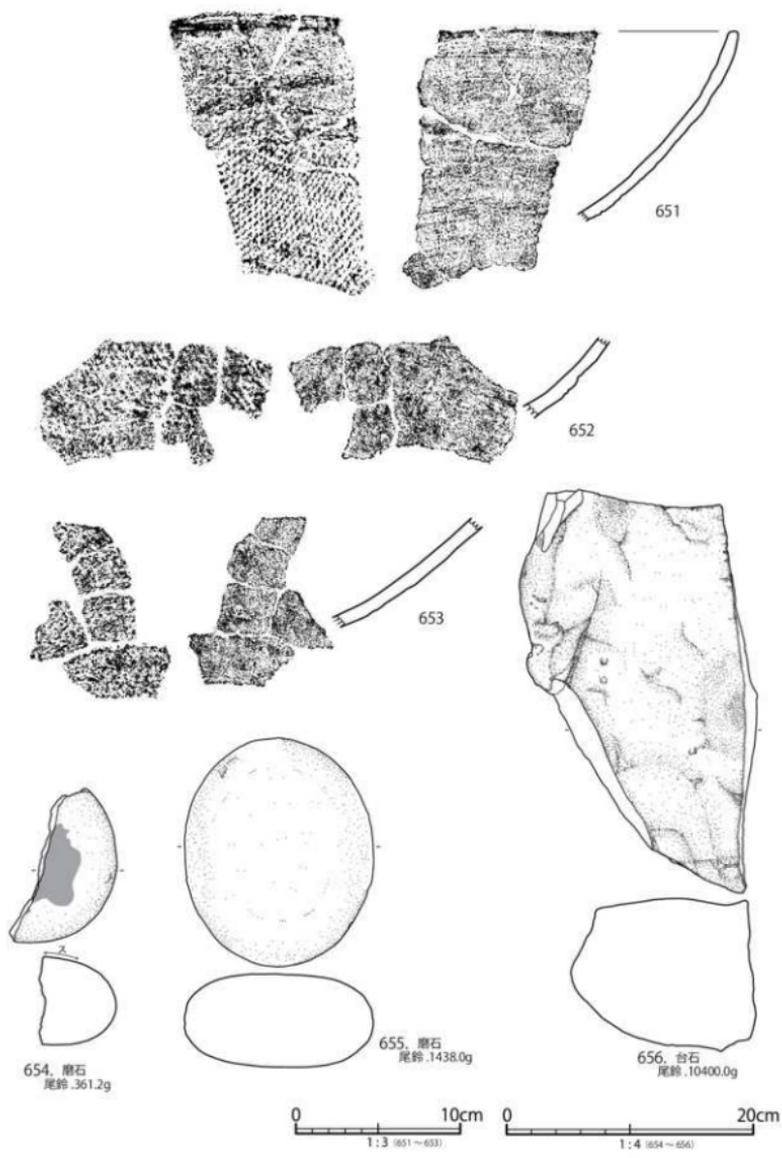
A15C318



第97図 A15C318及び出土遺物実測図

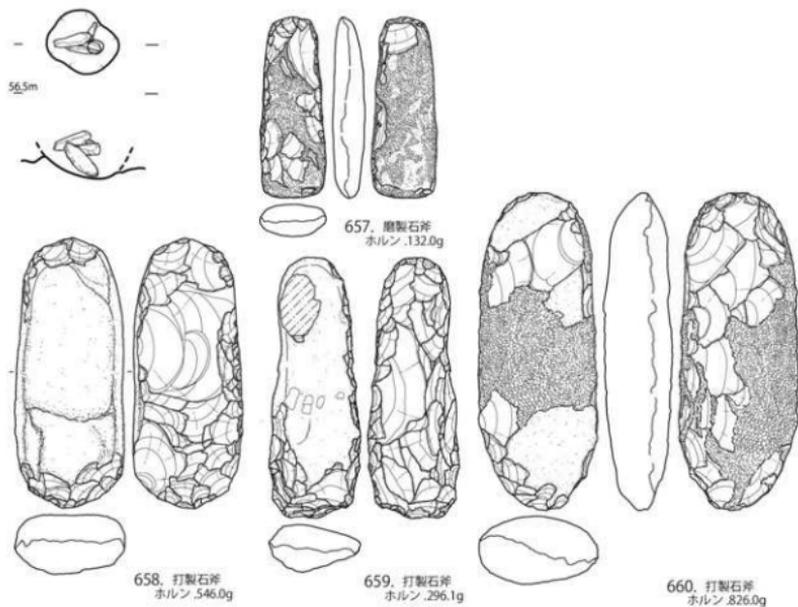


第 98 图 A1 SC318 出土遗物实测图 (1)

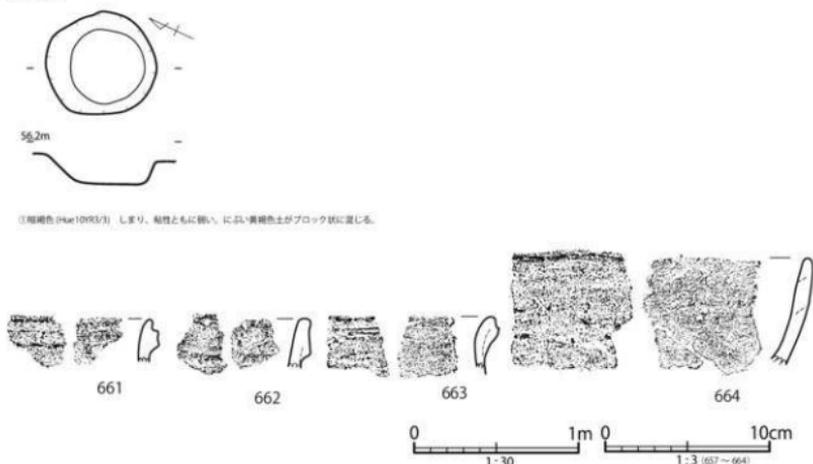


第99图 A1 SC318 出土遺物実測図(2)

A4 S104

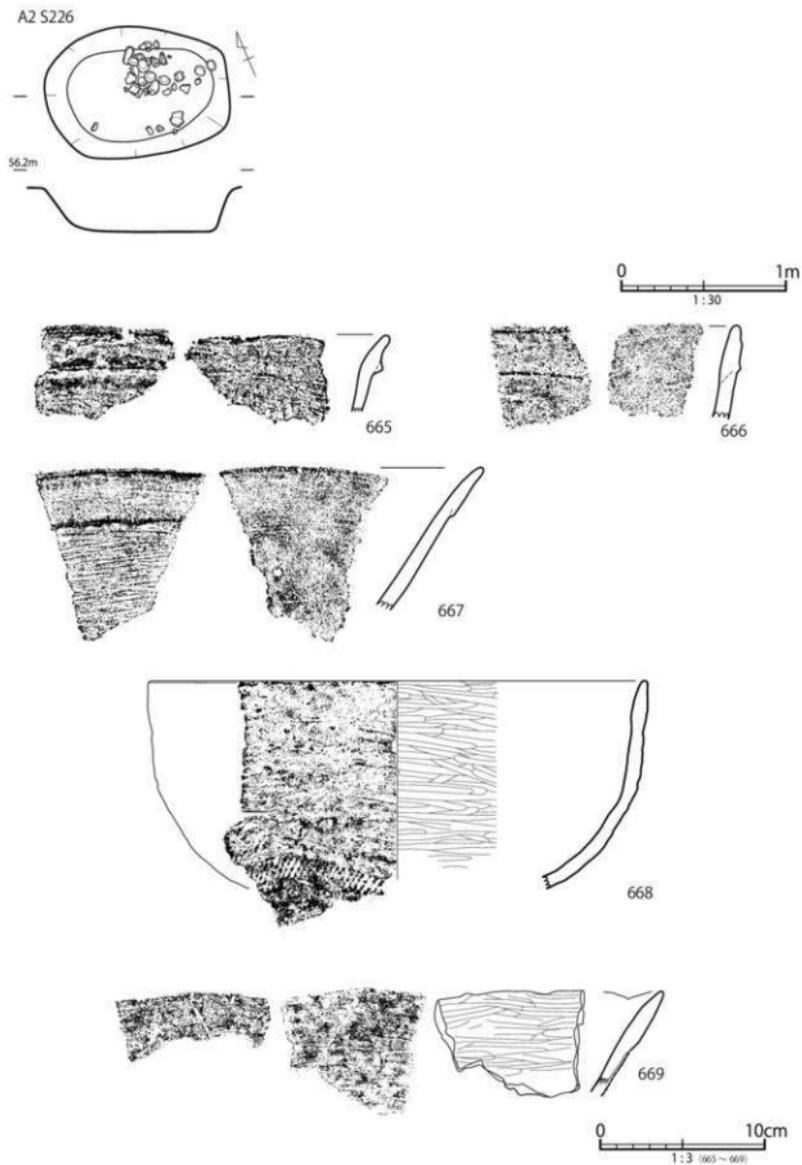


A4 S203

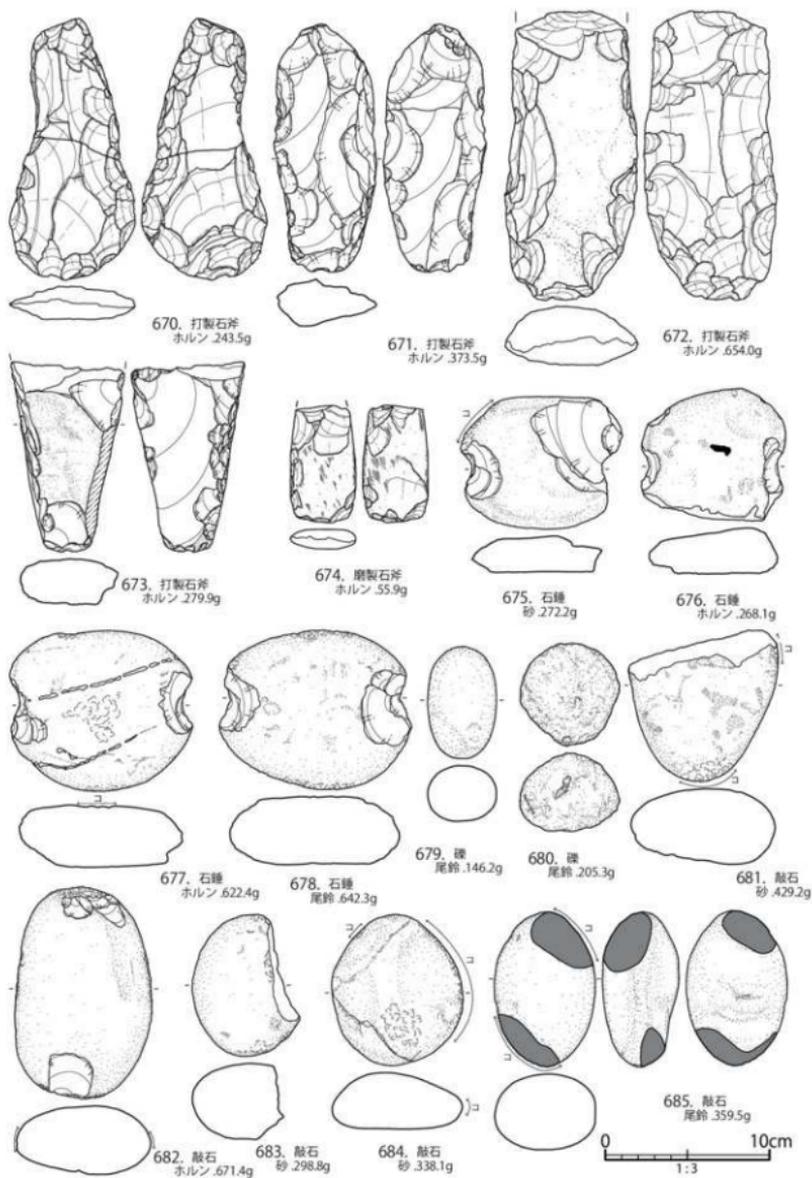


(注) 緑褐色(Hue10R3/3) しまり、胎性ともに強い。に灰・黄褐色土がブロック状に混じる。

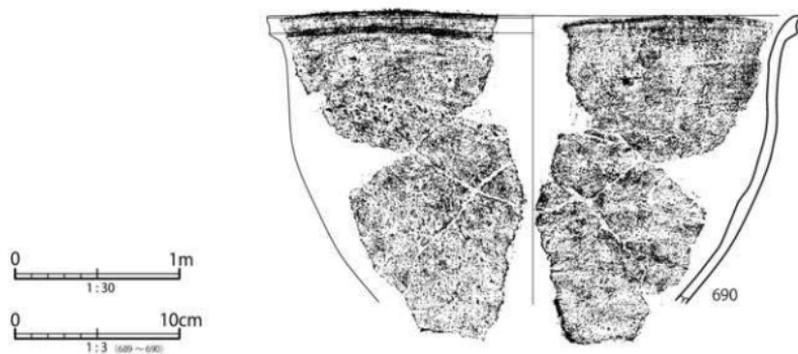
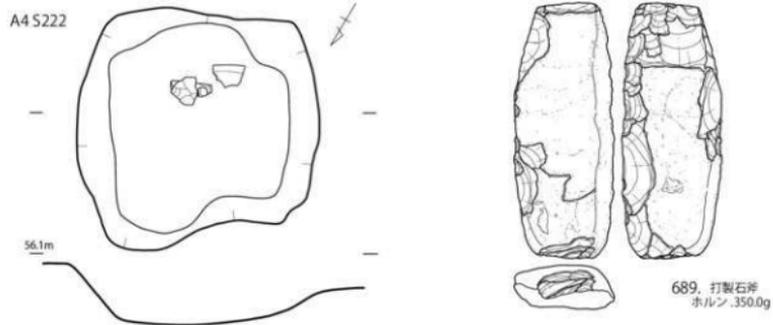
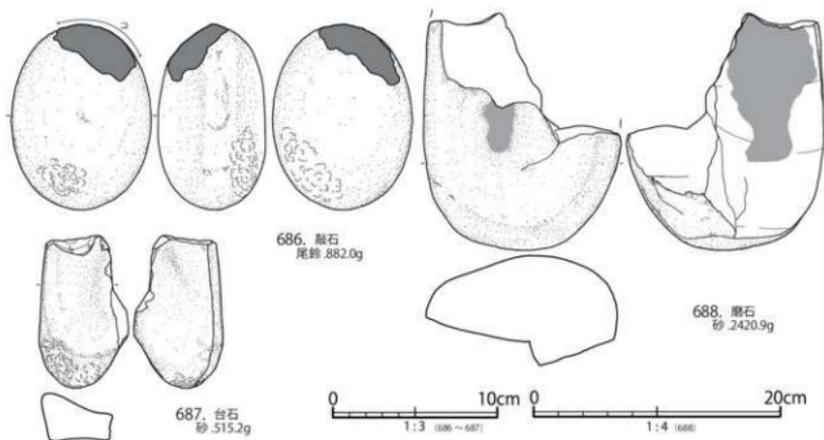
第100図 A4 S104 及び出土遺物実測図、A4 S203 及び出土遺物実測図



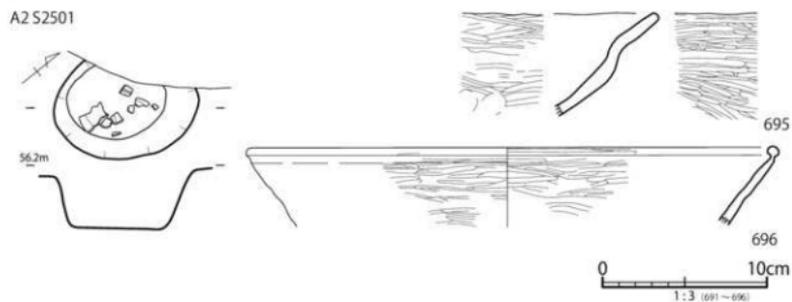
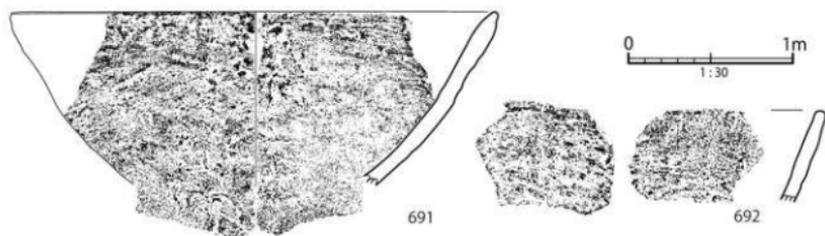
第101図 A2 S226及び出土遺物実測図



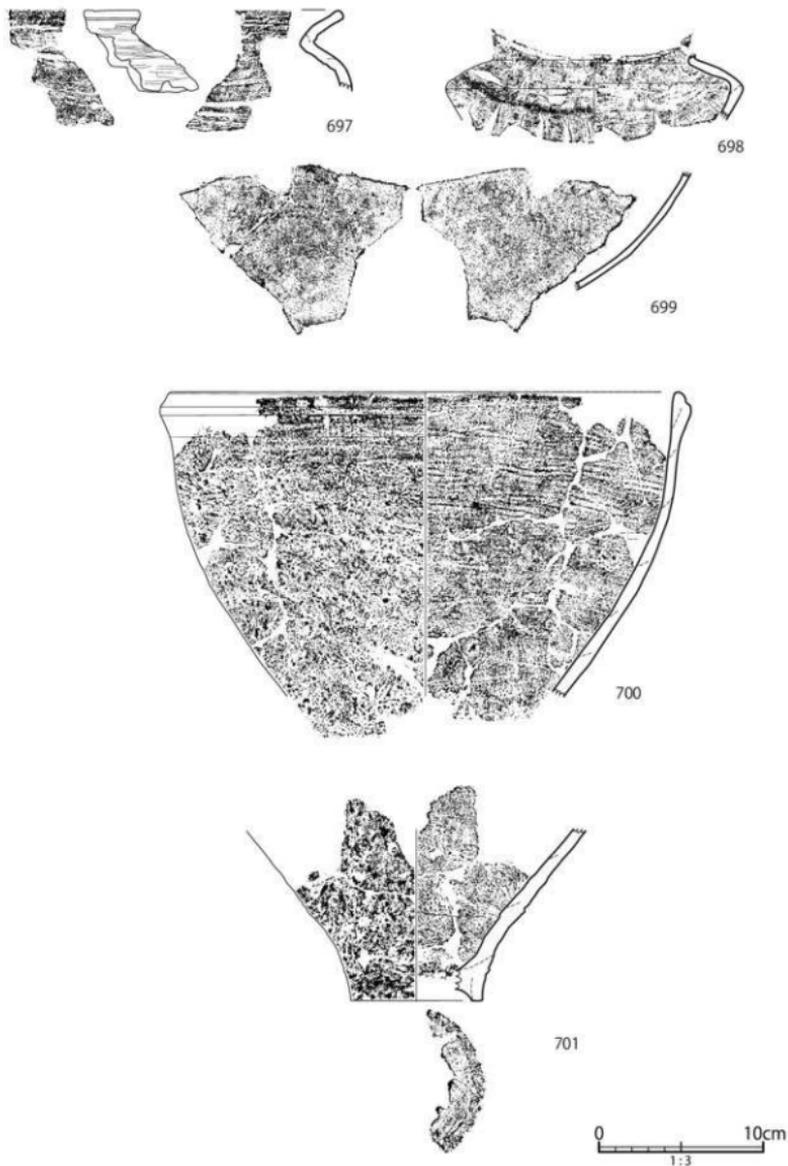
第102図 A2 S226 出土遺物実測図



第 103 図 A2 S226 出土遺物実測図、A4 S222 及び出土遺物実測図



第104図 A5 S118 及び出土遺物実測図、A2 S2501 及び出土遺物実測図



第 105 图 A2 S2501 出土遺物実測図

### 3 遺物 (第106図～第151図:写真図版75-96)

#### (1) 土器 (第106図～第131図:写真図版75-84)

遺構外より出土した晩期の土器は、口縁部形態等が比較的良く残りに、個々の特徴を示すものを中心に図化した。また、土器表面付着物の観察 (P145下) については、内山伸明氏 (鹿児島県埋蔵文化財センター) の協力を得た。

なお、晩期土器については便宜的に、器種やその調整方法から以下に示した分類と、土器片加工円盤に分けて説明を行う。

**I類:** 器壁が薄く、器面内外にミガキによる調整が施された (一部、同一器形で半粗半精のものを含む) 精製の浅鉢・鉢

**II類:** 器壁が薄く、器面内外ともにミガキによる調整が施された壺

**III類:** 器壁が厚く、器面内外ともにミガキが施されない粗製の浅鉢・鉢

**IV類:** 器面内外ともに条痕やナデ調整が施された粗製の深鉢

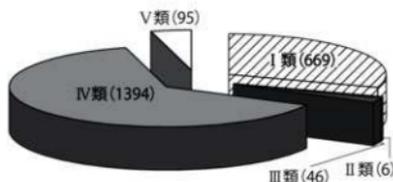
**V類:** 器面内外ともに条痕やナデ調整が施された刻目突帯文を有する鉢

**VI類:** IV類或いはV類の底部

#### I類: 精製浅鉢・鉢 (第107, 109～113図)

I類は、口縁部と胴部、底部形態の特徴で13類に細分類して掲載した。

- ①: 頸部から比較的最長い口縁部が外反し、胴部屈曲部に稜をもつもの。
- ②: ①の口縁部が短く、胴径が口径を上回り、胴部が内傾し、「く」の字を呈するもの。
- ③: 短い口縁部が付き、胴部は丸く屈曲するもの。胴径は口径を上回る。
- ④: ③の口縁部の立ち上がりなくなったもの。
- ⑤: 口縁部が直線的で、外に開くもの。
- ⑥: 口縁部が大きく開き、胴部は稜をもたないで緩やかに屈曲するもの。
- ⑦: 口縁部や胴部に沈線を持ち、胴部が「く」の字状に屈曲するもの。
- ⑧: 口縁部や胴部に沈線を持ち、ボウル状を呈するもの
- ⑨: 口縁部が外反し、外に開くもの。



第106図 I～V類割合図

※割合の対象は土器片の個数による

⑩: 特徴的な形態をもつもの (三叉状の文様・脚付鉢等)。

⑪: ①～⑨に属する浅鉢胴部片

⑫: ①～⑨に属さない浅鉢胴部片

⑬: 浅鉢底部

I類の土器は、胴部形態まで復元される個体は少なかった。そのため、口縁部片のみで判断することとなり疑問も伴うが、本分類でいうI②類、I③類、I⑦類と推測される口縁部片が多く確認されている。

また、I類の分布は、調査区南端 (一次調査区) と調査区中央 (三次調査B区・C区) にその分布は集中している。

#### I①類 (第109図702～717)

702は口縁部外面に稜を有する。703, 704は口縁部内外に沈線を持ち、口唇部は玉縁となっている。

705は口縁部内外の沈線が浅くなり、口縁部を丸く仕上げられている。

706～717は①類の口縁部になると思われる。706は口唇部が立ち上がり、口縁部外面に稜を持っている。707は口縁部内外ともに沈線が施されず、口唇部が先細りとなる。708は口縁部内外に沈線を持ち、口唇部は玉縁を呈する。709, 710は口縁部内外の沈線が浅くなり、口縁部は丸く仕上げられている。

713～715は口縁部内外の沈線が細くあるいは浅くなり、口唇部が玉縁状を呈さないものである。

716は口縁端部内面に粘土紐を貼り付け、片玉縁口縁を形成している。717は口縁端部内外に沈線を持たず、口縁端部に丸みを持たせている。鱗状突起を有し、外面には広葉樹の葉と思われる圧痕が確認される。なお、この植物の葉の葉脈の間隔は非常に狭く、これは土器焼成の際に土器が縮んだことによると思われるが、葉の芽生えが圧痕として残された可能性もある。

1②類 (第109～110図718～728)

718～721は口縁端部内面のみに沈線が巡っている。722～728は口縁部に沈線が施されないものである。また、724と727は鱗状突起を有している。

1③類 (第100図729～733)

729は口縁端部内外に沈線が、730～732は口縁部内面のみに沈線が巡っている。733は半粗半精製の泥胎で、口縁部に沈線は施されていない。

1②類及び1③類口縁部片 (第110図734～744)

734～744は②類あるいは③類の口縁部と思われるものである。

734、735は口縁端部内外に沈線が、736、737は内外の沈線が細く、浅くなるものである。

738、739は、口縁部に沈線が施されないものである。740～742は口縁と胴部間の内面屈折部に沈線が巡る。

743は口縁端部内面に粘土紐を貼り付け、片玉縁状の口縁を形成している。744は口縁端部内外とも沈線が施されず、口唇部が先細りとなっている。

1④類 (第110図745)

1④類に属するものは745の1点のみである。745は鱗状突起を有する。

1⑤類 (第110図746～747)

746、747は口唇部が平らに仕上げられている。また、747は鱗状突起を有している。

1⑦類 (第111図748～754)

748～751は胴部が屈曲し、「く」の字状を呈している。口縁部が内傾し、胴部外面の屈曲部のやや上方と口縁部内外面に沈線が巡る。また、751の口縁部外面は沈線というより、くびれ状を呈している。

752、753は胴部が屈曲し、「く」の字状を呈する。口縁部が直口及びやや内傾し、口縁端部外面にくび

れを持つ。754も胴部が屈曲し、「く」の字状を呈する。外反する口縁部はやや内傾し、口縁端部外面が外側に張り出している。

1⑧類 (第111図755～759)

755は胴部が丸くボウル状を呈する。胴部に2条の沈線が巡り、短い口唇部が外傾する。756、757はやや内傾する口縁部で、口縁端部外面に沈線状のくびれを持ち、口縁端部は外に開いている。また、756は外側にくびれ部沈線内に赤色付着物が確認される。758は口縁部に突起を持ち、丸みのある胴部外面の最大径上に沈線が巡っている。759は浅いボウル状を呈し、口縁部が外に開く。丸く形成された口縁端部が外反し、口縁部内面に浅い凹線が巡る。

1⑨類 (第111～112図760～770)

760は口縁部外面に輻状の粘土帯が付いている。762は口縁端部内に1条の、763は2条の沈線が巡る。764と765は長い口縁部が大きく外反し、口唇部が先細りになるものである。765は内外面とも丁寧なミガキが施されている。766は口唇部が先細り気味に仕上げられている。

767は口縁部が外側に大きく開く。外面全体に赤色付着物が確認される。768は長い口縁部が外反し、口縁端部外面が丸く仕上げられている。また、外面には赤色付着物の痕跡が確認される。770は長い口縁部が外反し、口縁端部内外に沈線が巡る。頸部外面に突起が付き、内外面に赤色付着物の痕跡が確認される。769は波状口縁で、口縁部が外側に大きく開く。口縁端部内外面と口縁下位に沈線が巡り、器形は皿状を呈すると思われる。

1⑩類 (第112図771～776)

771～773はいわゆる三叉文状の微隆起突起がみられるものである。776は脚付鉢と思われる。全身的に丁寧な作りで、脚柱部を2本の突起が巡るように成形している。774は器壁が厚く、内面口縁部に線状の段を有する。外面に比べ、内面が比較的丁寧にナデられていることから脚付鉢と思われる。775は透かしを有する脚柱部になるとと思われる。

1⑪類 (第113図777～786)

777～779は1⑪類の胴部片と思われる。また、779は胴部屈曲部に円形の突起が付き、

780～782はI②類の胴部片と思われる。

783, 784はI③類の胴部片と思われる。783は胴部屈曲部に鱗状突起を有している。

785, 786はI⑥類の胴部片と思われる。胴部外面に沈線を有する。785は丸みのある胴部外面に沈線を施す浅鉢と思われる。786はそろばん玉状を呈し、胴部外面に沈線が施されている。

#### I②類 (第113図787～790)

787～789は胴部屈曲部下位から底部付近で、内外面ともに丁寧なミガキが施されている。790は逆「く」の字を呈する胴部である。

#### I③類 (第113図791～802)

791～793は丸底、794～797は平底を呈するもので、796は2条、797は3条の沈線が巡っている。

798～802は上底を呈するもので、800は外面に赤色付着物が確認される。

#### II類:壺 (第114図)

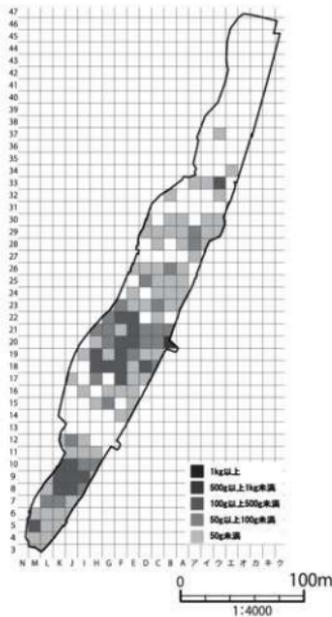
803は壺の頸部である。外面は横方向のミガキ調整がみられ、頸部下には突帯が付きしている。804は頸部下から肩部で、803と同様に頸部下に突帯が付きしている。805は壺の頸部とした。内外ともにナデ調整が行われ、頸部下に突帯が付きしている。806は壺の肩部である。内面は、剥落したような凹凸が観察される。807は胴部から底部で、裾が張り出すように、やや上底気味の平底を呈し、丸い胴部が立ち上がる。外面は丁寧なミガキが施され、内面は806と同様に剥落したような凹凸が観察される。また、工具による調整の単位が明確に残っている。

#### III類:粗製浅鉢 (第115～117図)

ここで分類する粗製浅鉢材料には、器面調整が内外ともに粗製のものとして一括している。III類は、19～M9GrとF18～J18Gr、F19～J19Gr周辺に集中して出土している。

ここでは以下のようにIII類土器を細分類した。

- ①類:孔列文を有する皿状の浅鉢・鉢
- ②類:その他の浅鉢・鉢の口縁部
- ③類:細直土器
- ④類:浅鉢・鉢の底部



第107図 I類重量分布図

#### III①類 (第115図808)

808のみの出土である。孔列文を持つ粗製浅鉢で、胴部が内湾する浅皿状を呈している。孔列文の刺突の深さは非常に浅く、貫通はしていない。

#### III②類 (第115図809～812)

809は口縁部が内湾し、胴部外面に凹線を有する。810は胴部は内湾し、口縁部が直口する。811と812は外面のみに屈折部を有している。

#### III③類 (第115～116図813～819)

813～819は編布圧痕を有する土器である。813は口縁部外面に幅広い肥厚口縁帯が付き、口縁部下部に圧痕が残っている。経糸幅4～5mm、緯糸幅1mm以下で密である。814は口縁部端部から0.5cm程下に断面三角形の突帯が付き。経糸幅6mm、緯糸幅1mm以下で密である。815は経糸2本、経糸幅1.3cm、緯糸幅1mm以下で密である。817, 818は同一個体で網代圧痕を有する土器である。819は817, 818の底部と思われる。816は網目圧痕を持つものである。

### Ⅲ④類 (第116～117図820～828)

器形が丸平底を呈する一群である。820～825は器壁が厚く、内面に粗いナデ調整が確認される。

826～828は上記に属さない底部で、826は底部外面に網代瓦痕を有している。

### Ⅳ類：粗製深鉢 (第118～125図)

深鉢は、器面内外ともに条痕やナデ等の調整が施されたものが多く、ミガキによる調整が施されたものは僅かである。

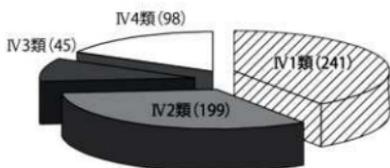
Ⅳ類の土器は、突帯の有無や孔列文の有無、口縁部付近の加飾の有無やその特徴から1～5類に類別した。なお、胴部については6類と一括した。

- 1類：無文
- 2類：無刻目突帯のみを持つもの
- 3類：孔列文のみ持つもの
- 4類：無刻目突帯と孔列文を持つもの
- 5類：弧線文を持つもの
- 6類：胴部片

また、特に口縁部から胴部まで遺存していた土器についてはA類、口縁部のみで胴部形態が不明確なものをB類とし、形態的特徴から更にA類を13類に、B類を5類に細分化して報告する。

#### A：口縁部+胴部形態の分類

- ①：口縁部が緩やかにくびれて外傾し、胴部に丸みを持つもの。
- ②：口縁部が緩やかにくびれて外反し、胴部に丸みを持つもの。
- ③：口縁部が緩やかにくびれて直口し、胴部に丸みをもつもの。
- ④：口縁部が直口し、胴部に丸みを持つもの。
- ⑤：外反する口縁部がやや内傾し、胴部に丸みをもつもの。
- ⑥：外反する口縁部が内傾し、胴部が張って、胴部に最大径となるもの。
- ⑦：直線的な口縁部が内傾し、胴部が張って、胴部に最大径となるもの。
- ⑧：口縁部が胴部から直口するもの。
- ⑨：口縁部が胴部から直線的に外に開くもの。
- ⑩：口縁部が胴部から直線的に大きく外に開くもの。



第108図 Ⅳ1～Ⅳ4類土器片割合図

※割合の対象は土器片の個数による

- ⑪：口縁部が外反し、胴部が直線的に立ち上がるもの。
  - ⑫：口縁部が胴部から内湾弧状に立ち上がるもの。
  - ⑬：口縁部が直口し、胴部が弱く屈曲するもの。
- B：胴部形態が不明なもの
- ①：口縁部が直口する。
  - ②：口縁部が直線的に外に開く。
  - ③：口縁部が直線的に大きく外に開く。
  - ④：口縁部が外反する。
  - ⑤：口縁部が内傾する。

前述したようにⅣ類の土器は、晩明土器の中でも最も量が多く確認されている。突帯文、孔列文の有無によりその割合をみると、Ⅳ1類、Ⅳ2類の割合が高くなっている(第108図)。また、胴部形態まで残存する資料もⅣ3類、Ⅳ4類に比べ多くなっている。

また、Ⅳ1～4類の土器重量分布をみると、Ⅳ1類、Ⅳ2類は、調査区南端(一次調査区)と調査区中央(三次調査区B区・C区)で出土が偏る傾向が見られるが、Ⅳ3類、Ⅳ4類では、その分布は調査区中央に集中している(第126図)。

#### Ⅳ1類 (第118図829～842)

829はA⑥類の土器である。外反する口縁部の内傾し、胴部が張り、最大径となる。器壁が厚く、口唇部を丸く仕上げている。

830～833はA⑩類の土器である。830は器壁が厚く、口唇部を丸く仕上げている。831は器壁が比較的薄く、口縁部を肥厚させている。

832と833は器壁が比較的薄くなっている。832は口唇部を平坦に仕上げ、鱗状突起が付いている。また、833は口唇部を先細りに仕上げている。

834、835はA⑨類の土器である。834は波状口縁で、波頂部に押圧が施されている。835は器壁が比較的薄く、口縁端部が短く外反している。

836～839はB①類の土器である。836と837は波状口縁をなし、器壁が厚く、口唇部を丸く仕上げている。838はやや器壁が薄く、胴部がやや内湾気味になると思われる。口唇部は丸く仕上げている。839は器壁が比較的薄く、口唇部を丸く仕上げている。

840～842はB②類の土器である。840は器壁が比較的薄く、口唇部を先細り気味に仕上げている。841と842は器壁が厚く、口唇部を丸く仕上げている。

#### IV 2類 (第119～121図843～866)

843はA①類である。胴部に丸みを持ち、口縁部が緩やかにくびれて外傾する。口縁端部外面に厚みのある幅狭の粘土帯を貼り付け、断面形がカマボコ状を呈する口縁帯を形成している。

844～847はA②類の土器である。口縁端部外面から0.5～1cm程下にしっかりとした断面三角形の突帯が付く。847は口縁端部外面から0.5～1cm程下に薄い粘土帯を貼り付け、その上下をナデて断面三角形の小さい突帯状に作り出している。

848はA⑤類である。胴部に丸みを持ち、外反する口縁部がやや内傾する。口縁端部外面に幅狭の粘土帯を貼り付け、その上下をナデて突帯状に作り出している。粘土帯は非常に薄い。

849はA⑥類である。胴部から口縁部が傾斜する。口縁端部外面に幅狭の粘土帯を貼り付け、その上下をナデ、小さい断面三角形の突帯状に作り出している。粘土帯は非常に薄い。

850、851はA⑨類である。850は口縁部外面に幅広の薄い粘土帯を貼り付け、その上下をナデて断面三角形の突帯状に形成している。851は口縁部外面の端部から0.5～1cm程下に薄い粘土帯を貼り付け、その上下をナデて断面三角形の小さい突帯を作り出している。852は口縁端部外面から1cm下に、断面三角形の小さい突帯を作り出している。また、外面には微隆状の突起が観察される。

853～855はB①類に属する。853、854は口縁端部外面に厚みのある幅広の粘土帯を貼り付け、口縁帯を形成している。口縁帯の頂部を凹線気味にナデることで、頂部の窪んだ断面台形状に仕上げている。855は口縁端部外面から0.5～1cm程下にしっかりとした断面三角形の突帯が作り出している。

856、857はB②類である。856は口縁端部外面に幅広の粘土帯を貼り付け、口縁帯を形成している。

858はB③類である。口縁部が直線的に大きく外に開く。口縁端部外面から0.5～1cm程下に薄い粘土帯を貼り付け、その上下をナデて断面三角形の小さい突帯を作り出している。

859～865はB④類である。859は口縁端部外面に幅広の粘土帯を貼り付け、口縁帯を形成している。860は口縁部外面の端部から0.5～1cm程下にしっかりとした断面三角形の突帯が付く。861～863は口縁端部外面から0.5～1cm程下に薄い粘土帯を貼り付け、その上下をナデて断面二等辺三角形の小さい突帯を作り出している。862には鱗状突起が付く。864は波状口縁である。口縁部外面の端部から1cm程下に丸みのある小さい突帯が付いている。865は口縁端部外面から1～2cm程下に断面三角形の小さい突帯が付く。

866はB⑤類である。波状口縁で口縁部は内傾する。口縁部外面端部から0.5～1cm程下に薄い粘土帯を貼り付け、その上下をナデて断面三角形の小さい突帯を作り出している。

#### IV 3類 (第122図867～882)

867はA⑥類である。外反する口縁部が内傾し、胴部が張って最大径となる。器壁が厚く、口唇部に丸みを持つ。また、内面口唇部付近には0.3cm大の円形の孔が確認される。この孔は、孔を作出する際の痕跡が明確でなく、孔列文を施そうとしたものではないと思われ、種別王痕等の可能性がある。

868はA⑦類である。直線的な口縁部が内傾し、口唇部を突帯に似せるかのように張り出した形状を呈する。また、胴部は張って最大径となる。

869、870はA⑨類で、胴部から口縁部が直線的に外に開く形状を呈している。

871～873はA⑩類である。3点ともに胴部から

口縁部が内湾気味に立ち上がる。873は口唇部を突帯に似せるかのように張り出す形状を呈する。

874～876はB①類である。874は沈線で口縁部外面にアクセントを付け、その上から孔列文を施している。875は波状口縁をなし、口縁部外面を突帯気味に丸く肥厚させている。876は突帯や肥厚に似せるかのように口唇部を短く外反させている。

877、878はB②類である。877は沈線で口縁部外面にアクセントを付け、その上から孔列文が施されている。878は口縁部外面を突帯気味に丸く肥厚させている。

879～882はB④類である。879は孔列文が貫通している。880は内面に凸の出ない浅い孔列文が施されている。

#### IV 4類 (第123～124図883～904)

883はA⑥類である。外反する口縁部が内傾し、胴部が張って最大径となる。粘土紐を口唇部上に巡らせ、断面カマボコ形の突帯を形成している。

884はA⑧類である。胴部から口縁部が傾き口している。また、口縁部外面から1cm程下に断面三角形の突帯がつく。

885はA⑩類である。口縁部外面に幅狭の粘土帯を貼り付け、その上下をナデて突帯状に作り出している。粘土帯は非常に薄く、突帯は非常に小さい。また、孔列文下位には三角形の細沈線文が施されている。

886はA⑪類である。胴部が直線的に立ち上がり、口縁部が外反する。口縁部外面に幅広の粘土帯を貼り付け、その上下をナデて突帯状に作り出している。粘土帯は非常に薄く、突帯は非常に小さい。

887はA⑬類である。胴部が弱く屈曲し、屈曲部には稜が形成される。口縁部外面に厚みのある幅狭の粘土帯を貼り付け、断面カマボコ形の口縁帯を形成している。また、竹管施文による孔列文が巡っている。

888～893はB①類である。888は口縁部外面に幅狭の粘土帯を貼り付け、口縁帯を形成している。また、突帯上位には孔列文が施文されている。889は口縁部外面に幅狭の粘土帯を貼り付け、その上下をナデて、上位の窪んだ断面三角形の突帯状に成

形している。890、891は口縁部外面の端部から1cm程下に丸味のある小さい突帯が付く。突帯部分の粘土紐の貼り付け面が不明瞭である。892、893は口縁部外面から2cm程下に凹線を巡らせ、その上位を口縁帯状に作り出し、凹線から、孔列文が施されている。

894、895はB②類である。894は口縁部外面に幅広の粘土帯を貼り付け、口縁帯を形成している。また、孔列文は貫通している。895は口縁部外面に幅狭の粘土帯を貼り付け、その上下をナデて上位の窪んだ断面三角形の突帯状に形成している。

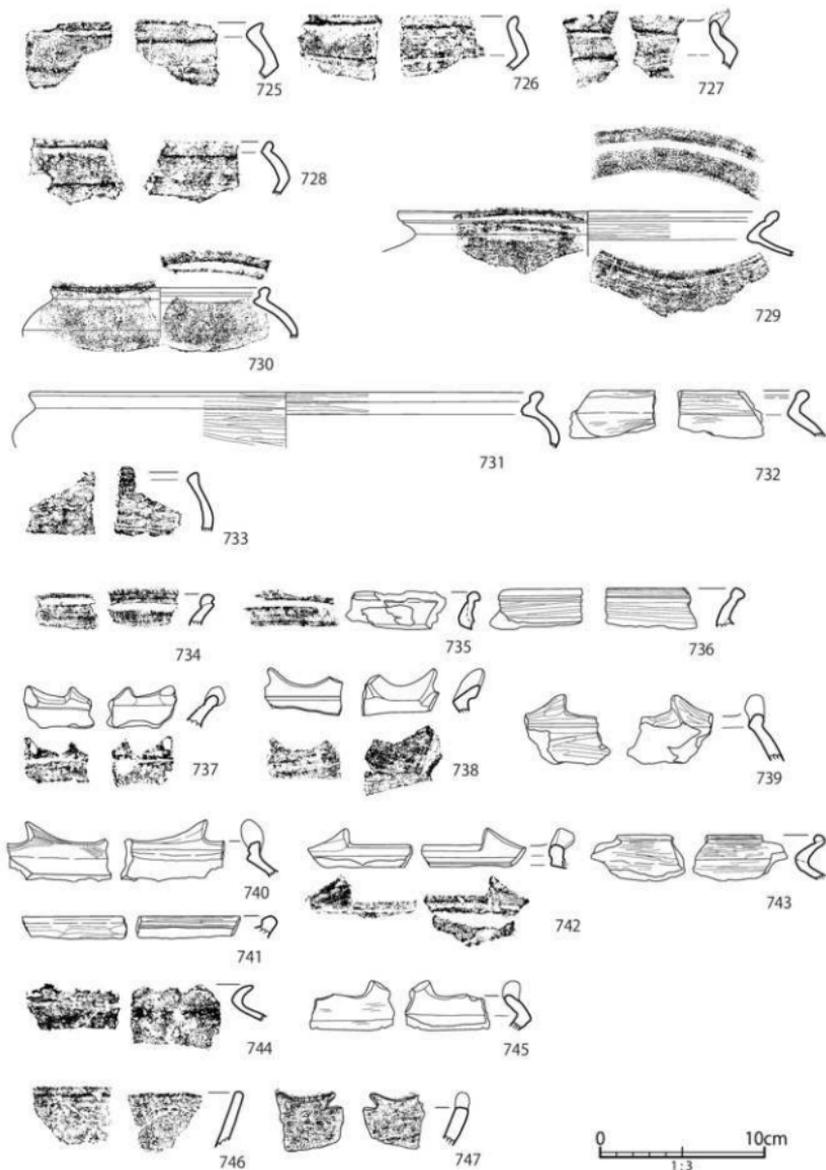
896～904はB④類である。896～898は口縁部外面に幅広の粘土帯を貼り付け、その上下をナデて突帯状に作り出している。899は口縁部外面に幅狭の粘土帯を貼り付け、その上下をナデて突帯状に作り出している。900、901は、口縁部外面の端部から0.5～1cm程下に薄い粘土帯を貼り付け、その上下をナデて小さい突帯を作り出している。900は断面三角形、901は断面二等辺三角形の突帯を有する。902は口縁部外面から2cm程下に断面三角形の小さい突帯が付く。突帯部分の粘土紐の貼り付け面が不明瞭である。903、904は同一個体と思われる。903は頂部が丸くなる小さい突帯が付くが、粘土紐の貼り付けは不明瞭である。

#### IV 6類 (第125図905～915)

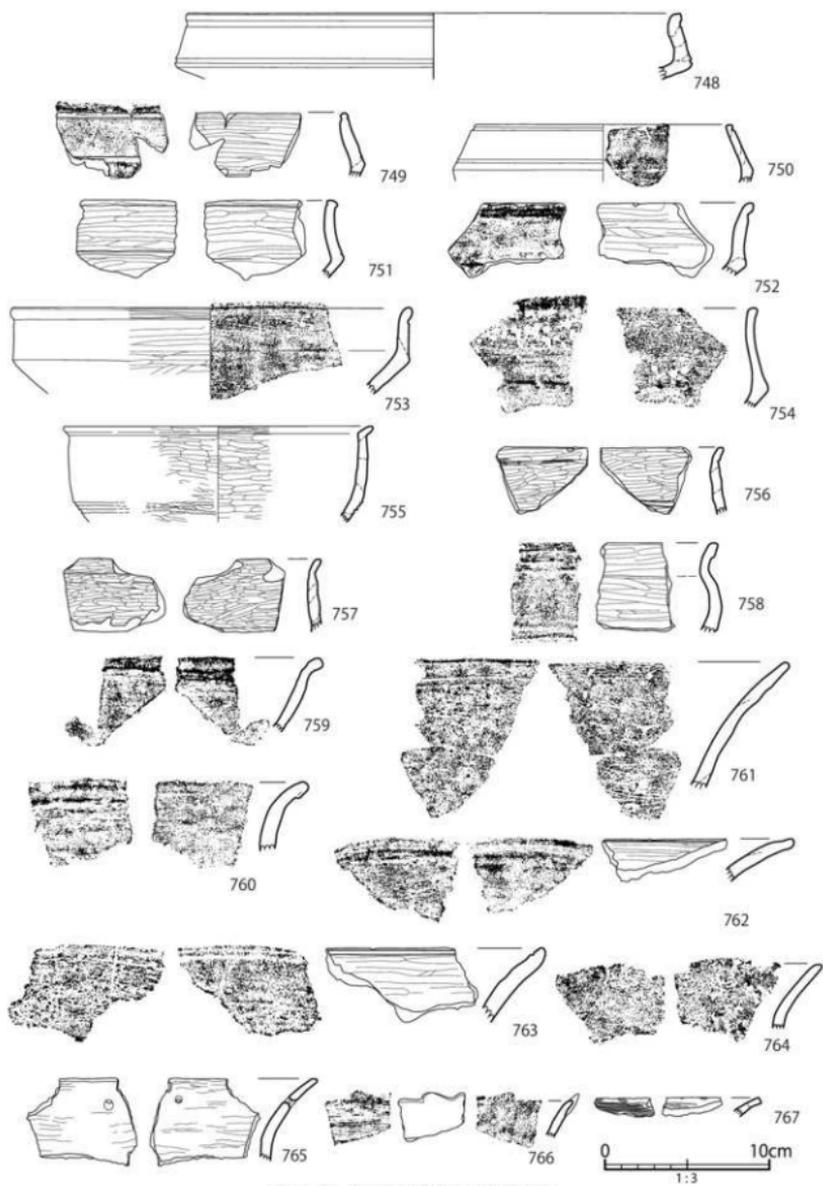
深鉢の胴部片を一括した。器面調整は貝殻条痕や条痕によるナデがほとんどである。905は胴部が張り、胴部最大径部分に断面三角形の突帯が巡る。906は、直線的に伸びる胴部上位部分と思われ、外面に細い断面三角形の突帯が付いている。907は直線的に立ち上がる胴部の外面に沈線が見られる。908、909は胴部上位に位置すると思われる。910～915は胴部中位から下半部と思われ、胴部が直線的または内湾気味に立ち上がっている。



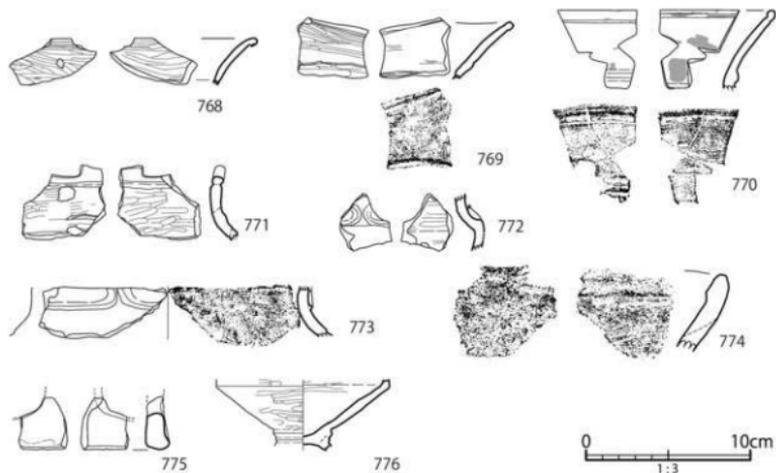
第 109 図 縄文時代晩期土器実測図 (1)



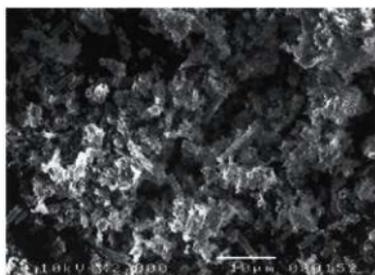
第110圖 縄文時代晩期土器実測図(2)



第111図 縄文時代晩期土器実測図(3)



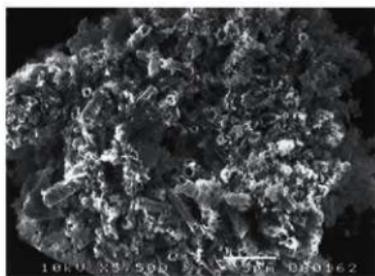
第 112 図 縄文時代晩期土器実測図 (4)



赤色粒子電子顕微鏡写真 (754)



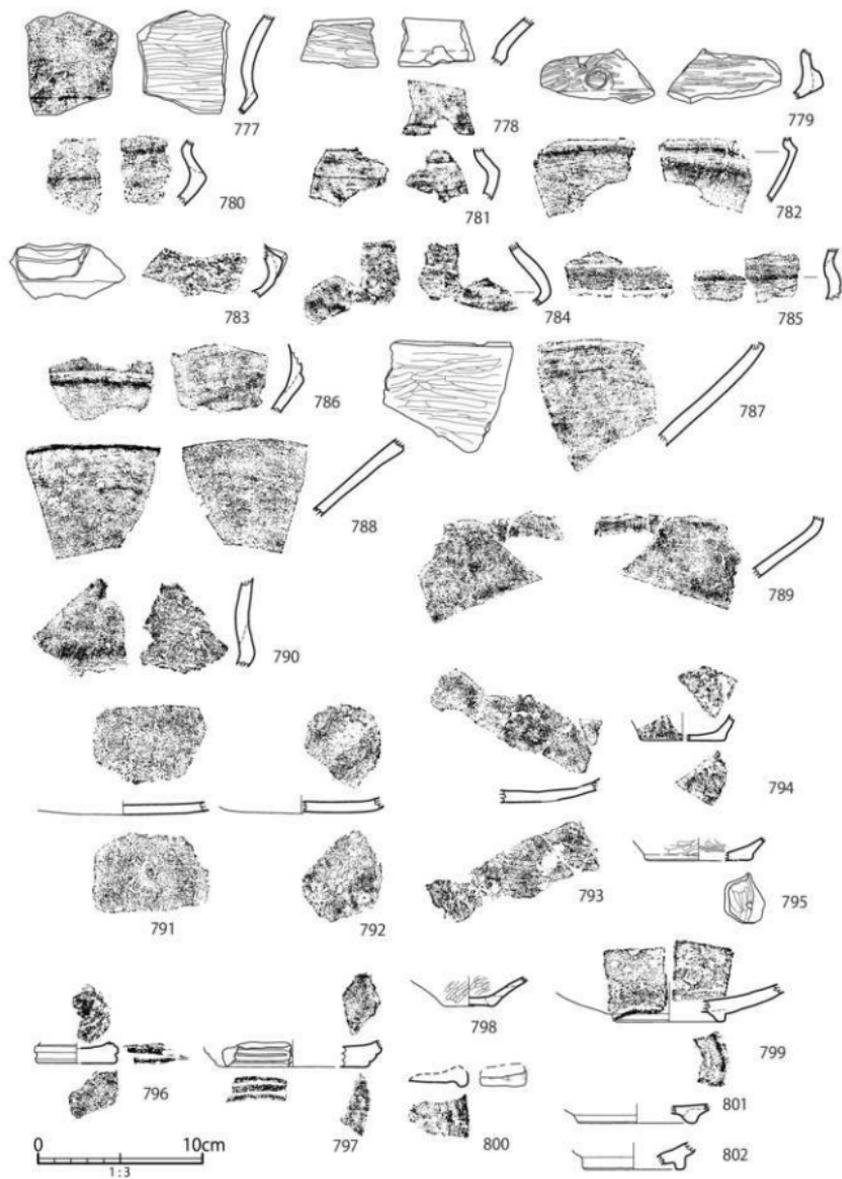
赤色粒子電子顕微鏡写真 (768)



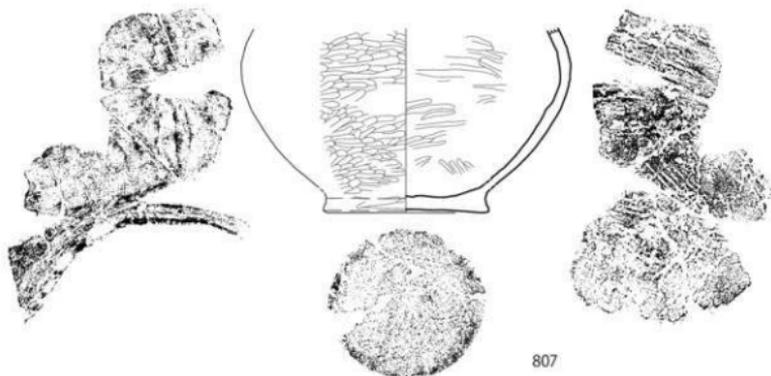
赤色粒子電子顕微鏡写真 (770)



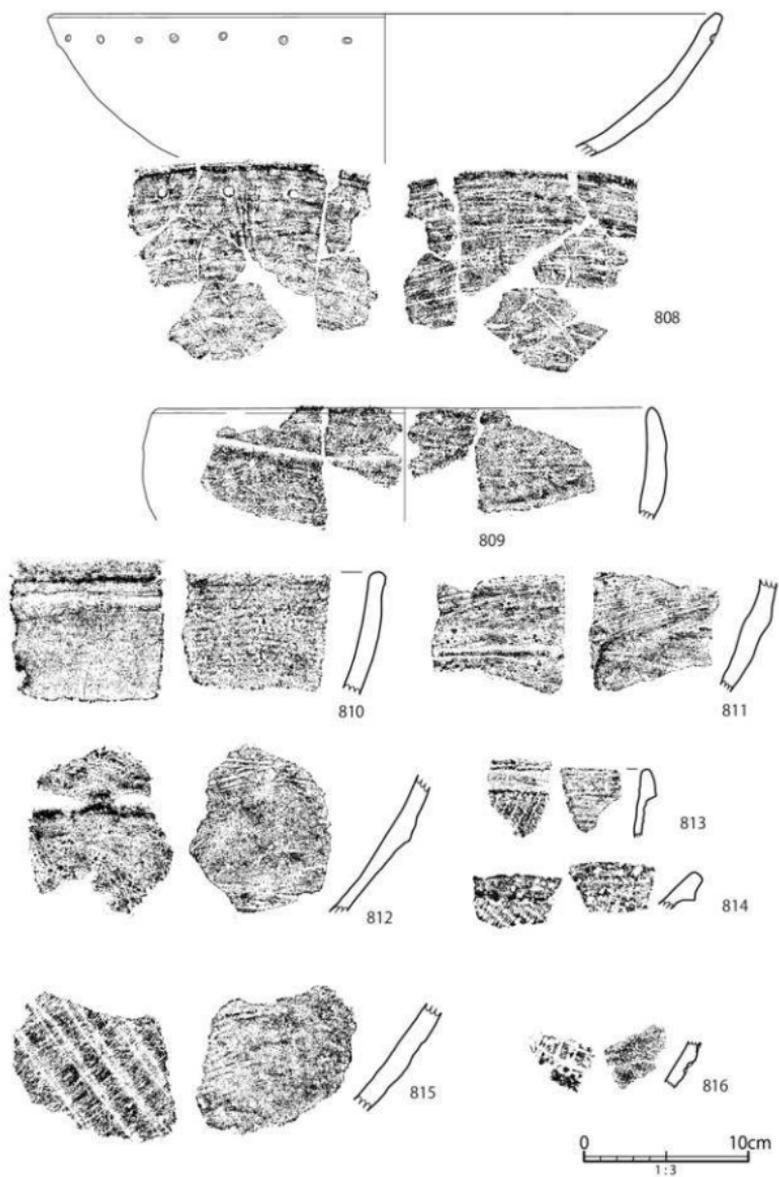
赤色粒子電子顕微鏡写真 (800)



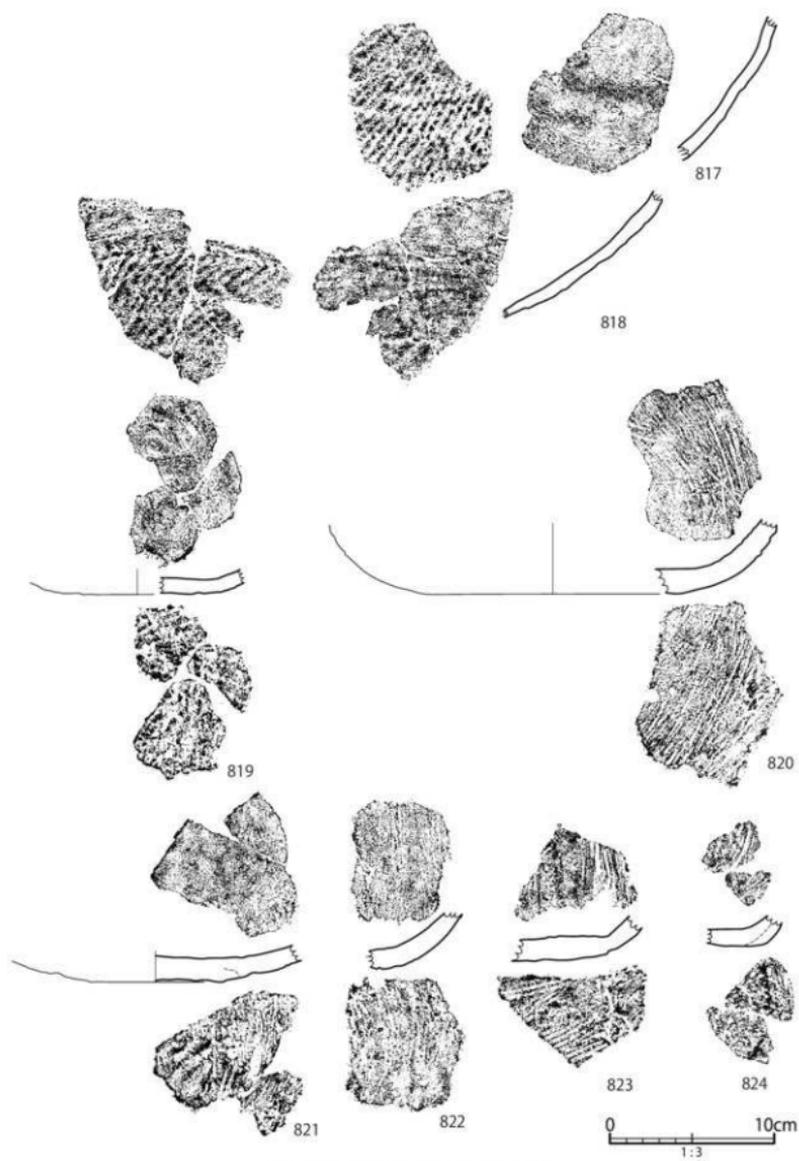
第113圖 縄文時代晩期土器実測図(5)



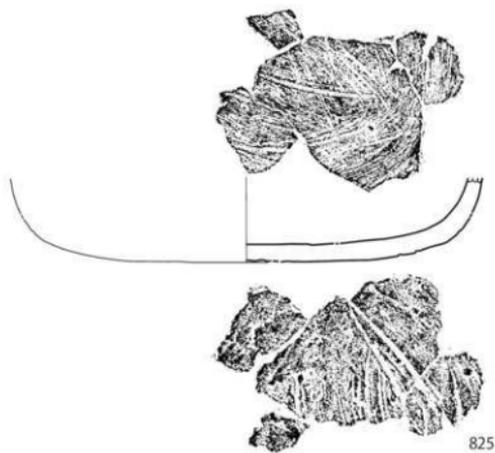
第114図 縄文時代晩期土器実測図(6)



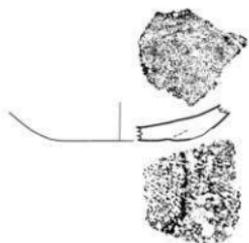
第115図 縄文時代晩期土器実測図(7)



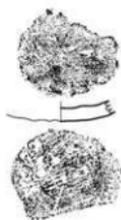
第116図 縄文時代晩期土器実測図(8)



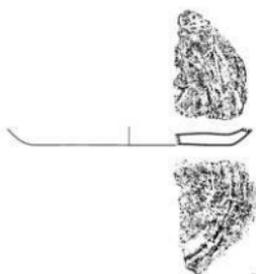
825



826



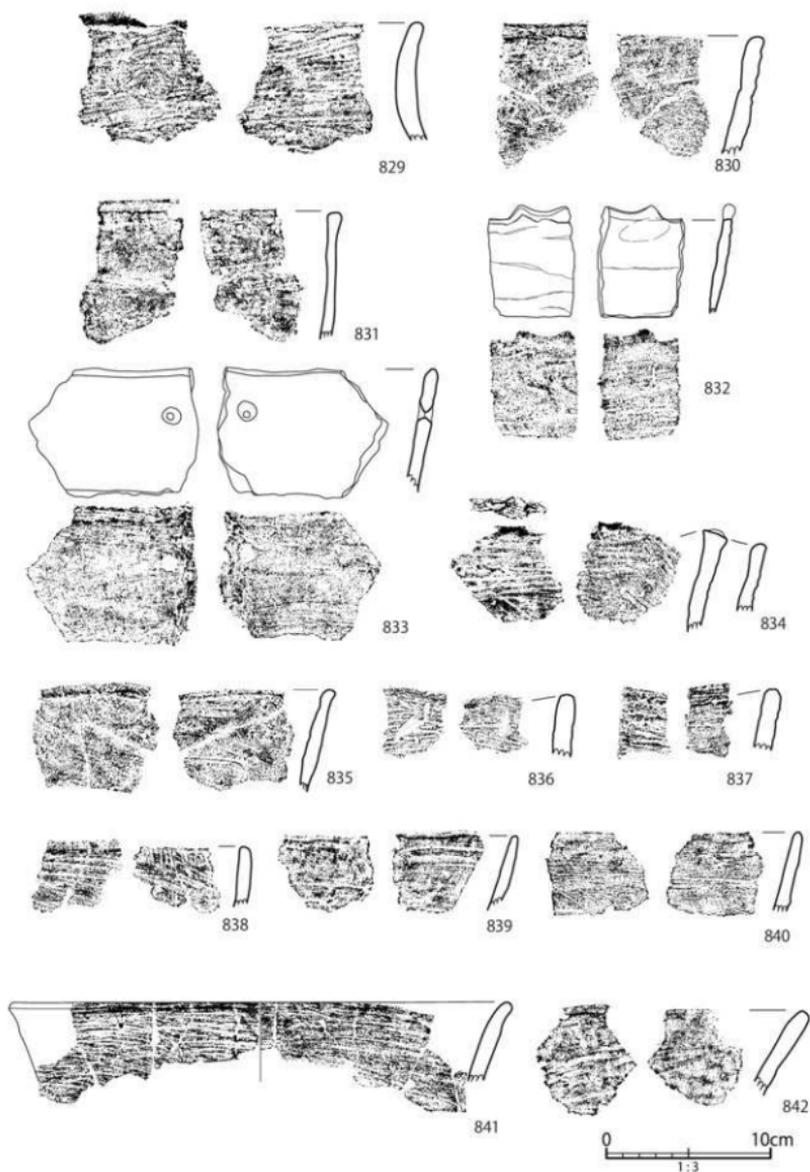
827



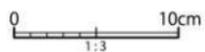
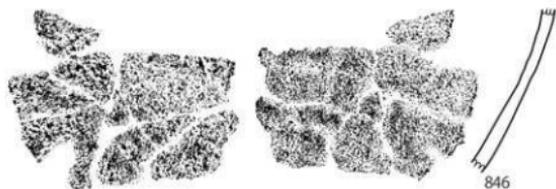
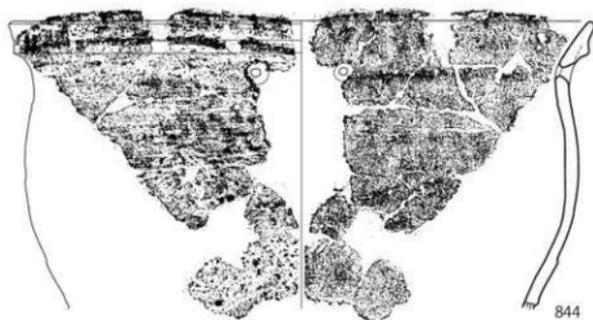
828



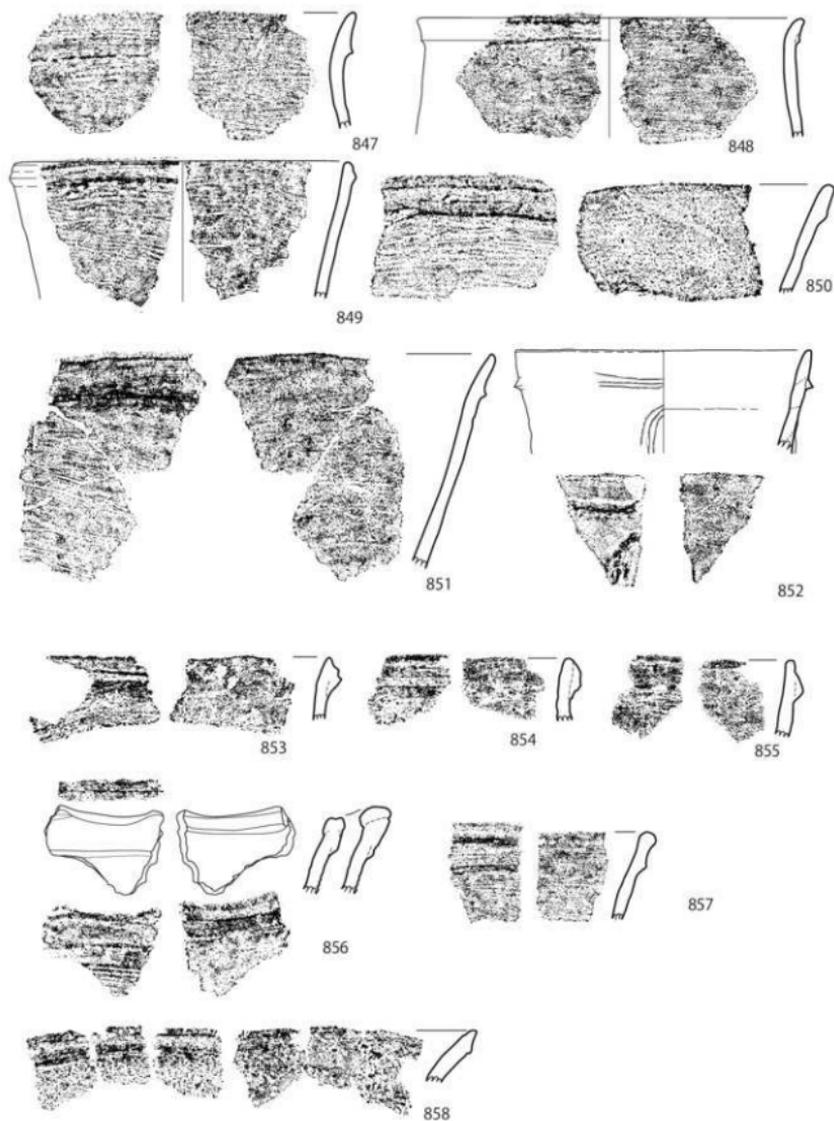
第117図 縄文時代晩期土器実測図(9)



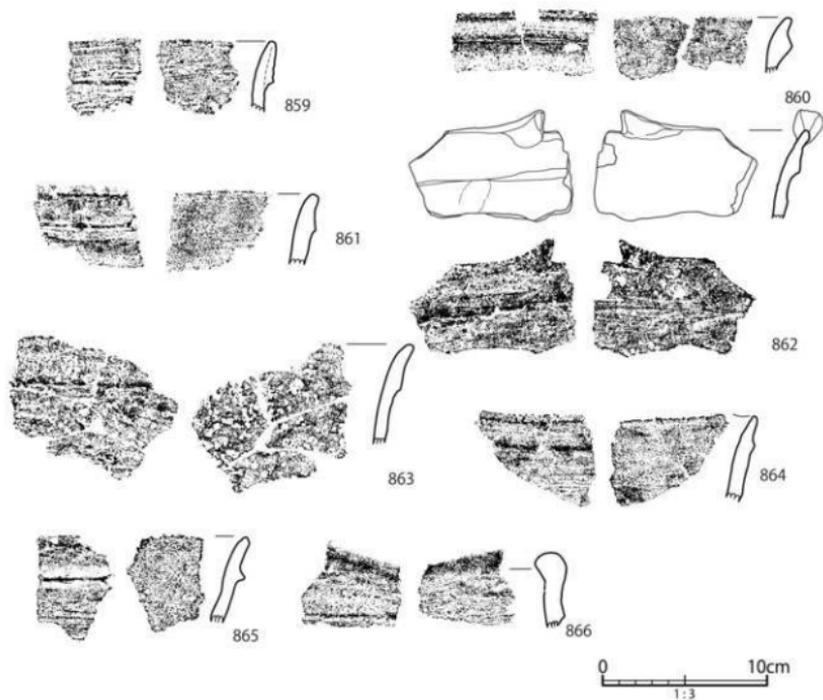
第 118 図 縄文時代晩期土器実測図 (10)



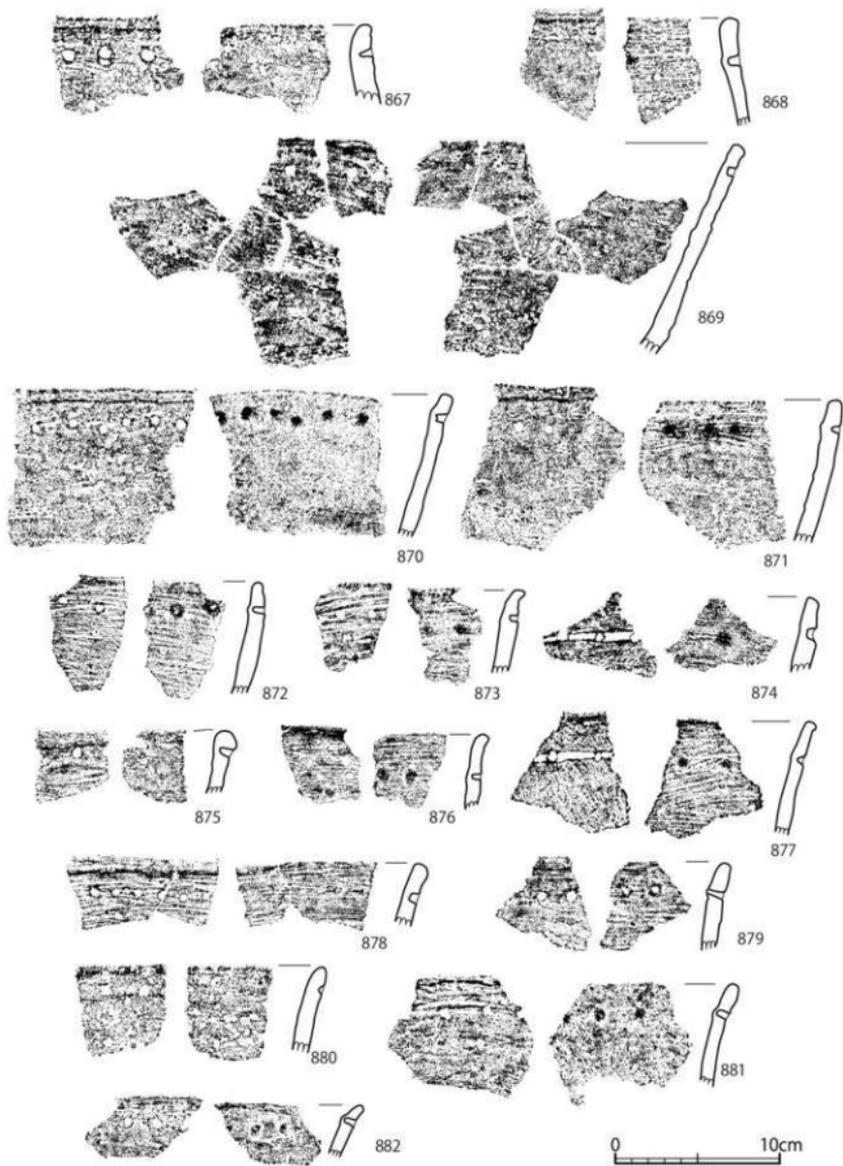
第119図 縄文時代晩期土器実測図(11)



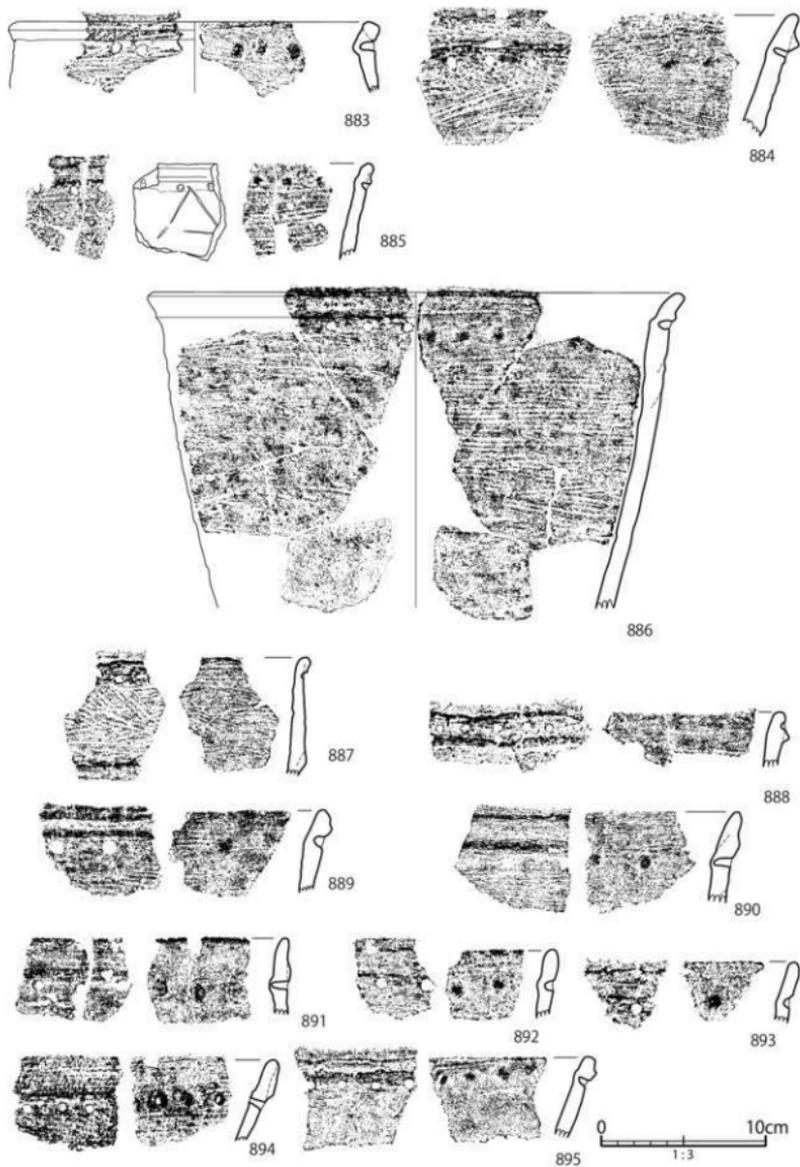
第 120 図 縄文時代晩期土器実測図 (12)



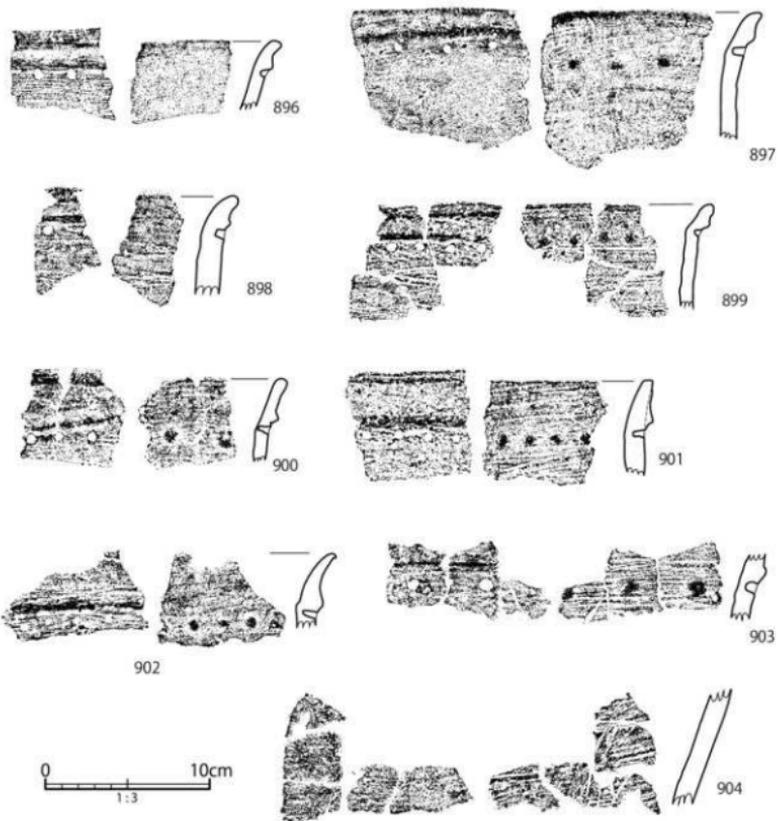
第 121 図 縄文時代晩期土器実測図 (13)



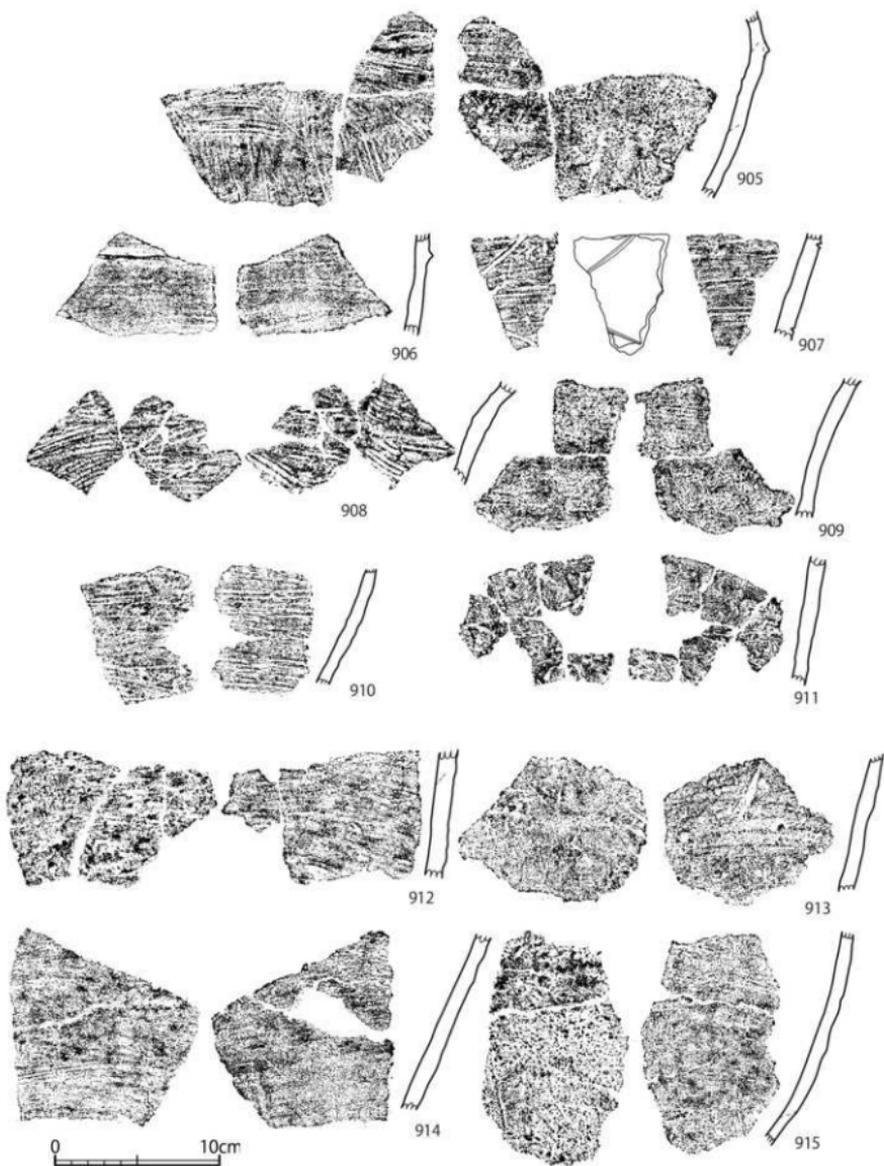
第 122 図 縄文時代晩期土器実測図 (14)



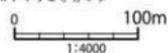
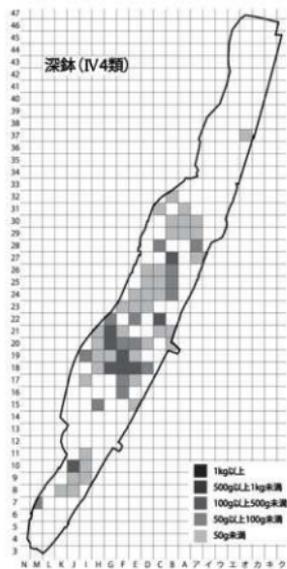
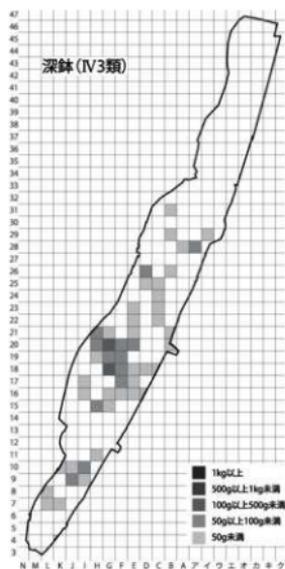
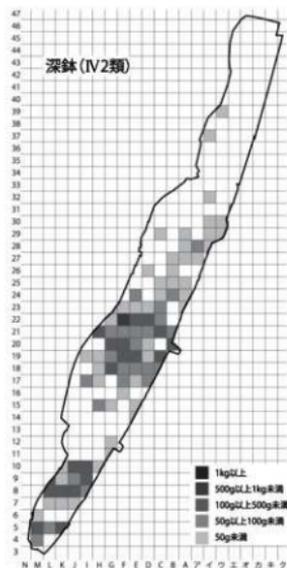
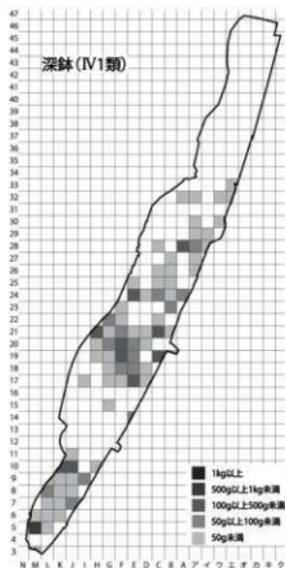
第 123 図 縄文時代晩期土器実測図 (15)



第 124 図 縄文時代晩期土器実測図 (16)



第 125 図 縄文時代晩期土器実測図 (17)



第126図 深鉢 (IV1類～IV4類) 重量分布図

#### V類：刻目突帯文を有する鉢 (第128～129回)

V類は孔列文の有無により類別し、さらに口縁部形態等から①～⑧の細分類を行った。なお、底部は、粗製深鉢 (IV類) と区別ができなかったため、V類と一括し報告することとする。

7類：刻目突帯文のみを持つもの

8類：刻目突帯文と孔列文を持つもの

- ①：外反する口縁部が内傾し、刻目突帯が口縁部外面の端部から5mm程下に付くもの。
- ②：直線的に伸びる口縁部が内傾するもの。
- ③：直線的に伸びる口縁部が直口するもの。
- ④：内湾する口縁部が直口するもの。
- ⑤：外反する口縁部が直口または外に開くもの。
- ⑥：波状口縁または刻目突帯が波状を呈するもの
- ⑦：外器面に縄文様を持つもの
- ⑧：胴部片

V類の土器は、胴部形態まで確認できる個体は少なかった。ただ、口縁部の傾きから推測される胴部形態は「く」の字に屈曲するものが多いので、直線的な胴部を持つ個体は少ないと推定される。また、V7類とV8類両者の点数による割合ではV7類が60%、V8類が40%となる。第127図に分布を示しているが、両者の分布の偏りは確認されなかった。

#### V①類 (第128回916～917)

916は、胴部屈曲がややあり、孔列文が施されない。内外面とも具設程度調整である。外面屈曲部にスズが付着している。917も孔列文は施されておらず、刻目は工具により施された可能性がある。

#### V②類 (第128回918～920)

918は突帯が口縁部外面に付き、孔列文が突帯下部と重なり巡っている。また、刻み目は指頭により施されている。919は突帯が口縁部外面から0.5cm程下に付き、刻み目は工具或いは具設によるものである。突帯直下に孔列文が巡り、内外面ともナデによる調整である。920は突帯が口縁部外面から0.5cm程下に付き、刻み目は指頭によるものである。また、孔列文が突帯の刻み目と重なっている。

#### V③類 (第128回921)

921は突帯が口縁部外面付近に付き、刻み目は指頭によるものである。孔列文は付かず、内外面ともに横方向の条痕調整が施される。

#### V④類 (第128回922～924)

922は2条の刻目突帯が巡っている。突帯が口縁部外面から0.5cm程下と胴部屈曲部外面に付き、刻み目は指頭により施される。突帯直下には孔列文が巡り、内外面ともにナデが施されている。

923は断面形がカマボコ状を呈する突帯を口縁部外面付近に貼り付けている。刻み目は指頭によるものである。突帯下の孔は内面からみると補修孔のようであるが、焼成前に穿孔しているため、未貫通の孔列の内面が剝離したものと思われる。924は突帯が口縁部外面付近に付き、刻み目は指頭により施されている。また、突帯直下に孔列文が巡っている。

#### V⑤類 (第128回925～929)

925は突帯が口縁部外面から0.5cm程下に付き、刻み目は指頭によると思われる。孔列文は付かず、口縁部外面が張り出す器形を呈している。926は突帯が口縁部外面から1cm程下に付き、刻み目は指頭によるものと思われる。孔列文が突帯下部と重なって巡る。927は突帯が口縁部外面から0.5cm程下に付き、刻み目は「U」字状の工具によるものと思われる。孔列文は突帯直下に巡る。928は突帯が口縁部外面から0.5cm程下に付き、刻み目はへら状工具によるものである。なお、孔列文は施されない。929は突帯が口縁部外面から0.5cm程下に付き、刻み目は棒状工具による先端押圧の可能性もある。また、突帯直下に孔列文が巡っている。

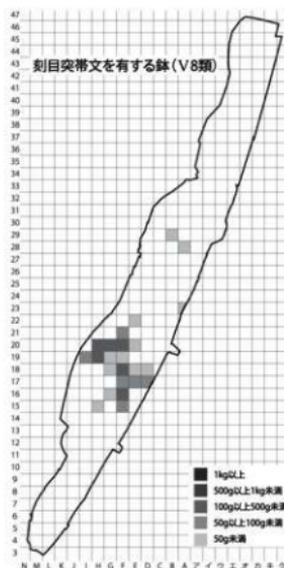
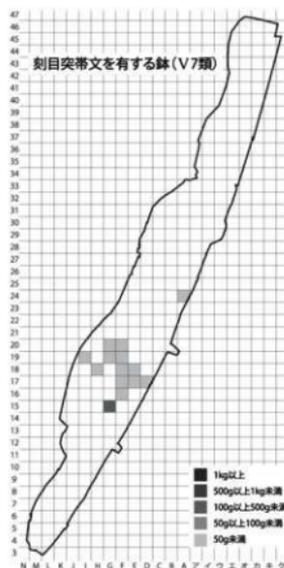
#### V⑥類 (第128回930、931)

930は口縁部から1cm程下に、波頂部から口縁部の流れに沿って突帯を貼り付けている。刻み目は指頭によるものと思われる。波頂部上面に刺突が施される。なお、孔列文は付かない。

931は突帯が口縁部外面付近に波状に付き、刻み目は指頭によるものと思われる。孔列文は突帯下部と重なっている。

#### V⑦類 (第129回932～934)

932～934は器形や胎土から同一個体と思われる。



第127図 刻目突帯文を有する鉢 (V7類・V8類) 重量分布図

932～934はF16aGrに位置する風倒木痕の跡より検出されているが、同一個体と判断できたものは、この4点のみであった。精製の鉢と思われるが、土器胎土は粗く、丁寧な作りではない。

突帯は1条で、口縁端部外面付近から0.5cm程下に付き、刻み目はヘラ状工具によるものである。なお、孔列文は付かない。2本組みの「く」の字を組み合わせた菱形文や渦巻き文、2本間に「V」字、「X」字を施した文様が細線状によって描かれている。

#### V⑧類 (第129図935～939)

刻み目を有する胴部は、直線的な胴部のもの(935)と、「く」の字状を呈するもの(936～939)が存在する。このうち935、936は貝殻腹線により刻み目が施されている。また、937はヘラ状工具により刻み目が作り出されている。938は胴部下半部で、刻み目は指頭によるものである。内面はナデによる調整がなされ、屈曲部付近には赤色付着物の痕跡が確認される。939も胴部下半で刻み目は工具が指頭によるものかかわらない。

#### VI類: IV類・V類底部 (第130～131図)

粗製深鉢・刻目突帯文を有する鉢の底部を一括した。底面の形態により上底(①類)、平底(②類)とした。

#### VI①類 (第130図940～948)

VI①類のうち、940～944はしっかりと上底のもの、945～948はやや上底を呈するものである。このうち、940、941、945、946は筒状の裾を呈するもの、942、943、947は裾が張り出すもの、944、948は胴部が胴内に開くと思われるものである。

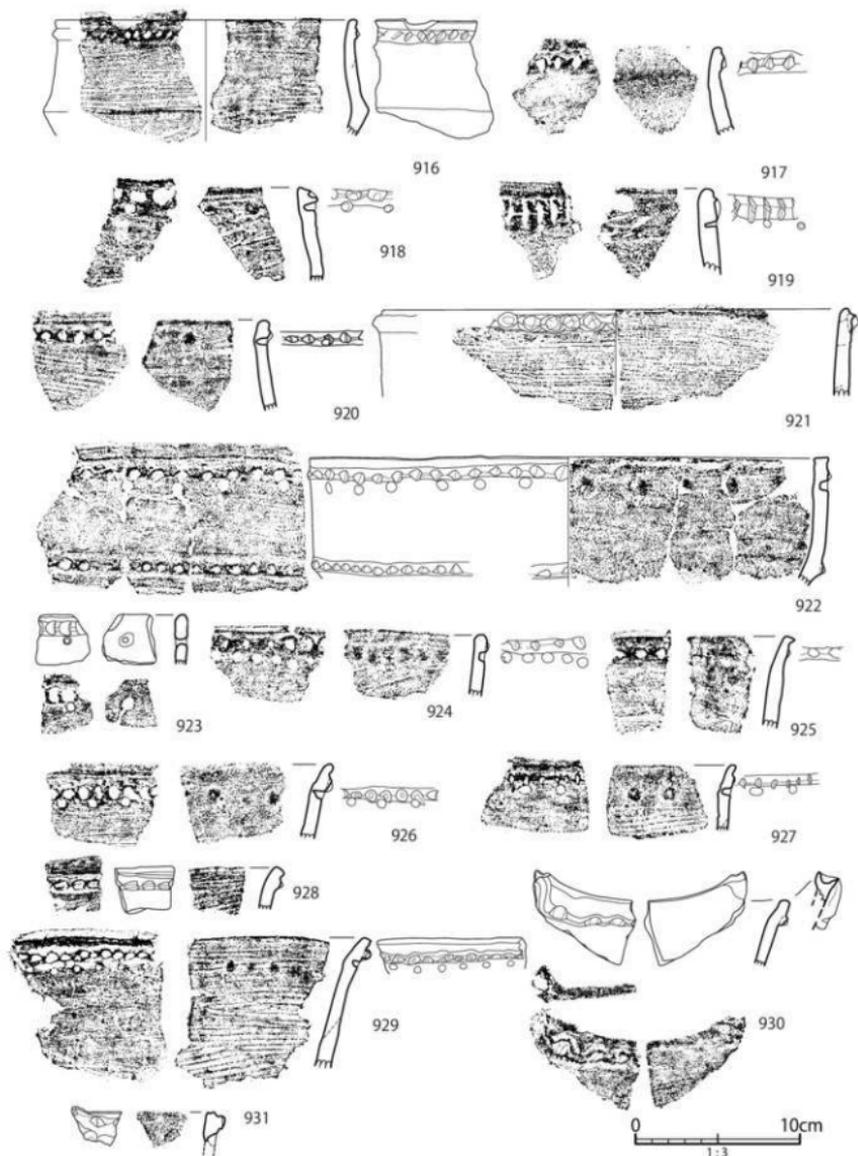
#### VI②類 (第130～131図949～961)

VI②類のうち、949～952は筒状の裾を呈するもの、953～960は裾が張り出すものである。また、961は底部が円盤状を呈するもので、胴部が胴内に開くと思われる。

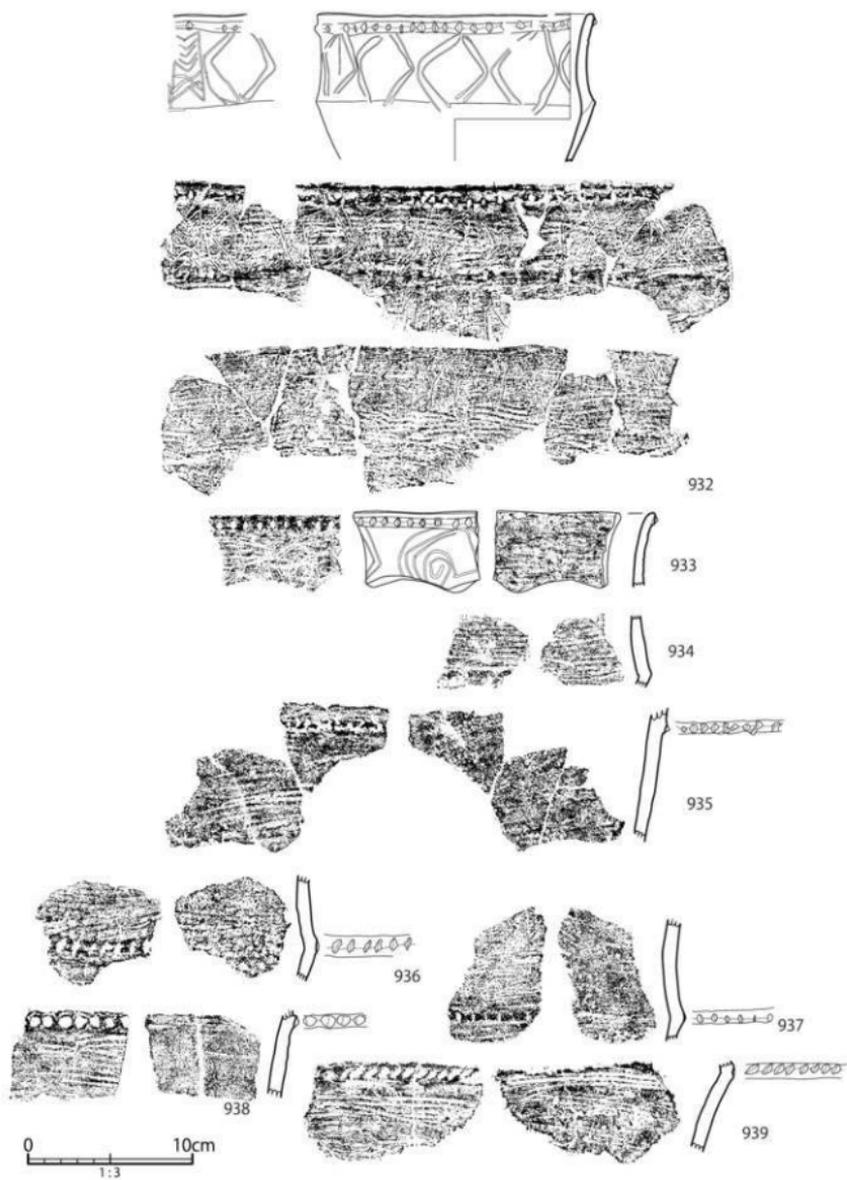
#### 土器片加工円盤 (第131図962)

962は土器片加工円盤である。深鉢胴部片を再加工したと思われ、内外面ともにナデが施されている。

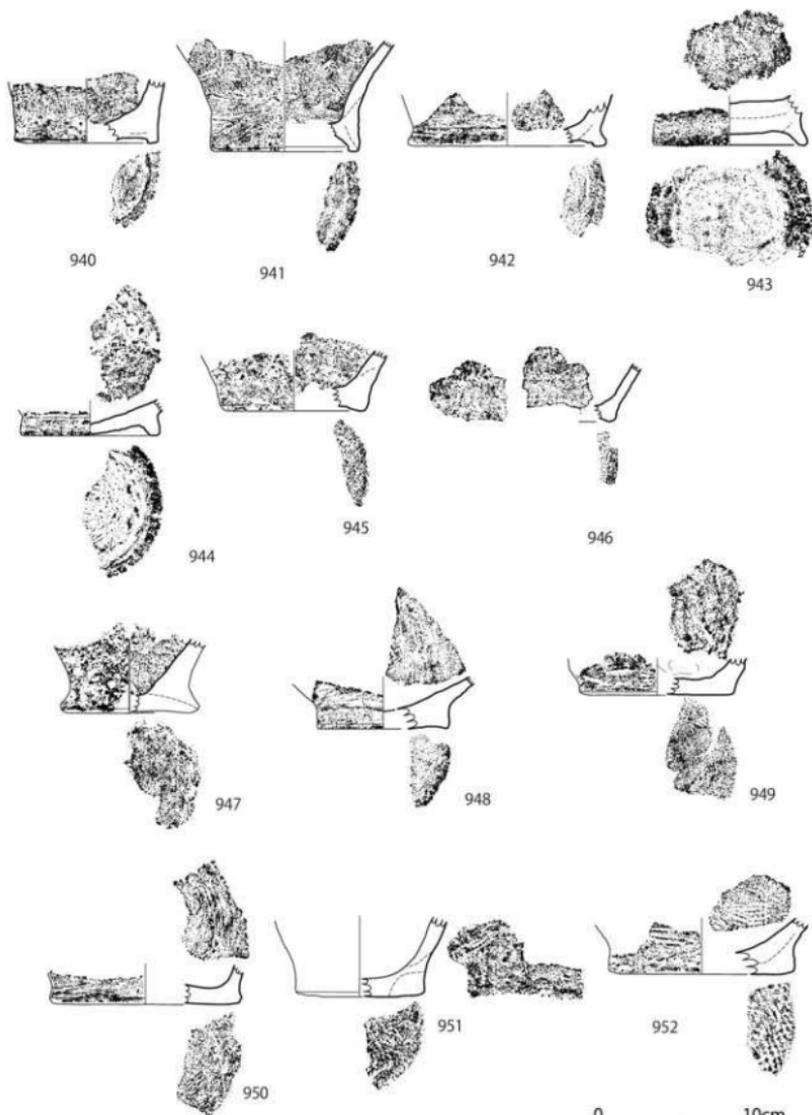
(文責: 高橋・岸田)



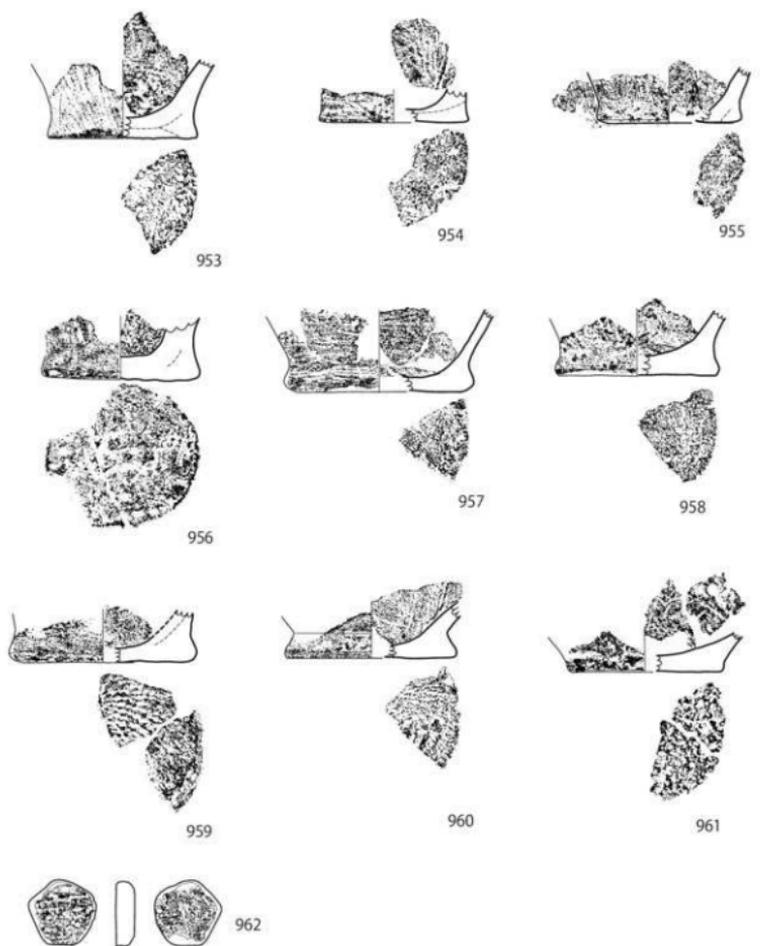
第 128 図 縄文時代晩期土器実測図 (18)



第 129 图 縄文時代晚期土器実測图 (19)



第130図 縄文時代晩期土器実測図(20)



第 131 図 縄文時代晩期土器実測図 (21)

(2) 石器 (第132図～133図: 写真図版85-96)

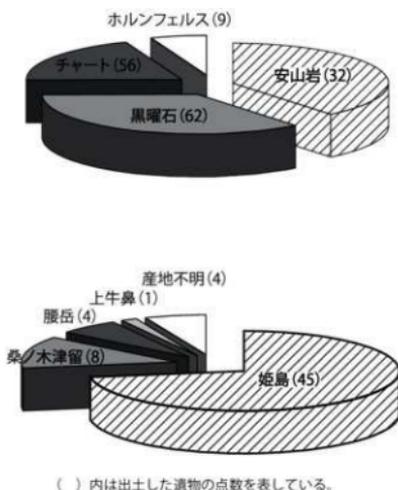
石器は縄文時代晩期の遺構並にⅡ層～Ⅲb層から石鏃、石匙、打製石斧、磨製石斧、礫器、石錘等、1,568点(石核・剥片は除く)が出土している(第8表)。本書には製品を中心に322点を掲載した。

石鏃 (第134～136図963～1044)

Ⅲb層(Kah)上位より出土した石鏃は159点を数え、このうち82点を図化した。石鏃を石材別に見ると安山岩製、黒曜石製、チャート製の3つに大きく分けられる。石鏃全体の比率で見ると安山岩製20%、黒曜石製39%、チャート製35%、ホルンフェルス製6%となる(第132図)。このうち、黒曜石製とチャート製については調査区の広範囲から出土が見られるが、安山岩製の石鏃については、縄文時代晩期の土器が集中する三次調査B区及びC区から多く出土する(第133図)。

安山岩製の石鏃は32点を確認したが、その中でも963～972に見られるような正面及び裏面の中央部分に研磨によって平坦面を作り出している局部磨製石鏃が特徴的である。963～967は表裏両面の中央部分に、968～972は表面の中央部分に研磨が見られる。平面形は三角形で、石器基部は平基や浅い切りをもつものが多く確認される。特徴的な形としては963、964、984、985のような側縁の先端部に近い位置に屈曲点をもち、将棋の駒のような形状をした五角形鏃がある。986、987は側縁の脚部に近い位置に屈曲点をもちU字状の切りがある。987は先端を尖らせ丸く加工している。990は先端部及び脚部が欠損しているが、残存部分から比較的大形の石鏃と推察される。

黒曜石製の石鏃は62点を確認した。45点が姫島産黒曜石製であるが、桑ノ木津留産黒曜石製や腰岳産黒曜石製のものなども確認できる。平面形は正三角形や二等辺三角形で、石器基部は浅い切りをもつものやU字形の深い切りをもつものが大半を占めているが、これらは縄文時代早期の黒曜石製の石鏃でも同様の形態的特徴を確認することができる。1002・1003・1013・1017の4点は側縁に鋸歯状の加工が施されている。1008は粗削りを行ったのみの石鏃未製品と推察される。



( ) 内は出土した遺物の点数を表している。

第132図 晩期石鏃石材割合図  
及び黒曜石製石鏃産地別割合図

チャート製の石鏃は56点を確認した。平面形は正三角形や二等辺三角形を呈し、石器基部は浅い切りをもつものやU字形の深い切りをもつものが大半を占める。これらは黒曜石製の石鏃と同様、縄文時代早期の石鏃と同様の形態的特徴を確認できるものである。1030はチャート製の石鏃の中では最大のものであるが、整った二等辺三角形を呈し先端が鋭く尖る。また、1034は緻密なチャートを石材とし、側縁は鋸歯状となる。1036と1037は側縁の先端部に近い位置に屈曲点をもつ石鏃である。

1040～1044はホルンフェルス製の石鏃である。1040は平面形が正三角形となる。1042は表裏両面とも主要側面を大きく残しつつ周縁部分のみに調整を加えて整形している。1043は表面が風化しているが、表裏両面ともに磨製が確認される。



#### 楔形石器 (第137図 1045・1046)

いずれも平面形が台形状である。1045はホルンフェルス製で両端部に階段状剥離が見られる。1046は珪質頁岩製であり下端と左側縁に細かな剥離が見られる。正面上の打面は平坦面となる。右側面は最も新しい剥離となる。

#### 搔器 (第137図 1047)

1047はチャート製で厚みのある剥片を素材とし、正面下に表裏両面から調整を施し刃部を形成しているが、細かな二次加工は確認されない。

#### 石錐 (第137図 1048)

1048はつまみ状の頭部を持ち、表裏両面からの調整により軸部を作り出している石錐である。軸部の断面形は菱形に近い。また、軸部正面の中央に走る稜は磨滅している。

#### 二次加工剥片 (第137図 1049～1052)

1049は不定形の剥片の側縁に、両面から細かな二次加工を施し刃部を形成している。1050は素材剥片末端に鋸歯状の細かな加工が見られる。1051は結晶片岩製で、粗い剥離の後に周縁に細かな調整を加え先端を尖らせている。1052はチャート製の縦長剥片を素材とし、素材剥片の打面を基部に残している。断面形は薄く、全体が粗い剥離によって整形されている。

#### 異形石器 (第137図 1053、1054)

1053は桑ノ木津留産黒曜石製で、平面形に抉りを持つ異形石器の欠損品と推察される。1054は桑ノ木津留産黒曜石製の異形石器である。表裏両面からの加工により整形されている。三叉状で右側部が欠損し、上端部が脚部と比べて菱形に張り出している。

#### 石匙 (第137図 1055～1061)

1055～1061は石匙である。いずれも両側からの抉りによってつまみ状の小突起を作りだし、さらに二次加工を施すことによって周縁に刃部を作り出している。1055は姫島産黒曜石製で表裏両面に剥離が施される。小突起部分は上半が欠損していると思われるが、その幅は0.5cmと狭い。1056、1058、1059はいずれもチャート製でやや大きな剥離面を残すが、周縁に調整が施されて整った形状をしている。1057は石器右側に自然面を残す。1060は欠損品と思われる。

全体の形状は不明で、つまみ部の剥離も粗い。

1061は表裏ともに剥離面を大きく残す扁平な剥片を素材としているが、縁辺の一部に剥離による調整が見られるものの、刃部とつまみ部を作り出してはならず二次加工剥片の可能性が残る。

#### 礫器 (第138図 1062～1065)

礫器は4点を図化した。いずれもホルンフェルス製である。1062は両面に自然面を大きく残す肉厚な礫の上部を粗く剥離している。1063はホルンフェルス製で風化が激しい。打面調整が介在する幅広剥片を素材とし、素材剥片の末端には微細な剥離が見られる。1064は円盤形で周縁に二次加工が施されている。1065は最大長が10cmを超える大形の分割礫を素材とし、裏面の一部に自然面を残しつつ縁辺に粗い剥離による調整が施されている。

#### 石斧 (第139～145図 1066～1153)

石斧としたものには、打製石斧と磨製石斧が出土し、遺物から観察される製作工程の様子から以下の分類を行った。

- I類：剥離により整形したもの
- II類：剥離→斫打により整形したもの
- III類：剥離→斫打→研磨により整形したもの
- IV類：剥離→研磨により整形したもの

I類は扁平となるものがほとんどで、基部に抉りを持つものと、抉りを持たずに基部から刃部に続くものが存在する。II類は、断面形が比較的肉厚となる。III類は最大長が10cm以下と小振りなものが多く、II類と比較して厚さは薄く、刃先の形状は鋸刃となる。IV類はIII類よりもさらに小振りとなる。刃先に明確な研磨の痕跡が認められ、断面形態は扁平となっている。

#### 打製石斧 (第139～143図 1066～1117)

打製石斧は遺構内出土のものを除き493点を確認し、そのうち53点を図化した。

1066～1077はI類で、抉りを有さない一群である。1066は隅丸の長方形を呈し、周縁部に表裏両面から調整が施されている。1067～1070はいずれも欠損が見られるが、側縁の形状から抉りを持たない一群とした。1071は平面形が幅4cm程の短冊型で、断面形はやや厚みがある。

1072～1077は基部に比べて刃部の幅が広がる撥型を呈する一群である。1076は正面に自然面を残し、素材の形状を基に刃部を設定している。刃部周辺では磨痕は見られないが、二次加工の際に生じた稜が研磨されたかのように磨滅しており、使用による磨滅と推察される。1077は正面に自然面を大きく残す比較的肉厚の礫を素材としている。周縁部に調整を加えて整形し、1076と同様に素材の形状を生かして刃部を設定している。

1078～1097はI類の中で側縁部に抉りを有する一群である。1080～1082、1084、1086、1088～1090、1094、1095は抉り部分の稜を潰す加工が施されている。1082は稜や刃部の磨滅が確認される。この磨滅は風化により不明瞭になったものとは異なり、稜の角が潰れて丸みを帯びているもので、使用による磨滅ではないかと推察される。

1088～1090はI類の中で基部に対して刃部の幅広くなる形状である。1090は剥離で生じた形状を生かして刃部が形成され、正面に自然面、裏面に主要剥離面を大きく残し刃部先端には調整が見られない。1091と1092は基部幅と刃部幅の差が小さく、両側縁のほぼ中央部に抉りが入る。

1093～1097は基部に抉りのあるI類の欠損品で、図化しなかったものも含め、その多くが基部に対して斜めに欠損している。また、1093は基部の裏面に擦れたような滑らかな部分の確認でき、装着痕の可能性を残す。

1098～1112はII類である。いずれも肉厚の礫を用いているところに特徴がある。1098～1105は礫の広い範囲に細かい竜打が見られる。1098と1101は正面の自然面の形状を生かして刃部が設定されている。1102は正面、両側面は竜打による調整が施されているが、裏面は剥離による整形のみである。1103は完形の石斧で、一部に剥離面が残るが全体的に細かい竜打が施されている。肉厚で断面形は丸く、最大長25.2cm、最大厚5cmと大形である。

1106～1112はII類の中で石器剥離面等に細かい竜打による整形が施されているものである。

1113～1117は、I・II類には含まれていないが、竜打が施されずに整形されるものである。1113は尾

錐山酸性岩類の基部である。本遺跡出土の打製石斧の石材としては尾錐山酸性岩類のもの3点と少ない。

1114と1115は裏面に大きく自然面を残す剥片を素材としており、自然面のカーブの形状を利用し、周縁を粗く整形して刃部を形成している。2点とも未製品の可能性を残す。1116は平面形が撥型を呈しているが基部は自然礫のまま、両側縁から刃部にかけて剥離による整形を施している。基部の正面に、帯状に磨られたような痕跡が残る変色していることから装着痕と推察される。

1117はホルンフェルス製で、扁平な自然礫を素材としており右側縁部には表裏両面からの調整により刃部が形成され、両端部には竜打痕が確認できる。また礫の正面及び裏面の両端の一部には研磨による線状痕が確認できる。

1118はホルンフェルス製で、自然礫がそのまま石斧状の形状をなしている。表面の風化が非常に激しく二次加工や竜打痕は観察されない。石器であるかを含め疑問が残る資料である。

磨製石斧 第144～145図1119～1153、第153図1257・1258

III類、IV類は遺構内出土のものを除き54点を確認し、そのうち37点を図化した。1119～1126はIII類、1132～1153、1257、1258はIV類である。

1119は剥離による整形の後、礫面全体に細かい竜打による調整が施されている。竜打痕により研磨による線状痕は確認できないが、刃部は蛤刃状を呈する。1120も細かい竜打による調整が見られるが、基部と裏面に研磨痕が確認される。1121は肉厚の蛇紋岩製で、全体に細かい竜打による調整が見られる。表裏の平坦面には研磨が施されているが、刃先は尖らずおよそ5mm幅で帯状に潰れている。1122は竜打により両側縁の稜を潰すように加工を施し、刃部周縁のみに研磨が施され蛤刃状を呈している。1123は剥離による整形後、竜打による調整を施している。剥離面を残しているがそれ以外はなめらかに研磨されている。

1127～1131は研磨された痕跡は認められないものの平面形及び断面形や竜打による加工などからIII類の未製品と類推される。

1132と1133は蛇紋岩製である。蛇紋岩製の磨製石斧は5点出土しているが、うち2点は弥生時代以降の整った住居跡の床面直上からの出土である(第153図1257、1258)。1132は長さ6cm、幅2cm程度と小形で、表面に剥離痕が残るが全体に研磨が施されている。1133は全体が丁寧に研磨されており側縁と平坦面の境に稜が立つ。また、刃部は欠損している。

1135は扁平で基部が欠損しているが、両側面は研磨による平坦面が見られる。裏面は基部方向と刃部周辺に研磨痕が確認できる。1136は扁平で両刃である。側縁及び基部の上面に研磨による平坦面が見られる。剥離による整形の後、研磨が行われた工程が観察される。

1137～1141は基部が欠損している一群であり、側縁にも研磨による平坦面ができる。また、正面と側縁の境には稜が立つ。1142はやや肉厚で欠損部周辺の側縁に敲打による調整痕が残る。1143は欠損品であるが、刃部平面形は研磨により丸くなっている。

1144は扁平で表裏両面とも剥離面を大きく残し、側縁に剥離による調整が見られる。基部は欠損しているが残存部から攪型状を呈すると推察される。

1145は表裏両面とも剥離面を大きく残し、刃部は裏面のみ研磨されている。1146、1147は肉厚であり刃部は始刃状に研磨されている。2点とも表面が剥かれるように欠損している。研磨により表面は非常に滑らかであるが、礫面に敲打による調整の痕跡が薄く残っているのが確認できる。

1148は両側縁が整理により欠損しており裏面も刃部以外は剥落しているが、石器残存部から肉厚の石斧であることが推察される。正面中央部には敲打による調整の痕跡が見られる。

1149～1153は小型の磨製石斧である。1149は表裏両面ともに調整の際の剥離面が大きく残り一見すると表面の凹凸が激しい印象を受けるが、剥離面以外は全体に研磨が施され、特に先端部側縁と刃部は入念な研磨が行われている。

1150は流紋岩製で、全体に丁寧な研磨が施され、側面にも研磨による平坦面が見られる。1151は節理により正面の大部分が剥落しているが、残存部を見ると全体が丁寧に研磨されていることが分かる。

1152は正面裏面ともに自然面を多く残り側縁に調整を施している。また、研磨痕は両端のみに観察される。1153は欠損により刃部の基部が半断できない。表裏、右側面に自然面を多く残り、両側縁に二次加工が、実測例正面下端方向に研磨痕が見られる。

#### 石錘 (第148～149図1154～1208)

石錘は遺構出土ものを除き244点が出土しており、そのうち55点を図化した。石錘のうち、打ち欠き石錘は217点、切り目石錘は7点である。

使用石材を見ると、石錘全体で砂岩製が54%とその大半を占めており、その他ホルンフェルス製が38%、尾鈴山酸性岩類製が8%となっている。

1154～1183は砂岩製で、このうち1154～1170は細粒で表面がざらっとした手触りの軟質の石材であるのに対し、1171～1183は表面が滑らかでやや青みがかつた硬質の石材である。なお、1184～1205がホルンフェルス製、1206～1208は尾鈴山酸性岩類製である。

石錘を全体的に見ると殆どが扁平な円礫を素材とし、長軸の両端部を打ち欠いた形状である。素材となる礫の形状や重量では、小さいものは1199のように親指程の大きさと重量は179gのもの、逆に大きいものは1208のように長軸が10cmを超え、重量が494.1gのものもある。各石材の大きさ・重さでは、尾鈴山酸性岩類製は規格、重量が大きくなるが、砂岩製、ホルンフェルス製では傾向を見出せない。

1168は長軸の両側縁に敲打による調整痕が見られる。また、1172、1190、1191は長軸・短軸のともに両端の四方を、1189は長軸の両端と短軸の一端の三方を打ち欠いているものである。また、1185は石器の長軸に対し直交する方向に、断面形が鋭い「V」字状となる線状痕が確認される。これは、研磨によるものではないと思われる、使用による痕跡の可能性を残す。1192は扁平な8cm程の粗粒円礫を素材とし長軸の両端を打ち欠いたものである。

#### 砥石 (第149図1209)

1209は親指程の大きさの砂岩の礫を素材とする。裏面の先端部と右側縁に研磨による平坦面が確認される。ここでは、砥石としているが、前述したIV類の磨製石斧未製品の可能性もある。

#### 棒状石器 (第149図 1210・1211)

2点ともホルンフェルス製で、長さ14cm、幅2.5cm程の細長い棒状の自然礫を素材としている。1210は両端に比べ中央部分が若干細く、断面形は楕円を呈する。上下両端と側縁に弱い敲打痕が認められることから棒状の敲石とも考えられる。1211は断面形が台形状で角張っている。上下両端部と左側縁に剥離による調整の痕跡が認められる。

#### 敲石・磨石類 (第150～152図 1212～1244)

敲石については敲打痕の種類により大きく2つに分別して掲載した。

i類：細かな敲打を行うことで礫面に敲打による平坦面が形成されるもの

ii類：敲打による凹凸の痕跡が明顯に残るもの

1212～1241はi類の敲石である。石材として最も多く確認されたのは尾鈴山酸性岩類製であり、その割合は90%を占める。最小のものは1223で丁度掌の中に収まるほどの大きさで、重量も147g程である。最大のものは1239で重さが1kgを超え最大長が10cm、最大厚が6cmを超える。

敲打の特徴をみると、1212～1214は一方からの敲打が行われているのに対し、1215～1238は敲打が表裏二方向から行われることで敲打が行われた部分に稜が立ち、断面形がそろばん玉状かそれに近い形状となっている。

1239～1241はi類の中でも、敲打が礫の周縁を巡るか敲打部分に稜が立たない一群である。1239は正面と裏面の中央部分に凹凸のある敲打痕も確認できる。

1242～1244はii類の一群である。これらii類の敲石については、そのほとんどが砂岩製であるが、尾鈴山酸性岩類製のものも若干含まれる。1242は表裏両面、1244は上端部に敲打の集中する箇所が見られる。1243は砂岩製で、上下両端部に凹凸の敲打痕が確認できる。

#### 台石 (第152図 1245～1248)

1245は最大長が30cmを超え、重さも6kg程で両手で抱えなければ持ち上がらない程の大きさである。正面と裏面に広い平坦面を持ち、正面と裏面、右

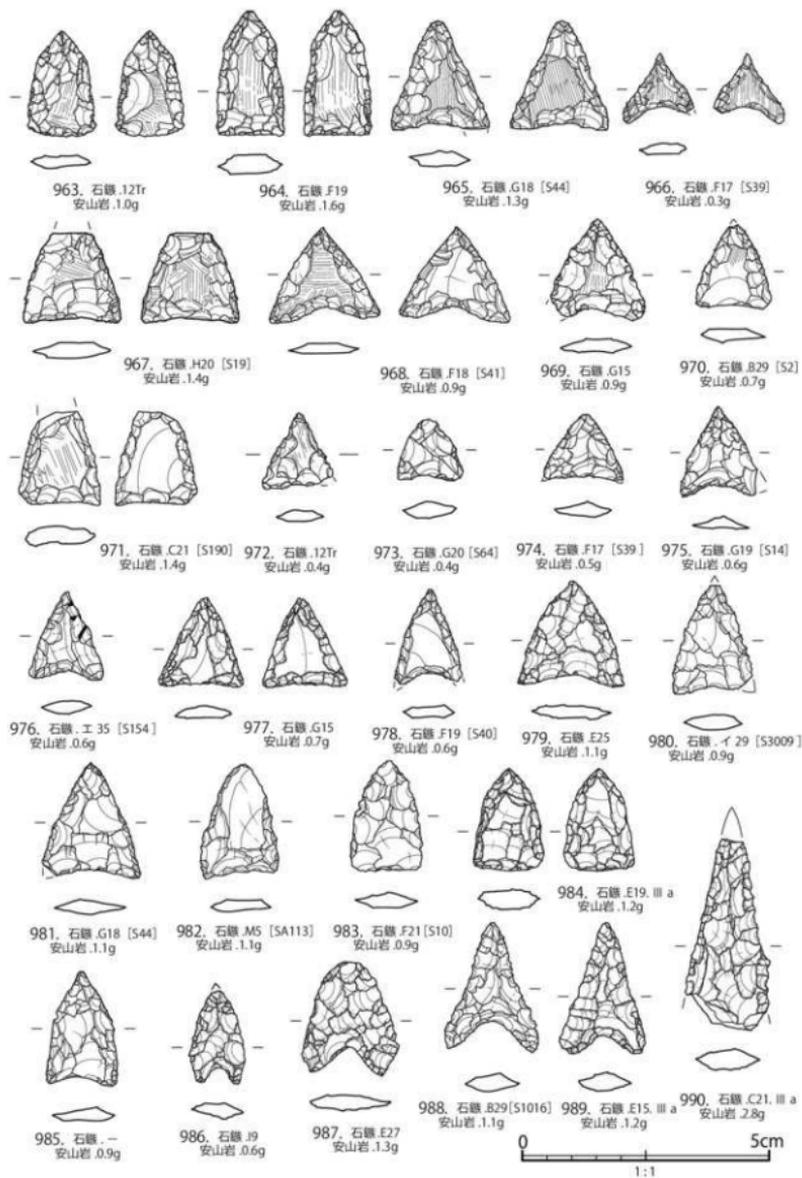
側面の広い範囲で磨痕が確認される。また、正面と裏面には敲打痕の集中する箇所が見られる。

1246と1247はともに砂岩製の扁平な礫を使用した台石であるが、目的に応じて使い分けられたように正面に磨痕、裏面に敲打痕が確認できる。1247は下端が丁度片手でつかめるほどの大きさであり上端と下端、両側縁部に敲打痕が認められることから敲石としての併用も想定される。1248は片手で持てる程の大きさのホルンフェルス製であり、丸みのある正面と側縁には敲打痕、平坦な面がある裏面には磨痕が認められる。

#### 岩偶 (第153図 1249～1252)

1249、1250、1252は砂岩製、1251はホルンフェルス製である。1249と1250は平面形が分銅形、断面形が台形状を呈する自然礫を素材としている。大きさは若干異なるものの、表面に擦り切った入れかのような痕跡が観察され、全体的な形状や外観が非常に似通っている。1249は裏面の中央部分に薄い線状のような浅い溝状の筋が確認される。

1251、1252は扁平な円礫を素材としており、表面に線状の痕跡が観察される。(文責：日高・岸田)



第 134 圖 繩文時代晚期石器實測圖 (1)